戦姫絶唱ヴァンパイア

とりなんこつ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神の知らぬヒカリで明けし世界。

その世界に超常ならざる存在が降りたつ。

夜の王にして、赤き貴種を名乗る彼が、久方ぶりの目覚めに見初めた相手は――？

※あらすじと本編内容に著しい乖離がある可能性があります。

目次

1．冬の吸血鬼 ―― 1
2．囚われの吸血鬼 ―― 14
3．お邪魔する吸血鬼 ―― 26
4．就職する吸血鬼 ―― 41
5．色々とバレて、デートする吸血鬼 ―― 54
6．上映する吸血鬼 ―― 79
7．手合せする吸血鬼 ―― 96
8．酒を酌み交わす吸血鬼 ―― 112
9．憤怒する吸血鬼 ―― 127
10．お見舞いする吸血鬼 ―― 146
11．海へ行く吸血鬼 ―― 164
12．求婚する吸血鬼 ―― 183
13．募集する吸血鬼 ―― 204
14．掌握する吸血鬼 ―― 226
15．君臨する吸血鬼 ―― 247

1．冬の吸血鬼

かつて人間は、巨大な塔を作ろうとした。
天に至り、自らの万能を示そうとするかの行為は、大地が怒り、幾千もの雷撃が降り注ぎ、塔ごと粉々に砕かれたという。
それでも人は挑み続け、海を渡り、大地を穿ち、空を飛ぶ。
ついにはこの星という揺籃から飛び出すほどの力を身に着けたようだ。
何千年、何万年にも渡って連綿と知識を受け継がせる能力こそ、人類を霊長と星に定めさせた根源であろう。
しかし、その能力を持ってさえも、遥か太古にそのヒトの上に君臨する上位存在があったことは伝えきれていない。
彼らは神と称されるに相応しく、同時に連中が居なくなったからこそ入れ替わりで支配者の座を得られたことを、どれだけの人類が認識しているものか。
いまや神の怒りに打ち砕かれることはなく、大地には長大な鉄塔が屹立している。

全てが天に向かって弓を引く、もしくはその喉元に刃を突き立てるかのよう。
それが神に抗おうとする行為の象徴なら、何とも滑稽な光景だ。
しかし、より高みへと至ろうとする気概は、まあ分からなくもない。
馬鹿と煙は、などと揶揄するのは、その資質を持ち合わせぬ低能の戯言だ。
古来より遥か高みという言葉が存在する。
天空より睥睨することこそが神の視点だ。
それを自由自儘に行える吾（ワレ）は、生憎だが神ではない。
神に近しい存在などと奢ったりもせぬ。
いや、奢るもなにも、神という存在そのものこそ無謬で愚昧な――――まあ、そんな些末なことはどうでもよいか。
神去りしこの世界を、吾は吾で満喫するだけだ。
鉄の塔の切っ先から宙空へと飛び立つ。
身からでた翼が、舞い散る雪を払った。
見上げれば虚空に浮かぶ夜の女王。
随分と身を持ち崩されたようで、かつての真円の美しい面影は色褪せていらっしゃる。
皮肉と一緒に興味を投げ捨て、吾は眼下を神の如き視点で睥睨する。

蟻の如く行き交う人の群れを眺め、ようここまで増えたとの称賛を、雪とともに降らせてやった。
さあ、そろそろ人間どもに、思いださせてやろう。
貴様たちの上に在る、吾のような貴き赤き王種がいることを――――。

人気のない裏路地へと降り立つ。
饐えた臭いと何やら機械の音が耳障りだが、腹を立てるほどでもない。
そこで吾は身形を整える。
本来持つ力を使えば何もかもが一瞬で済むが、そればかりでは長い刻を生きるに身に、味気がなさすぎる。
要は戯れだが、貴種であればこそ、派手に、慎み深く、なおかつ諧謔に富んだものが求められよう。
娯楽なしでも生きられるが、娯楽なくして生きるのは御免こうむるといった人間がい

た。

けだし至言だろう。

かの人間の言動にならい、吾も人間と同じ姿を取る。

掌に積もる雪を水鏡にし、鏡面を覗き込む。

…うむ。人間にとって絶世の美男子というやつだな。最近は〝いけめん〟ともいうらしいが。

路地を出て、行き交う人の群れへ視線を飛ばす。

若い娘が多く、みな煌びやかな装いなのは尚のこと良い。

じっくりと今宵の獲物を見定めて――――二人連れの少女たちに目を止める。

手をつなぐ姿も中々に見目麗しい二人だが、特に黒髪の娘の方が気に入った。

深奥から湧き上がってくる衝動を押さえつつ、吾は二人のあとを歩く。

二人が店先で足を止め、黄色い髪の片割れの少女が離れた。

取り残された黒髪の娘は一人きり。これを絶好の機会といわずなんと言おう。

「ねえ、キミ」

自分でかけた声はうんざりするほど甘い。まあ、これも座興のようなものよ。

「はい？」

振り仰いでくる娘の黒髪がふわりと揺れる。

「すごく可愛いねえ」
紛れもない本心が出た。
短いスカートには閉口するが、足が厚いタイツに包まれているのが良い。
分厚い上掛けは襟首のところが何やら毛で覆われているのも、また良いものだ。
その襟巻を外し、白いうなじが晒されるところを想像しただけで血が滾ってくる。
「あ、ありがとうございます…」
露骨に警戒の色を浮かべ身を引く娘に、吾は満面の笑みを向ける。
かのグロリア―ナさえ見惚れた笑顔に魅了の魔眼。
フフフ、これで陥落せぬ女子(おなご)など…！

「…あの、なんでしょうか？」
――――ぬ？
お、おかしいぞ？　吾の魔眼が効いておらぬとな？
「お待たせ―。…あれ？　どうしたの未来？」
「響ッ！　この男の人がね…」
未来と呼ばれた娘は、響と呼んだ娘の背中へと回り込んでしまう。
ふむ。こちらの娘もなかなかではないか。

「君も可愛いねえ」
「はあ、どうも」
　きょとんとした目で真っ直ぐに見つめ返される。
　ど、どうしたことだ？　なぜ吾の魔眼が通じぬのだ!?　しかも二人ともとなれば面妖な。
　見たところ、浄眼や破魔の瞳の持ち主ではないようだし…。
「何か御用ですか？」
「む？　あ、いや…」
「じゃあ、行こう、未来」
　娘二人して、スタスタと歩いて行ってしまう。
　…ここで無視し、他の娘子を物色すれば済む話。
　しかし興味が上回る。
　吾の魔眼を受け付けぬ娘たちよ。
「き、君たち、ちょっと待ちたまえ！」
　追いかければ、露骨に不審な眼差しで見返される。
　考えてみればこれもおかしな反応だ。
　今の吾の見た目は、そこいらの凡百の男の百倍は美しいというのに。

「いい加減にしつこいと、警察を呼びますよッ！」
未来という娘を背後に庇い、響と呼ばれた娘が吾の前に立ち塞がる。
折からの風と雪に、一時的に人通りは絶えた。ならばちょうど良いか。
「警察とはこの国の官憲か？」
吾は娘たちを見やる。
「呼べるものなら呼べばよい。この吾の姿を見ても正気でいられるならなッ！」
変身を解き、本来の吾の姿を晒す。
渦巻く魔力の猛々しい奔流に、手弱女などはたちまち失神してしまう。
されど目前の二人は、驚きつつもこちらを睨み返してくる。
なるほど、大した胆力よ。されば、さぞかしその血潮も美味かろう。
「響……！」
「大丈夫だよ、未来ッ！」
庇いあう二人の姿も美しいものだな。
「さあ、怯えるが良い！　傅くが良い！　されば赤き貴種（ノーブルレッド）として、吾が至上の快楽と愉悦を下賜したもうぞ！」
「ノーブルレッド!?」
娘たちの顔色が変わる。

「…未来、下がっていて」
「うんッ」
胸元からペンダントを取りだす黄色い髪の娘。
そこから溢れる波動に吾は驚く。
「なんと！　隻眼の神のトネリコ柄の槍かッ!?」
「これはわたしのガングニール！　神殺しの力だッ！」
ペンダントをこちらに突きつけ、娘は喝破してきた。
なるほど、吾の魔眼が通じぬ加護はそれに由来するか。
面白い。夜の王である吾に、去りし神代の武器で相対してくる娘とはッ！
「よかろう！　存分にかかってこい！　吾に屈して、その熱く脈打つ血を全て捧げよ！」
「…ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ――――！」

同時刻　S．O．N．G．本部
「都内で、ガングニールのアウツヴァッフェン波形を確認！」
「司令ッ！　響ちゃんが戦闘行動を開始しています！」
「なんだとぉ!?」
　緊急アラームが鳴り響く発令所内で、総司令風鳴弦十郎は目を見開く。
「現場の映像は出せないのかッ!?」
「いまやってます！　しかし、原因不明の障害でモニターが稼働しませんッ！」
　藤尭朔也がコンソール上で激しく指を動かしながら叫ぶ。
「近くの護衛の連中からの報告もないのか!?」
「そちらも全員から連絡がありませんッ」
　友里あおいの報告に、弦十郎は組んでいた腕をほどき卓上に叩き付けた。
「くッ！　いったい何が起きているというのだ!?」
　俄かに慌ただしくなる発令所に駆け込んでくる二つの影。
「おい、おっさん！　何がどうなっているんだ!?」
　本部へと待機していた雪音クリスと風鳴翼だ。
「都内で響くんが接敵し、ガングニールを使用して戦闘に突入したようだ」

「しかして、その立花の相手と様子は!?」
「現在、原因不明の障害で、一切の情報が把握できん」
「なら…！」
　いきり立つクリスに、弦十郎は力強く頷く。
「至急、クリスくんと翼は現場へと飛んでくれッ！　現時点では無謀かも知れんが他に手はないッ」
「了解ですッ！」
　言うが早いが翼が発令所を飛び出して行く。
「あのバカッ…！」
　悪態を一つ残し、クリスも後に続いた。
　輸送用のヘリコプターを回すよう指示を出しつつ、弦十郎は奇妙な胸騒ぎを覚える。
　ここ近日の平穏には錬金術師の気配すら感じなかった。
　それが唐突な戦闘の勃発に、原因不明の中継の阻害。
　弦十郎は不安を振り払うように頭を振る。
　神殺しのギアを纏う彼女に、生半の敵は相手にもなるまい。
　しかし、万が一ということもある。
　どうか無事でいてくれ、響くん…ッ！

果たして、現場へ急行したクリスと翼は見た。
巨大な血だまりの中でうつ伏せに倒れ伏す男と、その傍らにペタリと座り込み、全身を真っ赤な血で染めた立花響の姿を。
「お、おい、大丈夫かッ!?」
血相を変えたクリスが放心した響の肩を掴んで揺する。
「う、うぇ？　クリスちゃん?!」
「クリスちゃんじゃねーよ！　どこに傷を負ったんだ、おまえッ!?」
「あ、あたしは別にどこも…」
天羽々斬を抜き放った翼が油断なく周囲へと視線を飛ばしつつ、声音に警戒色を滲ませる。
「立花、敵はどこだッ!?」
「そこ…」
響の指し示す方向を見て、二人の装者は驚きの表情を浮かべたのは無理もないこと。

彼女の傍らで血だまりに伏す男は一見して被害者にしか見えない。
「…随分と派手にやったみたいだな」
余りの血の量に鼻白むクリス。
「こやつが誰かは知らぬが、過剰防衛の誹りは免れんか…？」
翼も同様に、不安げな眼差しを響と男で往復させている。
「違う！　違うの！　これはわたしがしたんじゃなくて…！」
「いや、どう見てもこれはおまえが一発喰らわしたあとじゃねえのか？」
「狼狽えるな立花。してしまったことはどうしようもあるまい」
その時、装者三人の会話に割り込んでくる声。
「響の言っていることは本当ですッ！」
「小日向！　おまえも無事だったかッ！」
建物の影から出てきた小日向未来に翼とクリスは安堵の表情を浮かべるも、小走りで近づいてきた黒髪の少女は真っ直ぐ血だまりの男を指さして叫ぶように言った。
「なんかこの人は、自分のことをノーブルレッドだっていってましたッ！」
「なんだと!?」
クリス、翼両名の顔が一瞬で引き締まる。
錆びた鈍色に非ずと公言していた三人組の所業は、最後の最後でほんの一時協力関係

にはあったものの、軽々に許して納得できるものではない。
「響はわたしを守るために…ッ！」
未来は真っ赤に染まった想い人の顔をハンカチで拭っている。
「しかし、これはやりすぎではないのか？」
「だとしても、この血の量は尋常じゃねえぞ？」
とりあえず顔の血だけは拭ってもらった響が顔を上げた。
しかし表情は、血の代わりに困惑の色に染まっている。
その表情を訝しく思いながらも、改めて何が起こったのか説明を求める翼。
すると全身を朱に染めたガングニールの少女は、盛大に首を捻りつつ解説を開始。
「なんかわたしがシンフォギアを纏った途端――――」
「途端？」
「この人が勝手に鼻血を噴いたんです」
「…はあ？」

2．囚われの吸血鬼

…む。ここはどこだ？

『お目覚めのようだな』

その声に続き、鋭い光は両眼を射る。

吾に向かってなんたる不躾な！

檄しようとして、全身が戒められることに気づく。

眩しすぎる光も天然のものではないな。

どうやら無様にも、吾は捕えられているらしい。

『どうした？　聞こえているか？　日本語は分かるか？』

「――――聞こえているわ慮外者め。吾を戒めるだけに飽き足らず愚弄する気か？」

答えると、吾の視界を染めていた光源が遠ざかる。

正面を見れば、どうやら硝子越しに赤いシャツ――――ふむ良い趣味だの――――を着た偉丈夫が立っていた。

『そいつは失礼した。しかし、生憎、いたいけな婦女子を襲う吸血鬼に対して、人間様の礼儀が通じるかは不勉強でしてな』

なんとも小憎らしい口を叩く小僧だ。
もっともその程度の皮肉など、吾にとって痛痒にもなりはせんがな。
むしろその物言いは、別の箇所が業腹よ。
「吾を吸血鬼と申すか。ふはは、なんともたわけたヤツよの」
『違うのか？』」
「少なくとも、貴様らの想像している怪物とはな。…それより、虜囚に話しかけても名乗りもせんのは、人間様とやらの礼儀かや？」
『重ねて失礼した』
偉丈夫は、ぺこりと頭を下げてきた。
『オレは国連直属特殊部隊S．O．N．G．総司令、風鳴弦十郎という』
ふむ。存外礼儀を弁えているヤツやも知れぬ。
「ならば、とこちらも名乗りたいところだが、些か身が不自由でな。少し緩めて貰いたいものだが」
『残念だが、それは出来かねる。おまえが手を出そうとしたのはオレたちの関係者でな。敵対行動と認識させて貰う』
「ならば、勝手に抜けださせてもらおうか」
言うが早いが、吾を戒めていた拘束衣と鎖は露と消える。ふむ、銀で編まれた鎖とは

ずいぶんなものだな。
　それに、四方八方に置かれた十字架と吊るされたニンニクなんぞには失笑するしかない。
『…吸血鬼なのに十字架もニンニクも恐れないのか？』
「たかが２０００年ほどしか経てない宗教の開祖の磔刑をなぜに畏れねばならぬ？　そもそも吸血鬼なんぞ、貴様ら人間の創作物だと言うておろうが」
『ならば、ノーブルレッドとは、おまえの仲間なのか？』
「仲間？　何を言っているか分からぬな。吾こそが赤き貴種（ノーブルレッド）。それ以上でもそれ以下でもありはせぬ」
　赤い服の偉丈夫が顔を歪める。
　何を疑問に思っているが知らぬが、しょせん凡百の悩みよ。吾が一顧だにするに能わず。
『ならば…おまえは何者だ？』
「ふふふ、聞きたいか？　聞けば安らかな夜はなくなるぞ!?」
『……』
　返事がない。どうやら恐怖に打ち震えているようだな。
　ふはははは！

ならば聞くがよい！
有象無象の人間よ、心して聞くがよい！
赤き貴種にして夜の王。四方三海に響きし吾の尊き御名を聞くがよい！
「吾が名は、ドラゴンタイガー・ダイステイラーなりッ！」

S．O．N．G．本部尋問室超硬化ガラスの向こう側『モニタールーム』

『吾が名は、ドラゴンタイガー・ダイステイラーなりッ！』

「……」

その場にいる誰もがポカーンと口を開けたあと、立花響がぼそりと言った。

「なんか売れない芸人さんの名前みたい…」

瞬間、雪音クリス、暁切歌、月読調の三人はほぼ同時に吹き出す。

一人風鳴翼が何事かと周囲を見回したのは、彼女だけ意味を理解できなかったからだろう。

マリア・カデンツァヴナ・イヴは辛うじて唇を震わせるだけでこらえたのは、おそらく最年長装者としての矜持だと思われる。

「…確か賭博（ギャンブル）にドラゴンタイガーというゲームがあったと思うから、それから取った偽名か？」

風鳴弦十郎をして眉をピクつかせていたが、あくまでいつもの表情を保っていた。

「でででも、おっさん、ひひひ、ど、どらごんたいがーって…！」

身体を二つ折りにして腹を押さえるクリスに、切歌と調は互いの額をぶつけ合って遠慮なく爆笑中。

現在、こちらの会話は隣室へ聞こえないようにスピーカーを切っていたが、その様子は強化ガラス越しに丸見えである。

『どうした貴様ら。何を悶絶しておるのだ？』

くだんの夜の王、ドラゴンタイガー氏が不審そうに尋ねてくる。
「どうしたもんかな…」
スピーカーを切ったまま、弦十郎はボヤいた。
確かに聖法意儀式済みの銀鎖と１０トンもの耐荷力を誇る拘束衣を引きちぎった膂力は恐るべきもの。
吸血鬼ではないとは言っているものの、ノーブルレッドと自称している当たりはとても看過できるものではない。
しかし、彼の名乗りのインパクトが凄まじすぎて、それらを一時的に因果地平の彼方まで吹き飛ばしかけている。
「あの、司令。わたしと彼を話させてもらえる？」
そうマリアが挙手してきた。普段の弦十郎であれば絶対に認めなかっただろうが、今の空気が「ま、いいか」という気分にさせていた。
弦十郎が許可すると、マリアは「ありがとうございます」と一つ頷き、マイクへと向かい合う。
「えーと、そこの売れない芸人さん？」
『誰が芸人だッ!?』
その反応にモニタールームのクリス、切歌、調はほとんど床に突っ伏すような格好で

笑い転げる。
　自分の呟きが思いの他ウケてしまったため、一緒に笑うわけにもいかない響は、たはは…といった苦笑いを浮かべていた。
『おう、そこな娘、響と言ったか？　なんと、吾のことが忘れずに会いに来てくれたのかッ』
　目敏く響を見つけた夜の王が笑みを浮かべている。
「って、ゴンタさんが言っているけど？」
　マリアに水を向けられ、響は目を丸くする。
「え？　ゴンタさん？」
「ドラゴンタイガー。略してゴンタでしょ」
「ぶふッ!?」
　今度こそ響も吹き出し、床に転がっていた他の三人の笑いも更にブースト。
「ははははは、なんとも痛快だなッ！」
「あなたは無理に笑わなくていいから」
「あいたッ!?」
　翼の眉間にビシッと凸ピンを決めて、マリアは再度マイクを握っている。
「で、ゴンタさん。聞きたいことがあるんだけど」

『誰がゴンタだッ！』

ついには四人が床で笑い転げる中、翼だけが何が何だか分からず不安そうに周囲を見回す様子はシュールだ。

マリアは、ようやく笑いを治めて目尻の涙を拭いながら立ち上がった響を指さす。

「あなた、この子を襲おうとして鼻血を出してぶっ倒れたって聞いたけど、どういうこと？」

すると、硝子越しのゴンタ氏はおもむろにいきり立った。

『そうそれよ！　響よ、おまえは日本人であろ？　大和撫子であろ!?　であれば、なぜにあんな慎みのない破廉恥な姿を晒すのだッ！』

「…へ？」

『年頃の娘が、か、肩と太腿を晒すだけでも大概であるのに、よもや、へ、へそまで丸出しにするなど…ッ！』

「ひゃあッ!?」

思わずＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．の制服越しに自分のおへそ当たりを押さえる響。

「…まあ、確かにシンフォギアの露出度は高いわね…」

そのマリアの呟きに、他の装者たちも笑いを引っ込めてなんとも居た堪れない表情になる。

戦う以上、ギアを纏わなければいけないことを承知している。
しかしながらマリアが言うとおり、下手な水着を着るより露出が多くなることもあった。
ノイズや錬金術師と相対しているときは気にならない格好が、一歩下がって俯瞰してみれば、なかなかに恥ずかしいものに思えてくる。
「ってゆーか。太腿やオヘソで興奮するって、ウブを通り越して、むっつりスケベってヤツじゃない？」
マリアは言う。
何気なく口にしたものの、むっつりスケベなどというニュアンスが伝わるかは疑問だ。
『こ、この吾がむっつりスケベだとぉ!?』
伝わった。
『このような侮辱、この世界に生まれ落ちてから三度目ぞ!?』
前に二度もあるんかい。マリアが唇だけで呟く。
「それで、むっつり吸血鬼さん」
『いい加減にせんか、そこの年増ピンク頭がッ！　さっきから黙っていれば下賤の分際で……!』

「…年増？　このわたしが、年増？」
『おうよ！　貴様から漂うオカン臭は隠しても隠しきれんわ！　若作りしても無駄無駄無駄ぁッ！』
「……」
『わかったらさっさと去ね！　吾はそこの響に用があるのだッ！』
額に青筋を浮かべた笑顔のままのマリアは、隣の響の制服の裾をまくり上げた。
「ひゃあッ!?」
完全な不意打ちに、引き締まった腹部とおへそが無防備に晒される。
次の瞬間。
「ぶふぉうっ!?」
間欠泉の如き血潮が、むっつり吸血鬼の両鼻腔より噴出。
それは硝子に衝突し、おびただしい血の滝を作るほど。
さすがにその光景には、モニタールームの誰もが息を飲む。
硝子の表面を血の滝が流れおちると、隣の尋問室には血だまりの中に自称ノーブルレッドが横たわっていた。その身体はピクンピクンと痙攣している。
「…死んだかしら？」
『殺す気かッ!?』

「あ、生きてた」
『…貴様ら、あくまで吾を愚弄する気だな？　もはや容赦はせん。容赦はせんぞッ！』
　言うが早いが、ドラゴンタイガー・ダイステイラーの身体が霞んで行く。
『霧に転じてしまえば、この部屋などからの脱出など容易いものよ…ッ！』
　語尾を霞ませながら、細かい霧の粒子は排気ダクトの中へと吸い込まれていく。
　この超常を目の当たりにし、さすがに装者全員が顔色を変えた。
「お、おっさん！　早く追わないと！」
「そうデスよ！　本部の外へ逃げられたら…」
　クリスと切歌に詰め寄られるも、弦十郎はのんびりと頬を掻いている。
「現在本部は潜航中だぞ？　さすがにこの深海で外へ逃げられはせんだろうよ」
「で、でも、もし誰か他の人が襲われでもしたら…ッ！」
　調の心配そうな眼差しに、弦十郎は考え込む。
「そうさなあ」
　弦十郎は壁際まで歩くと、そこの電話を取る。
　出た相手は発令所の藤堂朔也で、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．総司令は厳かに言った。
「今から、本部内の全てのモニターに、プレイメイトのＰＶでも流しておけ」
『…は？』

それから調や切歌をちらりと見て、
「未成年者もいるからな。そこいらへんは配慮するように」
『は、はあ…』
そういって、弦十郎が受話器を置いて数分後。
着信したものを取れば、今度の相手は友里あおいだった。
『…司令、第二区画で血まみれで悶絶している男を発見しました』
「うむ。見つけたか」
『なにやら「貴様たちは日本人の尊厳をなくしたのか!?」などと喚いているようですが…』
「…丁重にふんじばっておけ」

3．お邪魔する吸血鬼

気づけば、吾はまたもや囚われていた。
日に二度も捕まるとは無様極まりなし。
己自身を罵ったところで開眼し――すぐに閉じる。
きゃつらめ、今度は吾を拘束してこそいないも、まさか四方八方に女子の裸体の絵を張り付けておくとはなんたる破廉恥な！
吾に対する侮辱もいいところぞ！
激昂し、何もかも吹き飛ばしたい衝動に駆られるも、今日の吾はいささか血を流し過ぎていた。
いましばらく身体を休め、力を取り戻さないことには仕方あるまい。
瞑目し、耳を澄ます。
――ふむ。ある程度声は聞き分けられるな。
いかに部屋を固く閉ざしたつもりでも、吾の耳目から凡人が逃れるのは不可能よ。
『…えーと、師匠。そろそろ帰ってもいいですか？』
『うむ。そうだな。間もなく本部も接岸するだろうし。ご苦労だったな、響くん』

『あちゃ～、もうこんな時間だッ。未来、怒ってないといいんだけど…。それじゃ、失礼しますッ！』

ほうほう。響はあの未来という娘のところへ戻るようだな。

丁度良い機会だ。同道させてもらうとするか――――。

私立リディアン音楽院生徒寮前　ＰＭ１０：０８

立花響はタクシーを降りて寮へ飛び込む。

大幅に門限を越えてはいたが、そこはＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部からの根回しがあった。

だからといって大っぴらに出入りしては、他の寮生に訝しがられてしまうだろう。

静かに、最速で、最短で、一直線に。そのさじ加減はなかなかに難しいところだ。

カードキーを使うのももどかしく、部屋のドアを開ける。

後ろ手にしっかりとドアを閉めてから、響は最愛の人へと全力で声を放った。
「未来ッ！　たっだいま〜！」
「響ッ！　おかえりなさいッ！」
奥から走ってきた未来と、玄関先でしっかりと抱き合う。
「もうッ、響ったらッ！　弦十郎さんから連絡はあったけど、心配したんだよッ!?」
「あはは、ごめんごめんーッ。わたしもこんなに遅くなるなんて思ってなくてさー」
「でも良かった、何もなくて。ご飯できてるよ！」
「うん、お腹ぺこぺこだよッ！」
「それじゃあ、お話はご飯を食べながらゆっくりと、ね？」
「やった〜！　今日はビーフストロガノフだッ！」
「ふむふむ。なかなかに美味そうだな」
「ッッ!?」
反射的に未来を背中に庇う響。
そんな彼女らの視線の先にいるのは――――。
「むっつり吸血鬼ッッ！」
「誰がむっつり吸血鬼だッ！」
牙を剥きだしにする赤き貴種。

タキシードのような洋装を纏う威容は、まさに夜の王が相応しい。
「じゃあゴンタッ!!」
「ゴンタでもないッ！　吾の気高き名を聞き忘れるとは、霊長としての鼎の軽重を問うぞ!?」
「え？　え、えーと、確か、タイガー&バニー・アンダーテイカー？」
「おしいッ！　ッて大分違うわッ!!」
「めんどくさいから鼻血ブースケでいいや」
「適当にも程があるであろッ!?」
「あの…鼻血ブースケさん？」
「だからちーがーうーッ！　っと、未来か。そういえばお主には吾の名を聞かせてなかったな。では、改めて尊名を聞かせ賜うぞ!!」
未来をなおしっかりと庇う響の前で、夜の王は朗々と歌うようにその名を口にする。

「吾の名は、ドラゴンタイガー・ダイステイラーなり！」

「…売れない芸人さんかな？」
「だよねッ！　未来もそう思うよねッ!?」
「おぬしらなあああああ～ッ！」
「ッ！　やる気ですかッ!?」
「あ、いやいやいや！　別におぬしたちと敵対するつもりで来たのではないッ！」
そういってドラゴンタイガー・ダイステイラーは手を振る。
それでも響は油断なくギアペンダント握りしめたままだ。
「だから待て！　それを使って変身する気構えは分かるが、この瀟洒な部屋を血まみれにしても良いのか？」
「あ…ッ」

冷静に考えてみれば凄い脅迫もあったものだが、響に気づく余裕はない。
「吾がここにきた目的は、おぬしらと腰を据えて話をしてみたかったからだ」
「そんなことッ！　いきなり襲ってきたくせに！」
「その件について、これこの通り。正直、済まなかった」
「……」
「それともう一つ」
「もう一つ？」
「出来れば、そこな料理を、一緒に相伴させてもらえぬか？」

「…吸血鬼って、普通のご飯も食べられるんだ」
スプーン片手に茫然としている響に、夜の王は牙を剥く。
「そもそも吸血鬼という概念自体、おぬしら人間の創作物というておるであろ？」
「つまり、ドラゴンタイガーさんもわたしたち人間みたいにお腹が空くってこと？」

「うむ。お替り感謝するぞ、未来よ」
にっこり微笑まれ、未来も悪い気はしない様子。
というのも、この吸血鬼、見た目だけなら貴族然としてかなり秀麗な容姿を誇る。
それでいてがつがつとビーフストロガノフを食べる様は、ギャップもあって微笑ましく見えるのかも知れない。
「いや、こんな温かい食事を摂るのは数十年ぶりか。馳走になったな」
「お粗末さまでした」
すると、自分のビーフストロガノフを平らげていた響が素っ頓狂な声を上げた。
「あ、でもいまここに鼻血ブースケがいるなら、いまごろＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部は大さわぎかもッ！」
「だからなあッ！　……はあ、まずはいい。響が気にかけたのは、囚われの吾のことか？」
スプーンをくわえてコクコクと頷く響に、見た目だけなら好青年な吸血鬼は不敵に笑う。
「あすこに吾がいて、ここに吾もいる。ただそれだけのことよ」
「へ？」
「吾にとってはごく自然なことさ。もっともおまえたちに人間にとってその在り方自体

理解できぬかも知れぬがな」
「分身ってこと？　そして、ここまでわたしにくっついて来たってわけ？」
「まあ、おおむねそんな理解で良いであろ」
「じゃあ、いつの間にわたしにくっついてきたの？」
「こうだ」
言うが早いが黒タキシードの姿は霧のように霞む。
そのままキラキラとした霧はゆっくりと室内を回遊し、響の上着のポケットへと潜り込む。
響が慌ててポケットを探れば、すぐ目前に黒衣の吸血鬼は再び形をとっていた。
ニヤリと笑う姿に驚きつつも、響は改めて表情に警戒の色を露わにする。
「はい、ドラゴンタイガーさん」
「うむ、気が利くな」
お茶を手渡す未来に、響が半ば叫ぶように言った。
「もうッ！　未来ったら無防備すぎだよ!?　仮にも一度はわたしたちを襲ってきた相手なのに…ッ！」
「でも、きちんと謝られたよね？　それに何があっても響が護ってくれるって信じてるし…」

「未来…」
少なからず感動している響に、未来は横を向いて小声でぼそっと呟いてる。
「――――どうせわたしが止めても誰にでも手を差し伸べるでしょ？」
「ん？　未来、いま何かいった？」
「ううん。別に？」
満面の笑みを浮かべる最愛の人を傍らに、ようやく響も話を聞く気になったらしい。
「それで？　わたしたちと何を話したいの？」
「うむ。知っての通り、今日、吾はおまえたち二人に声をかけたわけだが。二人に魔眼が効かなかったのがちと気になってな」
「へ？　そうなの？」
「響、おぬしの場合、隻眼の神の加護があったと納得も出来るが、未来よ、おぬしは何かしらの加護を受けているのか？」
問われ、未来は少し考え込む。
「うーん…。心当たりがあるような、ないような」
遡ればＦＩＳのウェル博士にも何かしらの処置を施されたし、先だって風鳴赴堂に囚われときも同様で、かつ一旦は神の憑代となった身ではある。
神と引き離された時、それらはまとめて浄化されたのだと思っていたが、どうなんだ

ろう？

さらに穿った考え方としては、まだシェム・ハとしての神性の残留していて魔眼を払ったのかも。

「…何やら込み入った事情があるようだな」

重々しくいってから、吸血鬼は提案してくる。

「そこでだ。おぬしらの血を、少し吾に飲ませてくれないか？」

「はあッ!?　な、なんで!?」

「血は智よ。血を得ることこそが血得＝智恵だ。ほんの一滴でも飲ませてもらえば、おぬしたちのことを隅々まで理解するに吝かではない」

「で、でもッ！　それってわたしたちの首に齧りつくってことでしょ!?」

「本音を言えば、その誘惑に抗いかねるほどの情動を催しているところなのだが」

ねっとりとした視線を受け、未来がヒッ！　と首筋を手で押さえる。

「ああ、怯えさせてしまったらすまん。指先を針ででも突いて、ほんの一滴で構わんのだ」

「だとしてもッ！　なんでわたしたちなの!?　なんでそもそもわたしたちに声をかけたのッ!?」

魔眼が効かないと判明したのは声をかけた後である。響の根本的かつ最もな疑問に、

赤き貴種は真摯な表情と声で答えた。
「それはおぬしたちが可愛いからに決まっているだろ？」
「…ッ！　そんなナンパするみたいにッ」
「明言しておくが、軽薄な気持ちは微塵もないぞ？　おまえたちが見目麗しいのはもちろんだが、その魂の美しさは、長い時を生きてきた吾を持ってしても、なかなかの比類ないものと見ている」
　見た目だけは眉目秀麗で、かつ紺碧のような叡智を宿す瞳の持ち主である。
　響、未来ともに、異性からこれほど真っ直ぐかつ真剣な称賛を受けたことはなかった。例え相手が超常の存在であったとしても。
「う…」
「どうした？」
「恥ずかしいんですよッ！」
　動揺しまくりの響に、赤き貴種にして夜の王は笑う。
「鳥が羽ばたきを讃えられて恥ずかしがる道理はあるまい？　その在り様こそが美しいのだから」
　未来にいたっては顔を真っ赤に染めて俯いてしまっている。
「まあ、吾を捕えていたあの部屋の隣にいた連中も、みなそれは美しい魂の持ち主であっ

たな。機会があれば、ぜひ全員の血を賞味したいところだ」
――だが、あのピンク頭だけは後で絶対に泣かす。
心の中でそっと誓い、ドラゴンタイガー・ダイステイラーは改めて響と未来を見やる。
それから優しい声音で言った。
「吾がお主たちを見初めた理由を納得してくれたかや？」
「そ、それは分かったけれど…」
響は両頬に手を当てている。熱い。
どこかぼーっとした表情の顔を上げて未来は言う。
「…血を飲んで、悪いことしませんか？」
「未来ッ!?」
響が諌めるように声を上げるも、目前の吸血鬼は美青年の容姿に喜色を浮かべる。
「おお、くれるのかッ？　うむ、吾の名と赤き貴種の尊厳に賭けて、誓って悪用はせぬ。そもそも一滴程度では、さして吾の力とはならんからな。安心しろ」
「…響。わたしは一滴くらいなら上げてもいいと思うんだけど…？」
「んー…」
最愛の人の台詞に、響は考え込む。しかし、彼女もだいぶトロケきった顔つきになっており、その逡巡も長くは続かない。

「…一滴だけ！　一滴だけだからねッ!?」
「うむ、感謝するぞ!!」
　おそらく、世の中の女性のほとんどを魅了する満面の笑顔を前に、響と未来が理性を保てたのは、前述の加護があったからに違いない。
「…それじゃあ」
　未来が裁縫箱から待ち針を一本持ってくる。
　それを人差し指の上に当てた。
「んッ」
　プツっという微かな音のあと、白魚のような指の上に、血玉が浮かんでくる。
「ほら、響も」
「ありがと、未来」
　渡されて、響も未来に倣って指先へ針と突き立てた。
「では、馳走になろう」
　ドラゴンタイガー・ダイステイラーはその場へと跪く。
　そうして置いてから長身を折るようにして少女たちに顔を向けた。
「勿体ないから零すでないぞ?」
　その声に、未来と響は頷きあい、その牙の生えた口の上で指を翻す。

この時点で、両名共に、背筋にゾクゾクするような背徳的な快感を覚えていた。
二つの細い指の先端から、二つの小さな血の玉が、牙あるものの口へと落ちて行く。
それを舌先で受け止めて、吸血鬼は顔を上げた。
丹念に舌先で舐るように味わっている姿に、響も未来もまた背筋をゾクゾクとしたものが上下する快感を味わう。
「やはり、かつて味わったことのない至上の甘露よ。…思った通り、二人とも未だ乙女のようだしな」
「!!」
火が噴き出るかのように顔を真っ赤に染める響、未来両名。
「ふむ。なるほど、二人とも斯様な経験を…」
なお舌先を動かしながらどこか遠くを見るような眼差しをする吸血鬼だったが、不意にその顔が赤くなる。
「…なッ!? おぬしら二人して、毎夜毎夜あんなあられもない…ッ!?」
鼻を押さえながらふがふが言う吸血鬼に、響と未来は更に顔を赤くするも、そこは阿吽の呼吸で行動を起こしていた。
「未来ッ！」
「うん、響ッ！」

未来が浴室の扉を開け放ち、そこに響がむっつり吸血鬼を投げ込んだ。
そして未来が扉を閉じた途端、小さな爆弾が破裂するような音が響く。
びしゃっ！と扉に血が飛び散っている様は、まるでスプラッター映画の一場面のごとし。
未だ赤い顔で浴室前にペタンと座り込む二人。
取りあえず昼間のように真正面から鼻血を浴びる惨状は避けられたわけだが、まだお互いの動悸は早いままだ。
「…あ」
「どうしたの響？」
「今夜のお風呂、どうしよう？」
「…シャワーでよく洗い流せば、駄目かな？」
「こんなルミノール反応が出まくりの浴室なんて嫌だよ…」

4．就職する吸血鬼

ふむ。響と未来のところの吾は噴血して文字通り力を失ったか。
にしても、浴室に放り込んで蓋をするとは乱暴にも程があるわ。
まあ、一応挨拶して、今宵は引き取ろう。
…やはり少々力を使いすぎた。あやつらの血の一滴、二滴では補いはつかぬか。
ふふ、いずれ存分に喉を潤したいものだな。
ともあれ、今は眠るとしよう。
願わくばこの眠りは永久（とこしえ）の眠り――――死の眠りに繋がらんことを。

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部発令所　ＡＭ９：００
「では、今朝の引きつぎ事項はこれまでだな」

「はッ」
風鳴弦十郎の声に、ファイルを小脇に抱えた友里あおいが応じる。
そのまま身を翻す弦十郎に、藤堂朔也が声をかけた。
「司令、どちらへ？」
「司令室でデスクワークさ。なにかあれば呼んでくれ」
なんとも言えない表情を浮かべる部下に見送られ、弦十郎は発令所を出た。
もっぱら司令として指揮を飛ばしてばかりと思われる弦十郎であるが、役職に応じた書類仕事も存在する。
デスクワークは苦手ではないが、弦十郎が部下同様に微妙な表情を浮かべている理由は明白だ。
あのドラゴンタイガーとか名乗った吸血鬼。
一応、捕縛はしているが、あの存在をどう上層部に報告すればいいのものやら。
実際のところ、S．O．N．G．サイドとしても、よく分からないとしか言いようがない。
本日、錬金術師でもあるエルフナインを交えて再尋問する予定ではあったが、とりあえず先日分としての報告書を作らねば。
…当座は、玉虫色の文言を並べて乗り切るしかないか。

竹を割ったような性分の弦十郎にとって、その手のお役所的な表現は生理的に受け付けない。

しかし、時として腹芸や詭弁を弄さねばならない立場であることも重々承知していた。

ならばこそ彼がうんざりとした表情を浮かべていることも頷けよう。

滅多に在室していることのない司令室であるが、そのセキュリティは万全である。

掌と瞳の生体認証をクリアしなければドアは開くことはない。

これは、室内に書類としての極秘ファイルが幾つも保管されていることにも拠る。

一応全てはデジタル化されていたが、いまだ書式信奉が根強い日本であった。

部屋へ入れば、権威を示すように黒塗りのプレジデントデスクが正面にある。

不意に、弦十郎は眉を顰めた。デスク前の重厚なチェアがこちらに背を向けていたのだ。

以前に使った際には、そんな向きのままにして出た覚えはない。

その椅子がクルリと回転し、弦十郎は息を飲む。

――全く気配を感じなかったぞ!?

油断なく身構えながら、額を冷たい汗が伝う。

目下の悩みの種であるところの吸血鬼が、椅子に座ったまま笑顔を浮かべていた。

S．O．N．G．本部司令室　AM9：07

「おはよう（ブーナ ディミニャーツァ）」

吾の挨拶に、目前の偉丈夫はたじろいでいる。

たしか風鳴弦十郎という名だったかな？

「貴様、なぜここに…」

「人を吸血鬼呼ばわりしてくれたからに、ルーマニア語の挨拶はなかなかの諧謔であろ？」

「吸血鬼なら、先日のように霧に転じてどこも出入り自由というわけか…？」

拳を構えるその佇まいからして、人の身としては中々に練り上げられた体躯をしている。

かつてティリンスに居を構えていた半神半人と呼ばれた美丈夫を思いだすな。

「それで、わざわざ忍んできた用件はなんだ？」

「当意即妙で助かるぞ」
吾は胸の前で手を組み合わせて微笑んだ。
「お世辞は結構だ」
「実は昨晩、響と未来から血を貰ってな」
一瞬で空気が引き締まる。
ははは、この殺気、なかなかに気持ちが良いぞ。
「貴様、まさか響くんと未来くんを…!?」
「早合点するでない。何も喉首に牙を突き立てたわけではないぞ。ほんの一滴頂戴しただけだ」
「ならば、今度はオレの首に牙を突き立てるつもりか？」
「生憎と男の血を頂く気にはなれぬな。それが如何な美丈夫といえど」
しかし、まあ、なんとも伝承伝説に毒されている連中だな。
吾としては呆れるしかない。
「再三苦言を呈したと思うが、貴様等の考えている吸血鬼は創作物であると心得よ」
曰く。
吸血鬼に血を吸われたものも吸血鬼となる。
吸血された人間は、吸血鬼にとっての下僕となる。

吸血鬼は日光を恐れ、心臓に杭を刺されれば滅びる。
かのアイルランド人の小説が膾炙した結果であろうが、全ては噴飯ものだ。
「だいたい考えてもみろ。吸血鬼が吸血鬼を産むなら、今頃人類は疾うに総吸血鬼と化しておるわ」
「…む」
『吸血鬼ノスフェラトゥ』という映画の影響も大きかろう。黒死病をばら撒くもの＝死を撒くものというイメージを吸血鬼に定着させたからな」
「ああ、その映画ならオレも見たことはある。良い古典ドイツ映画だった」
「元は創作や娯楽と言えど、それを膾炙し、伝説を糊塗して元の真実さえ捻じ曲げてしまう。恐るべきは人の認識とその想いを伝える力よ」
「……」
吾が嘯くと、何やら弦十郎は腕を組んで考え込んでしまった。
わざと音高く指を鳴らしてその注意を引く。生憎、今日は人類の認知を積層させる力についての講義をしにきたわけではない。
「ともあれ、響と未来から吾は血を得た。引いては彼女らから先日の無礼の許しを得たといっても過言ではあるまい」
「…なにが言いたい？」

「なれば、吾を不自由に戒めておく理由は那辺に？」
被害者と和解した以上、吾を止めおく理由がなくなる。
現状のまま拘束を続ければ、吾こそが被害者になることは明明白白。
「では、解放しろと？」
「その物言いこそ無礼だな。吾が身のことは、貴様たちの言うところの不当逮捕、もしくは監禁というものに該当するのではないか？」
弦十郎が冷や汗を流しているのが分かる。
昨晩、色々と耳をそばだてた結果、このＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．という組織は古の技術の保管や超常に立ち向かうために作られた専門集団ということが分かった。
その主義に当て嵌めれば、吾も立派な活動対象となるだろう。
しかしこれ以上拘束しようにも、今のところ吾は無害だ。敵視する理由もない。
だからといって将来の禍根を断つために、などと名目を立てれば本末転倒。
世界平和とやらの大義の看板が空転するだけだ。
「……」
ギリリと歯噛みする風鳴弦十郎という男。おそらく命を賭けても筋を通す益荒男と見た。
ならば、あまり嬲るものではないか。

「そこで取引を所望する」
「…取引、だと？」
「うむ。吾は貴様等の組織の保護下に甘んじよう。もちろんそれなりの自由は確約してもらった上での話だがな」
「こちらのメリットは？」
「少なくとも貴様等の組織としてのメンツが立つであろ？」
「…申し出は理解した。しかしすぐに返事は出来かねる。検討する時間が欲しい」
「その時間を徒らに過ごすのも無為だな。吾のもう一つの要望にも応えてもらおう」
「断っておくが、職員の身柄や血液の提供は拒否させてもらうぞ？」
　こちらを睨みつけてくる気概や良し。
　吾はその圧を柳に風と受け流し、答える。
「なに、難しいことではない。この部屋にある書類を自由に閲覧させてもらえれば良いのだ」
「なんだとッ!?」
　先日、響と未来から吾は血を得た。
　よって彼女らの全てを理解――とは易々と至らない。
　本来なら脳裏に浮かぶはずの光景が、所々ぼやけている。畢竟、理解が覚束ない部分

が多々見られ、実に不思議だ。
さすが吾の見初めた娘たちよ、と自画自賛する一方で、原因に心当たりがないでもない。
昨今の人間流にいえば、吾は血を飲んだ人間のあらゆる記憶に対し、絶対的なアクセス権限を持っているとしよう。
その上でアクセスできない記憶が存在するということは、吾と同等、もしくは上位の存在と関わった証左だ。きゃつらのいる記憶そのものが吾の智を得ようとする能力と反撥、もしくは干渉してプロテクトを発動。結果、映像を結ばせないのだ。
ご丁寧に長広舌を振るって説明してやると、弦十郎はううむと太い声で唸っている。
「なるほど。確かにオレたちは幾つもの先史文明の遺産と闘ってきた…」
「しかして、解決策は単純よ。血で贖えないなら、智で補う。書物とされた智でな」
ゆえに、その闘いの記録を見せよ。吾の申し出も単純であろ?
弦十郎は少々逡巡する素振りを見せたが、結局頷いた。
「分かった。好きに閲覧するがいい。ただしこの部屋の中でのみと条件をつけさせてもらうが」
「言われるまでもない。そもそもこの程度、小一時間で読破出来るぞ」
そう密約を交わし、書類を紐解いた吾だったが、さっそく頓狂な声を上げることにな

るとはさすがに予想だにしなかったわ。

S．O．N．G．本部司令室　AM9：15

目前の吸血鬼の申し出に、弦十郎は実に縦横に思考を巡らす。
どうやらコイツも、先史文明と一方ならぬ関わりを持っているようだ。
極秘ファイルの閲覧については、司令室に気づかれず侵入が出来るのだ。その気になれば黙って見ることも出来るだろうに断ってくるところから、こちらに対して筋を通そうとする意志を感じる。
いかな超常の存在といえど、意思の疎通が出来て敵対や交戦の意欲もないというなら、敵視する理由はない。
むしろ読ませることによって、先史文明の遺産についての見解や情報を――――すくなくともその片鱗でも齎してくれるのではないか？
かのシェム・ハとの戦いは済んだものの、異端技術の発見報告数まで減退したわけではない。情報を得てこそ、対策の立てようがあろう。

そう判断し、ほぼ独断で許可を出した弦十郎が一身に責任を負う覚悟を決めたことは説明するまでもない。

さっそく手近なファイルを数冊抜き取って手渡せば、ぱらぱらと捲っていた吸血鬼がにわかに頓狂な声を上げた。

これには、さすがに弦十郎も度胆を抜かれかける。

夜の王にして赤き貴種。ドラゴンタイガー・ダイステイラーは大声でこう叫んでいた。

「フィーネ！　生きとったんかワレェッ!?」

「…おまえはフィーネと知り合いなのか？」
　たっぷり茫然としてからそう訊ねると、吸血鬼は苦虫をまとめて一万匹ほど噛み潰したような顔をしている。
「あの性悪女とは、恋仲だったこともある」
「なんだとッ!?」
「昔の話よ。…されど、なんで貴様が驚いているのだ？」
「それは、う、うむ、なんとも俗的な驚き方をすると思ってな」
「ふん。抜かれた血の気は俗気で補うしかなかろう」
　その台詞は本気か冗談か判断がつかない。
　ごほん、と誤魔化すようの大きな咳払いを一つしておいてから、弦十郎は尋ねていた。
「も、もし構わなければ、それら先史文明に纏わる詳細な話を聞きたいのだが…」
　口にして、迂闊と悟った時にはもう遅い。少なくともこちらが興味を持つ素振りを見せるのは下策も下策。
「そうか。知りたいのか――――」
　果たして吸血鬼は悪魔のような笑みを浮かべていた。

「ならば、改めて吾の待遇に関しての約定も話し会おうではないか？」

S．O．N．G．本部発令所　PM17：15

「…こちらが、今日付けで非公式アドバイザーに着任されたドラゴンタイガー・ダイステイラー氏だ」
「みな、よしなに」
吸血鬼の微笑みに、発令所に集められた装者たちは揃ってポカンとした顔つきで応えるしかなかった。

5．色々とバレて、デートする吸血鬼

S．O．N．G．本部発令所　１７：３０

「ちょっと司令！　どういうこと!?」

総司令からの非公式アドバイザーの就任発表に、まっさきに気色ばんだのはマリア・カデンツァヴナ・イヴ。

――こんな変態吸血鬼を身内に入れるなんて正気!?

そう声には出さないものの、全身のオーラでそう訴えているのが分かる。

「しかし、今のところ、ダイステイラー氏は何も実害を出していないしな…」

珍しく歯切れの悪い弦十郎の横で、渦中の吸血鬼は、ごく自然な動作で立花響の手を取っている。

「弦十郎の言うとおりぞ、ピンク頭。吾は響とも和解したしな。そうであろ？」

「え、え？　あ、はい…」

いきなりの展開に面食らってしどろもどろの響の手の甲に、吸血鬼は軽く口づけをする。

「今日から吾らは同胞(はらから)だ。よろしく頼むぞ」
「は、はい。こちらこそ、ゴンタさん…」
頬を真っ赤にした響にそう呼ばれた吸血鬼は柳眉を顰めた。
「そう、それよ。そのような不躾な呼び名は止めてくれんか？」
「なら、鼻血ブースケ？」
「余計不躾だわッ！　…ごほん、もっとこう、親しみのある呼び方をだな」
「でも、ドラゴンさんとかタイガーさんとかだと何か違うと思うし、ダイステイラーさんじゃ長いし…」
響は人差し指を下あごに付けて考えることしばし、
「じゃあ…ダイスさん？」
すると吸血鬼はにっこりと笑った。
「良き呼名かな。今後もよしなに」
優雅に一礼し、次に吸血鬼にしてS．O．N．G．非公式アドバイザーとなったダイス氏が向かい合ったのは、風鳴翼と雪音クリス。
両名とも泰然自若を装っていたが、内心では穏やかではない。
そんな二人を眺め、ダイスは目を細めた。
なんとも形容しがたい視線に、先にクリスが牽制する。

「なんだよ、なんかあたしらの顔についているのか？」
「いや、ふと懐かしさを覚えてな。なるほど、ここにあったか」
「…なにいってんだ？」
「ああ、すまんすまん」
　ダイスは軽く謝罪する。それから臆面もなく言った。
「しかし、ほんにおぬしら二人も美しいなあ」
「は、はあああッ!?　何言ってんだよアンタは!?」
　露骨に顔を赤くして動揺するクリス。
　対して表面上は動揺する素振りすら見せない翼は、長いアイドル稼業の賜物だろう。
「いかな叔父上のお墨付きとはいえ、正直に申せば、私はまだ貴方を信用したわけではない。されど、よろしくお願いする、ミスター・ダイス」
「うむ。その歯に衣も着せぬ物言いも清々しいぞ、ミス・ウイング」
　差し出した手をお互いでしっかりと握り合う。
「歌姫としての名声も見知っていたが、守り人の刃としての研ぎ澄ましも申し分なし。威風凛凛というやつだな」
「フッ、賛辞として受け取っておこう」
　次にダイスに視線を転じられたのはクリスで、彼女はその不思議な紺碧の瞳になにや

ら見透かされるような感覚を味わう。
「なんだよ？　あたしは握手をしてやるほど、先輩みたく優しくはないぜ？」
「…ずいぶんと苦労をしてきたようだな、雪音クリスよ」
「!?」
「機会があれば血の一滴でもくれんか？　朱玉の如き美しき魂の雫、味わってみたいものだが」
「ななに気持ち悪いこといってんだよ!?　そんなのお断りだッ！」
「まあ、いつでも心変わりしたら教えてくれ。吾は当面ここにおるでな」
小柄な身体を自分で抱きすくめるようにしているクリスから離れ、次にダイスが立ったのは暁切歌と月読調の前。
「こちらの美しいレディたちもよろしく頼むぞ」
「は、はいデス！」
頬を紅潮させる切歌。
一方、じーっという眼差しで見てくる調に、ダイスは優しい笑みを投げかける。
「どうした、射干玉（ぬたばま）の娘よ？　吾の顔に何かついているか？」
「男は見た目で信用しない方がいいって」
「ほう。しかして、ぬしには吾はどのように見える？」

「…分からない。悪い人じゃないような気もするんだけど…」
　首を振る調に、ダイスは哄笑する。
「はっはっは！　そもそも吾は人ではないからな。人品を見定めようとしているところが矛盾しておるわ」
　そういってダイスはポケットから取り出したものを調へと渡した。
「ほれ、飴ちゃんでも食べておれ」
「…あ、ありがとう？」
　訝しげに、それでも素直に調が受け取ったことを確認したのち、ダイスは笑顔を浮かべたまま後ずさり。
　司令席に立つ弦十郎の横まで戻り、小声で言う。
「あれがザババの加護を受けし娘御たちか？」
「あ、ああ。そうだが？」
「…いつの間にザババが女神になっておるのだッ！　吾の記憶にあるザババは逞しき男神ぞッ!?」
「いや、そこをオレに言われてもな」
　困惑する弦十郎。
「それと、あの月読調とかいう娘ッ！　貴様等、あんな年端もいかぬ幼子も戦わせておる

のかッ!?」
「はあッ?」
「あんなエトルタの断崖のような体躯をしてからに！　奇厳城が建つではないかッ！」
「い、いや、ああ見えても彼女はもう１６歳だぞ?」
　ダイスは目を見張る。
　それからマジマジともう一度調を見てから、悲しそうな表情になる。
「なら、あの娘に肉とパンと牛の乳を。吾の給金から天引きでかまわぬ」
「…よく分からんが、分かった」
　そして最後にダイスが視線を向けたのは、腕組みをしたマリアだった。
　威圧的な空気を隠そうともしない彼女の目前へ立つと、吸血鬼は唇を斜めに釣り上げる。
「おぬしとしては不本意の極みと察するが…」
「あら?　お気遣い感謝するわ。でも、翼の言った通り、わたしも貴方を信用してない。これは最初にはっきり言っておくわね」
「これはなかなかに手厳しいこと。しかし、吾に対して臆面もないとは並みの胆力ではないな。名にし負う世界の歌姫よの」
「ふんッ」

「さすが世界中継で裸んぼうバンザイ！　をしたことだけはあるわ――――」
「な、なにを言っているのよ!?」
　しみじみ言う吸血鬼に、マリアは激昂。
「狼狽えるな。おぬしが崇高な理念のもとに行動を起こしたのは承知しているぞ。それにしても、さすがにあそこまで恥を投げ捨てられるものかと感心しておる」
「……」
「どうした？　吾が人の行動を褒めることなど滅多にないぞ？　誇るが良い」
　発言自体はマリアのトラウマをえぐり出して塩をかけてこねくり回すかのよう。
　しかし、胸を張る吸血鬼は本気で称賛しているようで余計タチが悪い。
　他の装者たちがハラハラとして見守る中、マリアはこめかみに青筋を浮かべながらも笑顔で返す。
「お褒めにあずかり恐縮だわ、ミスタードラゴンタイガー・ダイステイラー、で良かったかしら？」
「うむ。如何にも」
「長いから、わたしはイニシャルで呼ばせて頂くわ。そうね、ドラゴンタイガーだからD・T。ドーテーでどう？」
「…いささかアルファベットの発音が異なるような気がするのだか？」

「そうかしら？　気のせいよ、ドーテーさん」
「ほうほう、世界的な歌姫という割には、訛りが酷いようだの。お里が知れようぞ」
「そういう貴方こそ、どれだけ女性に免疫がないわけ？　お臍を見たくらいで鼻血を噴く人が夜の王なんて、名前負けしているんじゃない？」
「ふ、ふはははッ！　夜の王にして赤き貴種（ノーブルレッド）たる吾は女性の扱いなぞ百戦錬磨ぞ！」
「そうかしら？　とてもレディーの扱いは熟れているようには思えないんだけど？」
「侮るなッ！　吾とて夜会――現代風に言えば合コンくらいの経験はあるわッッ!!」
　室内の過半数の人間が、
「あ（察し」
　となる中で、マリア・カデンツァヴナ・イヴは火の玉ストレートを全力投球。
「…もしかして、貴方、本当に童貞？」
「ど、ど、ど、ど、童貞ちゃうわッ!!」
　目に見えて狼狽する吸血鬼に、マリアの口元が邪悪なほどに三日月を描く。
「あらあらまあまあ。何千年も生きていると、魔法使いを通り越して吸血鬼になれちゃうってわけね？　新説発見だわ」
「だから童貞ではないッ！　そういうキサマは耳まで年増かッ!?　その実はまだ未通女（おぼこ）の分際でッ！」

「なあッ！　そんなわけないでしょうッッッ!?」
「嘘つけ！　貴様は生まれこのかた男と付き合ったこともあるまいッ！」
「冗談じゃないわ！　彼氏いない歴＝年齢なんてあるわけないじゃない！　処女賭けてもいいわよッ！」
　マリアの台詞に、室内のほぼ全員の人間が凍りつく。
　その反応に当の本人はようやく自分が何を口走ったか悟ったが、遅い。
「はっはっは、こやつめ、自分で馬脚を現しおったわ！」
「う、うるさいッッ！　この童貞吸血鬼！　いえ、童貞の中の童貞、童帝よッ！」
「やかましいッ！　この口だけアイアンメイデンがッ！」
「誰が拷問器具よッ!?」
　低俗かつ低レベルな罵り合いへの推移を、半ば呆れ顔で眺める他の装者たち。
　そんなクリスの傍に、切歌と調がやってきた。
「ねえねえクリス先輩。『どーてい』ってなんのことデスか？」
「ああッ!?　そ、そんなの知らねえよッ！」
「女子大生の先輩でも分からないことあるんだ…」
　飴をカラコロと舐めながら言ってくる調に、クリスは女子大生は関係ねーだろ、と呟いてから咳払いを一つ。

「ごほん。それでも、先輩としておまえらに教えてやれることはあるぜ？」
「それは何デスッ？」
興味津々の瞳を向けてくる後輩二人に、クリスはなお言い争いを続ける童帝とアイアンメイデンを指さしていった。
「あーゆーのを泥仕合ってんだ」

私立リディアン音楽院　翌日ＰＭ１６：１８

昇降口を出た小日向未来は、さっそく隣の最愛の人へと声をかけた。

「今日も一日お疲れさま、響」
「…うん」
答える響の返事は冴えない。
「まだ昨日のこと気にしているの？」
先日、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．に非公式アドバイザーとしてあの吸血鬼が着任したことは伝え聞いている未来である。
「そうなんだよねー。もう、マリアさんと凄いケンカしたみたいになっちゃってさあ」
愚痴る響。
爪先で小石を蹴飛ばすして、
「二人とも仲良くしてくれればいいのに…」
その主張は、未来にはとても良く理解できた。
立花響という少女は、手を取り合えば誰とでも分かり合えると心の底から信じている。
ある意味究極の博愛主義であり、見方によっては歪に映るかも知れない。
しかし未来は、そんな彼女の主義と心根を、心の底から愛していた。
「そうだ、響。マヨネーズってどうやって作るか知っている？」
「え？　知っているけど…」

「あれはね、水と油で、本来は絶対に混じり合わないものだったんだって」
なのに、水と油が結びつき、マヨネーズとなった。
その媒介となるのは卵。
響の顔に、みるみると理解の色が広がっていく。
「そっか。わたしが仲立ちして、二人に仲良くしてもらえばいいんだねッ！」
「むしろそれが響がずっとやってきたことでしょ？」
お互いに顔を見合わせ、うふふと笑いあう。
「よーし、やるぞー！」
「でも、ほどほどにね。迷惑になる一線を見誤っちゃ駄目だよ？」
「ありがとう。本当に未来に相談して良かったよ～」
そのままイチャイチャしながら校門を出ようとする二人の前に、一台の車が緩やかに停車。
黒塗りの圧倒的な存在感に、さして車に詳しくない響も未来も足を止めた。
二人は知らなかったが、車の名はトヨタ・センチュリー。日本国のやんごとなき方々の御料車ともなった国産高級車である。
パワーウインドウが開く。
運転席から見えた顔は。

「ダイスさん!?」
「おう、響、未来」
サングラスをかけて笑う吸血鬼に、響は尋ねる。
「どうしたんですか、一体？」
「なあに、デートに誘いに来ただけだ」
「デ、デートぉ!?」
あからさまに狼狽する響。彼女ほどではないが、未来の反応も準じている。
「親しくなった男女は逢瀬を重ねるものではないか？」
響と未来が顔を見合わせる。どうしよう？　彼女らをしてお互いの考えが一致することも多いが、逡巡することまで一致するのは珍しい。
「とりあえず、立ち話は通行の邪魔であろう？　まずは乗れ」
促され、二人とも素直に後部座席に乗り込んだのは、思い返せば不思議である。
走り出したセンチュリーは、驚くほど振動もなく滑らかな乗り心地。
それもそのはず、この車は鎌倉の風鳴本邸より接収されたもの。
かの風鳴赴堂の外出の際に使用されたもので、その静粛性、居住性、防弾、対爆といった強靭性は、御料車の数段上を行く。
本部より無断で持ち出したダイスのせいで一悶着が起きるのだがそれはまた別の話

で、響も車の出所よりも別の疑問を口にしている。
「ダイスさんって車の運転出来るんですか？」
「ジェット飛行機の操縦も出来るぞ。自分で飛んだ方が速いからせぬがな」
呵々と笑う吸血鬼に目を白黒させる響と未来。
「でも、デートって…」
そう口にする未来の声は、自覚はないが新鮮だ。
なぜならこの彼女らにとってのデートとは彼女ら二人で行うもの。
異性とのデートは、生まれて初めての体験である。
「まずは服を物色しに参ろうぞ」
バックミラー越しにダイスは言う。
ちらちらと視線が二人のスカート付近を撫でる。
「まったく、おぬしらと来たら、この寒いのに素足を剥き出しにしおってからに…」
いかにも、けしからん！　といった口調に、響も未来も少し吹き出してしまう。
マリアさんが言っていたからってわけじゃないけれど、本当に奥手というかウブな人なんだ…。
響自身、妙にこの吸血鬼に対して親しみを持ってしまっていることの自覚はない。
安定した滑らかな走りで高級車はやたらと格式高そうな洋装店の前に停まる。

一目で若年の客はいないと思われる佇まいは、もちろん響も未来も来るのは初めてだ。
「さあさ、降りてきたまえ」
後部席のドアを開け、優雅に外へ誘うダイス。
彼に手を取られ、未来、響の順で車外へと出る。
いつのまにかこじゃれたスティックをもってクルリと回す吸血鬼を先頭に、店内へと入る。
店内の雰囲気は一言でいえば荘厳。
落ち着いた照明もあり、いかにも歴史を感じさせる。
「今日は吾に見立てさせてもらって良いか？」
「は、はあ…」
重厚な服に圧倒された響と未来は、次の呟きを聞き逃している。
「ほぼ百年ぶりに来たが、まるで内装も変わってないようでなによりだの」
「いらっしゃいませ」
燕尾服を着て、豊かな白髭を蓄えた老人が恭しく礼をしてくる。どうやら彼が店主のようだ。
「それでは、彼女にはこちらを。向こうの娘子にはこれが似合うかの」

「承りました」
すると、奥の方から、お針子らしき年季と恰幅のたっぷりとしたご婦人たちがそろそろと出てくる。
「え？　え？」
響、未来とも、何がなんだか分からないまま奥へと連行。
そして数十分後。
椅子に座って高々と足を組み優雅に紅茶なんぞを嗜んでいる吸血鬼の前に、まるで別人のごとく着飾った二人が戻ってくる。
「おお！　思った通りよう似合っておるわ！」
ダイスの忌憚なき称賛に、響も未来も戸惑うしかない。
なんせ二人して着せられているのは、手首から首まできっかりと覆ったビクトリア朝風のドレス。
完全に足を隠す長いスカートの裾は、床の上を引きずらんばかりである。
「そ、そうかな…？」
自分で自分を見回して、響。
黄色を基調とした優雅なデザインのドレスであるが、もちろんこんな服なんて着たことはない。

ネイビーブルーのドレスを着た未来も同様だが、「うん、響、似合っているよ」と相手を称賛出来るあたり、まだ余裕があるのかも知れなかった。
「いや、本当に似合っているぞ」
立ち上がったダイスは、響の後ろ髪を梳くようにする。
「ひゃッ!?」
思いがけず可愛い声を出して仰け反る響に、
「す、すまぬ」
謝罪をして、ダイスは老店主へと向き合う。
「相も変わらず良き仕事だな」
「ありがとうございます」
賛辞とともにダイスが店主に渡したものに、響は目を剥く。
どう見ても封を切ってない一万円札の分厚い束。
「そ、それって…!?」
「支払いは誘ったものがするのが礼儀ぞ?」
「じゃなくてッ！　そんな大金…ッ！」
「吾とて伊達に長くは生きておらん。蓄財はしておるで心配無用だ」
事も無げに笑って断言する吸血鬼だが、先日、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．に非公式ながらも着

任するにあたり、土産だと無造作に本部の弦十郎へ提出したものがある。
数本のインゴット。刻印こそされていないものの、純度は９９％以上の本物だ。
これにはＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．総務部もニッコリ。しかし、その処遇を巡っても一悶着が起きるのだが、これもまた別の話である。
はっきりいって、貴族ドレスは慣れない人にとっては歩きづらい。
ダイスにエスコートされて再度車に乗り込んだ三人が向かったのは、郊外だった。
市街地から外れ、閑散とした住宅街に突如現れた洋館。
広い庭先に車を停めれば、ウエイターに出迎えられた。
「いらっしゃいませ、ダイス様」
「うむ。よろしく頼む」
瀟洒で歴史ある佇まいのこの建物はレストランのようだ。
豪華なアンティークの調度と煌びやかなシャンデリア。普通の女子高生には無縁の世界。
もちろん響も未来も圧倒されっぱなしで、着なれぬドレスでしゃなりしゃなりと案内され、着席。
大輪の花が置かれたテーブルの上で、食前酒替わりのアップルサイダーが二人の少女の前に供された。

間もなく運ばれてくるのは前菜で、そのタイミングでダイスは指を鳴らす。
すると、奥のカーテンが緩やかに割れ、菅弦楽器とチェロの奏者が姿を現す。
流れてくる穏やかなＢＧＭはもちろん生演奏。
「…すごい…」
「欧州の宮殿の晩餐にはだいぶ劣るがな」
「ううん、それでも凄いですよッ！」
「確かに吾の前の二輪の花は、かつてのウィーンの名花にゆめ劣らぬな」
「そんなこと、ないです…」
「いや、二人とも、本当に美しいぞ？」
懐かしさを滲ませた物言いで少女二人を赤面させる吸血鬼。
次々と運ばれてくる料理を食べる様子も、非常に楽しんでいるようで屈託がない。
未来もしてどうにか料理の味を楽しめる余裕が出てきたが、そんな彼女が気になったのは最愛の響の動向。
非常な健啖家でも知られる響の食事の進みが、目に見えて遅いのだ。
とうとうデザートすら半分残してしまう響に、未来は思わず声をかけてしまう。
「どうしたの響。服がキツいの？」
「ううん、未来。なんだか胸がいっぱいになっちゃって…」

響の頬が赤く上気していることに、未来は悟らざるを得ない。
想い人がいつになく緊張していることを。
それはなぜ？
そんなの分かりきっている。響はここまで異性に女の子扱いされたことはないからだ。
長い間、響と一緒に過ごしてきた未来だからこそ、それは自明。
まったく免疫がなかったところに、今日の豪華絢爛たるデート。
衝撃に、一時的に食欲が減退するのも理解できる話だった。
一方、響にしても、未来に看破された通り、初めての体験に戸惑いっ放しである。
まず、響にとっての身近な男性と言えば父である洸しかいない。
中学生の多感な時期に迫害の波に翻弄されていた彼女が、当時の同年代の異性に関心を抱けるはずもなく。
シンフォギア装者となって、風鳴弦十郎を始めとした大人の男性との関係も構築。
特に師匠である弦十郎には憧れを持たなくもなかったが、それはやはり大人や父性に対する希求のウエイトが大きいような気がする。
そんな彼女の寄る辺となった小日向未来に対しては、同性であるものの、どちらかと言えば男性的な立ち位置で接してきていた。

ならば、やはり面向かってこのように一個の女性扱いされるのは、本当に初めてのこと。

――――胸と頭の奥がなんか熱くて、ふわふわって落ち着かない気分。

もしかして魅了の邪眼とか使っているのかな？

そう思って顔を上げれば、吸血鬼のサングラス越しの瞳と目線が合う。

眼差しは優しく、浮かべる笑みも紳士的。

どうした？、と首を捻られ、動悸が跳ね上がる。

響はドレス越しに胸を押さえて思う。

あれ？　わたし、どうしちゃったんだろ…？

「あ、あの！」

その声は、響ではなく未来が発したもの。

「そろそろ帰らせてもらっちゃ駄目ですか？　明日も学校だし、宿題もあるし…ッ！」

「お、そうか。おぬしたちはまだ学生の身だったな。ならば、遅くまで連れ回すは無粋か」

存外、あっさりとダイスは立ち上がる。

なぜかふらふらとする足取りになっている響を未来が支えレストランの外へ出た。

晴れ上がった空は星が澄んでいた。雪こそ降ってないが冬の夜風は刺すように冷た

い。
「…ん、ありがとう未来」
冷気のおかげか幾分頬から赤みが抜け、しゃんと立つ響。
「大丈夫？」
その顔を覗き込む未来の視線は何か言いたげ。
「どうしたの、未来…？」
「響、あのね」
言い差したその時に、ダイスが戻ってきた。
「おう、済まぬ。レディたちに風邪を引かせるわけにはいくまいて」
車へ乗せられた。たちまち効いてくる暖房に、響がほう、と息を漏らしてから未来へ向かい合う。
「それで、未来。さっきはなんていいかけたの？」
「う、ううん。いいの」
「？」
緩やかに車は走り出し、公道へと出た。
その段になって未来は慌てて言う。
「あ、今日は、ご馳走さまでしたッ！」

「ご馳走さまでしたッ！」
　追随する響の声に、ダイスは前を見ながら笑みを浮かべている。
「なに、吾も久々の晩餐は楽しかったぞ」
「それに、こんな凄い服まで買ってもらっちゃって…」
「次の機会もあれば、是非また着せてみてもらえるかの？」
「はいッ！」
　意気込んで返事する響は、未来は明らかに妬心のような色を瞳に浮かべてるのに気づかない。
　それどころか、響は彼女にしては珍しい質問を口にしている。
「あの、ダイスさん」
「なんだ？」
「その…師匠から聞いたんですけど…。昔、フィーネさんと付き合っていたって…」
　立花響が他者の恋愛に疑問を呈することは殆どない。その珍しさを本人も自覚したらしく、慌てて言い添える。
「あ、その、フィーネさんとは闘ったことがあったから、昔はどんな感じだったのかなーって」
　対して、ドラゴンタイガー・ダイステイラーの声のトーンは静かに下がっていた。

「おぬしらの尽力もあって、あやつの本懐を妨げ、そして遂げさせてくれたようだな…」
カ・ディンギルの砲撃の月破壊によるバラルの呪詛からの解放。
それは立花響、雪音クリス、風鳴翼の三名の活躍で一旦阻止されたものの、シェム・ハとの決戦前に結局解放されていた。
もっともその決戦後には、フィーネの魂はかつての想い人であったエンキの魂と共に浄化されている。
S・O・N・G・司令室の全ての資料を読了したダイスの声には、ある種の感慨が込められているように思えた。
その感慨の声音に、響の感性も呼応する。
…ひょっとして、迂闊な質問をして傷をつけてしまったんじゃ…？
「あの、ごめんなさ」
「あやつと吾の関係は、いずれおまえたちにも見せてやろう…」
響の謝罪の台詞はダイスの己の感情を韜晦するような言葉に遮られる。
「……」
あとは何も言えず、座席の背もたれに身体を預ける響。
そんな親友にして最愛の人に、未来は何か言葉をかけようとして――――結局どうでもいいことしか言えない。

「ダイスさん、見せてやろうっていってたけど、普通は、聞かせてやろう、じゃないかな？」
「え？　…あ、うん、確かにそうだね…」
身の入らない返事をしてくる響に、未来は背中が寒くなるのを感じる。
それは、絶対と思っていた二人の関係に、微かな軋みが生じる音だったのかも知れない――――。

6．上映する吸血鬼

S．O．N．G．発令所　PM14：38

『師匠ッ！　さすがに数が多すぎますッ！』

モニター内の立花響の必死の声に、弦十郎は苛立ちの声を飲み込む。

…くそ、なんて様だッ！

現在、響が戦闘行動に入っているのは、とある大型商業ビルの地下駐車場。

屋内ということで、広域殲滅型のイチイバルではなく、ガングニールの投入が仇となったか。

駐車場の半分を埋め尽くさんとする数のアルカ・ノイズに、響が悲鳴を上げるのは無理はなかった。

ましてや、建築物を極力破損させないようにノイズを倒せなどと。

「こうも易々とテロを許してしまうとはッ」

思わず憤りが口から転(まろ)び出た。

大元の要因は、やんごとなき方の退位特例法。

今週末に譲位に伴う式典を控え、都内の警備は厳重を極めていたはず。
諸外国の注目を集めるこの国古来の儀式は、同時に、テロの格好の標的でもあった。
「それをみすみす…ッ」
式典のスケジュールもコースも選定済みである。
ここで周辺施設に被害を及ぼせば、式典そのものの予定に大幅な変更が余儀なくされる。
各国の要人を招待しておいて延期や中止となれば、日本国の権威と面子は大いに損なわれるだろう。
テロの首謀者の目的はまさしくそれで、アルカ・ノイズは特異災害でもある。
ここで対応を誤れば、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．に対しての責任問題へとも発展するのは自明だった。
――――それでも、装者の命には代えられぬ。だがしかし…ッ！
弦十郎が総司令として煩悶する一方、その背後では、別の意味で緊張を孕んだやりとりが展開されている。
「あなたね、呑気にお茶なんてしてないで、なにか仕事しなさいよッ！」
目を三角にして怒鳴り声を上げるのは、マリア・カデンツァヴナ・イヴ。

対して、勝手に司令席へと腰を降ろし、優雅に茶器で紅茶を口に運ぶのは、夜の王にして赤き貴種。自称、真の吸血鬼たるドラゴンタイガー・ダイステイラー。
「吾は基本的に人と人の争いには介在せぬ。助力を仰ぐのは筋違いよ」
「…ッ！　アドバイザーでしょ!?　そのアドバイスができないなら、吶喊してあの子を助けてきなさいよッ！」
「おぬし、アドバイザーの仕事をなんか勘違いしとらんか？　参謀ぞ？　軍師ぞ？　それが前線に出てなんとする？」
ぐうの音もでない正論である。
ぐっと言葉に詰まるマリア。
「とにかく！　なんかアクションは起こしなさいよ、童帝！」
彼女とて無茶を言っている自覚はある。
現在、国内におけるシンフォギア装者の投入人員数は制限されており、それゆえのマリアの本部待機であるからだ。
様々な国益や権益の絡んだ結果にせよ、致し方ないことだった。
「その呼び方はやめい。おぬし、言霊というものを知らんのか？」
吸血鬼は顔を顰める。
「もちろん知っているわよ。でも、貴方が童貞なのは本当でしょ？」

「だから違うとゆーてるだろーが！　ともあれ、吾はダイスと呼べ。でなければ…」
「ふん、でなければ？」
「おぬしのことを、ただのいやらしいマリア。略してタイマと呼んで使わす」
「は、はあッ!?　なによ、それッ！」
「吾の言霊は強いぞ？　そのうち、『チッ、うるせーな、反省してまーす』とか『別に…』とか言い出すのだ、おぬしは」
「な、な、な…！」
「むしろ、タイマ忍だな」
「なにワケのわかんないこと言ってるのよッ!?」
　ほぼほぼ絶叫するマリアに、さすがの弦十郎も背後を振り返ってくる。
「こちらはかなり深刻な状況なのだが…ッ!?」
　モニター上では、大量のノイズに囲まれて響が悲鳴を上げている。
　全力を出せば一撃で吹き飛ばすことも出来るだろうが、同時にビルも基礎ごと破壊する可能性が高い。
『師匠ーッ！　もう限界ーッ！』
「むうう…」
　一言『全力でやれ』と言ってしまえば済むのだが、その背景の雑多な柵（しがらみ）が弦十郎を呪

縛している。
それでも意を決して口を開こうとしたその刹那、ダイスがひょっこりと顔を出す。
「響、困っておるのかー？」
なんとも暢気な問い掛け。
『全力全開で困ってますッ!!』
その響の反応に、吸血鬼ダイスはふんと鼻を鳴らす。
「仕方ない。一度きりだぞ？」
次の瞬間、モニターを眺めていた弦十郎とマリアは目を見張る。
モニターの中でアルカ・ノイズと奮闘している響のすぐ横に、悄然とドラゴンタイガー・ダイステイラーが姿を現したのだから。
しかし、実際に発令所には彼が存在する。
「騒ぐな。あれは吾の分霊（みたま）みたいなものだ」
「そうあっさりいうがな…」
モニター上のダイスがアルカ・ノイズの群れを睥睨する。
次の瞬間、先頭の群れのノイズがくるりと反転。
後続のノイズへと突進し、互いに炭化していく。
ほんの一瞬で、地下駐車場を埋め尽くさんとしていたアルカ・ノイズは、残らず消失

していた。
『だ、ダイスさん、いったい何を…？』
　響が疑問の声を発した時には、分霊らしきダイスは消失している。
　キョロキョロと周囲を見回す響に、発令所から声。
「なに、邪眼で連中の認識を混乱させ、同士討ちさせたまでよ」
　さらりと言ってのける吸血鬼に、発令所の弦十郎とマリアは呆気にとられるしかなかった。

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部内　エルフナイン研究所　ＰＭ１７：４０

「…凄いですね」
　ノイズの同士討ちの映像を見たエルフナインが唸る。
「どうだ？　我々の技術で再現できそうか？」
　弦十郎の質問に、エルフナインは幼い顔に渋面を刻んだ。

「おそらく不可能です。一度起動したアルカ・ノイズは既定のプログラムでしか動けません。それを、起動後に外部からか感覚干渉（サーキット）して誘導するなんて…」

ふむ、と弦十郎も考え込む。

もしかの吸血鬼の邪眼というものを再現出来れば、対アルカ・ノイズ戦における革新となるのでは、と期待していたのだが。

「やはり、先史文明由来というより、あの男自体が超常的存在で間違いないようだな」

ドラゴンタイガー・ダイステイラー。

装者たちは腹を抱えて笑っていたが、どうやら偽名でも芸名でもないらしい。

となれば、何かしらの意味が込められているはず。

先ほどの発令所でのマリアのやりとりを耳にするに、言霊という存在をおろそかにしていない以上、それは十二分に考えられる話だった。

「弦十郎さん。虎＝ｔｉｇｅｒの語源をご存じですか？」

「確か…チグリス川を指していると小耳に挟んだことはあるが」

「そうです。そのチグリス川はメソポタミア文明の礎となった大河ですね。そしてシュメール神話では、エンキ神が川を流水で満たして作ったそうです」

「むう…」

かのドラゴンタイガー・ダイステイラー自身、フィーネとかつて恋仲だったと公言し

ている。
全てを頭から信じたわけではないが、ここに来てエンキ神との符号も合わさると、眉につけた唾を拭わなければならないだろう。
「まあ、それも今からある程度判明するかもな」
弦十郎はそう独りごちて椅子から立ち上がる。
「さて、エルフナインくんも来るだろう?」
「はい。是非同席させてください」
先日、響がデートした際に、かのダイス氏にフィーネとの関係を尋ねたらしい。
いずれ見せてやる、と確約した彼に対し、他の装者たちからも続々と鑑賞の希望が出た。
そもそものシンフォギアという技術理論がフィーネと縁が深いのだから、至極当然のことだろう。
エルフナインを伴い、彼女の研究所を出る弦十郎。
その胸中に、奇しくも過日の小日向未来と同じ疑問が沸き上がっている。
「しかし、見せてやる、とは、いったいどうするつもりだ…?」

S．O．N．G．本部　第一会議室　PM18：00

本部内で一番広く階段席となっている会議室へは、既に装者6人に発令所のメンバーが勢ぞろいしていた。

「ようもよう暇人ばかりと見える」

集まった面々にダイスがそう皮肉るも、この時ばかりはマリアも反論しようとしない。

先史文明、いや、神代の出来事を肉眼で見る機会なのだ。おそらく一生に一度と断言しても過言ではないだろう。

「とは言ったものの、吾の記憶に拠るものだからな。現代のおぬしたちにも理解できるよう、多少エンコードしなければならぬ」

さらりと現代用語を駆使する吸血鬼の横で、クリスが皆が思っている疑問を口にしている。

「だからって、どういう風に見せるつもりなんだ…？」

会議室の正面にはプロジェクター用の巨大なスクリーンが降りて来た。

続いて部屋の電灯は消され、スクリーンに大きな光点が浮かび上がる。

光の焦点が合う。
そこでまずスクリーンに流れてきた映像は、リボンに丸く囲まれた月読調の顔のアップ。
彼女はけだるそうな表情で『がーお』と吠え声を上げる。
「なにやってんの調ッ!?」
思わず席を立ち声を荒げるマリア。
「オープニングだけ手伝ってって言われたから協力したの」
飴をカラコロと舐めながら調。
「変なトコに凝っているなあ…」
呟いてから背後を仰ぎ見て、雪音クリスは思わず声を上げる。
「な、なにやってんだよ、アンタ!?」
彼女の声につられ、振り返った全員が見た。
会議室の階段席の最上部で、プロジェクターよろしくその二つの目からスクリーンに映像を投影している吸血鬼の姿を。
「これぞ、吾の邪眼の一つ。投影眼ぞ」
「そりゃあ便利だ…ってゆーより！　幾つあるんだ、アンタの邪眼はッ!?」
「吾の邪眼は百八式まであるぞ？」

「……」

「それより、さっさと前を向きなおるが良い」

絶句するクリスらに、ダイスはスクリーンを見るように注意を促す。

もうなんでもアリだな、とブツブツとクリスは漏らす。

彼女を含め、全員が前を向くと、唐突に始まるＢＧＭ。

トゥルッ　トゥルッ　トゥルッ　トゥルッ

「まさかのビートボックス!?」

「いちいちうるさいわ！　目から映像は出ても音まで出るわけなかろう?」

考えてみれば当たり前の正論でマリアの驚愕を切って捨て、吸血鬼は更にビートボックスを刻む。

トゥルッ　トゥルッ　トゥルッ　トゥルッ　トゥルッ　トゥルッ　トゥルットゥットゥッ　ダイスザサ～ド♪

そして、映像と一緒に流れ始めるナレーション。

吾の名はダイス三世。かの名高きティアマトの孫だ。世界中のカストディアンが吾に血眼。
ところが、これが捕まらないんだなぁ。ま、自分で言うのもなんだけど、狙った獲物は必ず奪う神出鬼没の大吸血鬼。
それがこの吾、ダイス三世だ。

狩猟神ウル、吾の相棒。早撃ち０．３秒のプロフェッショナル、クールなアーチャー。
そのうえ義理堅く、頼りになる男。

須佐之男命。国産みの神イザナギとイザナミの三男。高天原の暴れん坊。荒神。なんでも真っ二つにしちまう、怒らせると怖ぁ～い男。

マルドゥク。ご存じ、エア神の息子。太陽神にして呪術神。吾を捕まえるのを生き甲斐とする、吾の最も苦手なとっつあんだ。

謎の女、フィーネ。女盗賊か神託の巫女か、この吾にも分からない謎の女。　いつもひどい目にあうが、憎めないんだなぁ。吾はカワイコちゃんに弱いからねぇ。

そのナレーションを皮切りに、スクリーンに展開されるは一大痛快娯楽スペクタクル。

エンターテイメントがぎっしり詰まった映像が終わり、最後にご丁寧に『ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…？』の文字入り。

室内の電気が灯ると、まず喝采を上げたのは暁切歌。

「いや～面白かったデスね！」
「そうだろうそうだろう」
　得意満面の笑みを浮かべる吸血鬼に、戸惑い顔で質問をしたのは響だ。
「あの、ダイスさん。これって本当のこと…？」
「心外だな。全て吾の記憶ぞ？　もっとも現代風に大分脚色してあるが」
「だからって、これはねーだろーよ！」
　クリスが大声を上げる。
「いくら現代アニメ風にアレンジしたとしてもな、荒唐無稽がすぎるだろうッ！　おまけに三世ってなんだよ、三世ってッ!?」
「まあ、おぬしらがどんな感想を抱くかは自由だが…」
　苦笑しつつ、ダイスはクリスと翼を同時に眺める。
「作中でもあったが、いちど吾ら一行もマルドウクと協力したエンキに捕まったことがあってな。そこでウルのやつはイチイの弓を、素戔嗚のやつは天羽々斬を、それぞれ罰として取り上げられたあげく砕かれてしまってなあ」
　それが回り回って今、クリスと翼のシンフォギアの基となっているという。
　感慨深げに語るダイスに、二人は微妙な表情で顔を見合わせるしかない。
　仮にこの話が本当だとしても、いったいなんとコメントすればいいのか分からないの

だ。
「おまけにその時、フィーネのやつがエンキに一目ぼれしたようでな…」
忌々しげに言うダイスを、マリアが気を取り直すように嘲る。
「あら？　貴方、フィーネと恋仲だとかいってなかった？」
「そう、それよ！　あやつの頼みで、吾がどれだけ危ない橋を渡ったと思っている!?　クロノスのせがれの目を盗んで種火を取ってくるように頼まれたときは、本当に死にかけたぞ!?」
「ア、ハイ」
「そのくせ、いつも血を吸う寸前ではぐらかされてばかりでな。『今度血を吸わせて上げる♡券』なんぞ、１２枚綴りで何枚分のストックを無駄にしたことか」
「……」
しみじみ言う吸血鬼に、沈黙をもって答えるマリア。
如何な彼女とて、「それって都合の良いように利用されていただけじゃ？」と口に出さない情けが存在していた。
「まったく、本当に性悪な女だった。しかし、そこがまた魅力でもあってな…」
遠い目をするダイスに、マリアは「まあ当人が納得しているなら良しとしましょう」なんて思っている。

他の装者の反応も彼女に準じていて、全員でなんとも言えない視線を向けるしかないのだが、肝心の吸血鬼はその視線の意味を全力で誤解していた。
「いやあ、これ以上のフィーネとの恋バナは勘弁してくれ。あの時は吾も若かったというか…」
おそらく数千年単位で過去の話でも照れくさいようだ。恋の話に心がときめくは、時間、時空すら超えた普遍性が存在するからに違いない。
――たとえその恋が一方的なものであったとしても。
「あれ、なんだか涙が…」
響と未来が異口同音に呟き、同時に目尻を拭っている。
「さっきの映画のフィーネ。なんかマリアに似ていたデスね！」
「はあッ!?　どこがよ？」
切歌に指摘され言い返すマリア。
「別にアンタの恋バナには興味ねーよ！　それよかフィーネについてもっとこう…」
ストレートにぶっこむクリスに、
「いやいや、ミスター・ダイス。出来れば、その、もう少し恋の行方の話の方を…ッ」
頬を微かに染めて翼がコソコソと訴える。
「飴はもうないの？」

話の渦中にいるダイスの袖の裾をくいくいと引っ張る調がいた。
まったくのカオスの様相を呈する会議室の内情を、後部席の高みから見下ろす弦十郎。
珍しく額に汗を浮かべた彼は、傍らのエルフナインへそっと語りかける。
「…今見た映像の話は、本当だと思うか？」
「今のところはなんとも言えません。でも、出てきた固有名詞の数々は無視できませんね…」
エルフナインも冷や汗というか脂汗をかいていた。
無理もない。仮にダイスの話を肯定すれば、人類の歴史や現代に伝えられてきた神話が根底から覆りかねないのだ。
…ひょっとして、オレはいま人類史の転換点に立ち会っているのでは？
弦十郎をしてそんな大それた考えが脳裏をよぎったが、太い首を捻って振り払う。
代わりに、隣にいる錬金術師でもある分析官へ命令を下した。
「すまないが、後で検証してレポートにまとめてくれ」
「はい、わかりましたッ」
「…十分に眉に唾をつけて、頼むぞ？」

７．手合せする吸血鬼

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部発令所　ＡＭ１０：２５

ドラゴンタイガー・ダイステイラー（偽名？）
身長　約１８０ｃｍ
体重　推定　６２kg
外見年齢　２０～３０歳？
頭髪　茶色
瞳　青色
身体特徴　ゲルマン系の特色が認められる？
備考　あらゆるスキャンを受け付けないため、筋骨格、内臓配置などの詳細不明――。

「ふうむ…」

調査部の報告書を読み流し、弦十郎は渋面を作る。
S．O．N．G．の誇る科学捜査能力を総動員してこの程度か。
何一つ確定的なことが羅列されてないところなど、いっそ清々しいほどだ。
逆説的に相手が超常の存在であるとの証明になるのだろうか？
渋面を崩さないまま、弦十郎は司令席のディスプレイにあらたなファイルを展開させる。
それは、今朝がたにエルフナインから送られてきた報告書だ。

『…ティアマトの孫をという表現の真偽は一旦横に置いておくにしても、マルドゥク（シュメール語ではアマルトゥ）神との対比を考えるに、この場合のドラゴンは随龍ムシュフュを指していると思われます。
このムシュフュは、ティアマトの作成した対マルドゥク霊獣ということでしたが、ティアマトが倒された際にマルドゥクの軍門に下り、彼の乗獣になったとエヌマ・エリシュにあります』
タイガーの語源は母なるチグリス川。
そしてムシュフシュと呼ばれるドラゴン。
おのずとドラゴンタイガーという俗と思われた名も、意味深長に思えてくる。

『先の映像を見る限り、古事記や北欧神話、古代バビロニア神話といった様々な伝承が一堂に会していました。これらそれぞれの伝承が破綻せず入り混じっている超古代史は、ボクたちの近代認識では理解することは困難でしょう。循環参照ないしエピメニデスのパラドックス的な視点で、その概要を把握するしかないのかも知れません。

同時に各種神話に登場する神々の名前が出てきました。彼らが実在していたと仮定すれば、古代文明史そのものも勿論、神や人、その他の既存の単語の定義すら見直す必要があると思われます』

現代における人間の価値観など、たかだか数千年の歴史しか存在しない。

さらにその前に存在した文明に置いては、使われている言語も違えば、その意味すら全く異なる可能性がある。

「…先史文明だ異端技術だ聖遺物だと、いま我々が使っている言葉自体、まったく見当違いなのかも知れないな」

おそらく、現代の人間が過去を都合の良いように定義、解釈して記し、伝えてきた記憶。それが歴史なのだろう。

そして、先ほども言及したが、人間としての価値観に普遍性が確立されてたかだか数千年。

それ以前の出来事に関して、現代の価値観で測ろうとすること時代無謀なのかもしれ

なかった。
結論から行ってしまえば、エルフナインのレポートも『よくわからない』としか言いようがないもの。
そのことで彼女を責める気はサラサラない。
むしろ、弦十郎はどこかすっきりとした顔で席を立つ。
「ならば、オレなりに都合の良いように解釈させてもらうか」

S．O．N．G．本部　多目的戦闘シミュレーションルーム　AM11：00

手裏剣が空を切る。
「…緒川さんの一撃が当たらないッ?」
驚愕の声を漏らしモニターを見つめる翼の視線の先で、緒川慎次が顔の前で呪印を結びながら疾駆している。

「ふッ！」
新たに放たれるクナイには紐がついていた。
それをかわすは吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラー。
縦横に放たれ、かわされたと思った二本のクナイは、ついていた紐が一瞬で燃え上がる。
「むッ！」
軽い驚きを見せるダイスに向かい、炎の紐が蛇のように絡みつこうとする。緒川の駆使する火遁だ。
だが、落ち着いた様子で吸血鬼はその炎を掻い潜る。
「よしッ！」
快哉の声を上げたのはモニタールームの翼だ。
かつて緒川に師事したことのある彼女ゆえに、師の行動は手に取るように分かる。
この火遁の術は陽動で、本命は――――。
「緒川さん！　いまです、影縫いをッ！」
しかし。
「ッ！」
緒川の手が止まっている。

その様子をみて、ダイスはにやりと笑った。
「知らんのか？　吸血鬼には影が出来ないのだぞ？」
そして無造作にダイスは手を振るった。
手刀の一撃を受けて緒川の身体は寸断――――されていない。
吸血鬼が寸断したのは、細い丸太。
「ほう？」
感嘆の声を漏らすダイスに、いつの間にか背後に回りこんだ緒川が逆にひじ打ちを決めた。
「!?」
しかし、その吸血鬼の姿は一瞬で霧散。
続いて緒川の背後で声。
「やるな」
そう呟いてダイスが一撃を叩き込めばそこに緒川の姿はなく、丸太が転がるのみ。
さらにその背後に回り込んだ緒川が蹴りを振り下ろせば、吸血鬼は霞へと転じ――――。
結果として、シミュレーションルームには、盛大に丸太が転がることになる。
「すげえけど、なんか玉ねぎの皮を剥いているみたいだな…」

雪音クリスが呆気にとられて呟く。
空蝉と霞に転じ続ける攻防は、まさにそう評するに相応しい。
だが、玉ねぎとて永遠に皮を剥き続けられるわけもなく。
「…すみません。降参です」
肩で荒い息をしながら緒川が両手を上げた。
「緒川さんが、負けた…？」
翼が茫然とした声を上げるのも無理はない。彼女をして、緒川がこれほど盛大に呼吸を乱すのを初めて目にしていた。
「ふむ。人間にしては大したものだ。さすが忍者マスターといったところか？」
ダイスの称賛に、緒川もどうにか呼吸を整えて笑顔になって謝意を示す。
「では、次はオレの番だな」
「師匠!?」
ジャージ姿の弦十郎の登場に、響を筆頭に装者たちが色めき立つ。
なにせ装者全員でも敵わないＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．総司令だ。
おそらく人類で最高級の戦闘力を持つ弦十郎と、超常存在である吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラーとの手合せは、事情を知る人間にとってとても無視できるものではなかった。

太い拳をずいと前に出しながら、弦十郎は自分に語りかけるように言葉を放つ。
「どうもオレは無駄に考えこんでしまう性質(タチ)でな。いかな相手が超常であっても、この拳が通用すれば、あとはどうにでもなるッ！」
「言葉の意味は分からぬが、迷いなき良き闘志よ」
ニヤリと笑って応じるダイスに向けて、弦十郎は裂帛の気合とともに正拳突きを放つ。
目にも止まらぬ拳速は、受け止められて初めて周囲の空気を巻き込んだ。
地鳴りのような音を立ててその拳を受け止めたダイスは、しかし微動だにしていない。
むしろ涼しい顔で告げる。
「ほう。人間にしてはおそろしく練り込まれているのう」
「…お褒めにあずかり恐悦至極ッ！」
続けて放たれる弦十郎の蹴りも柳に風と受け流し、ダイスは逆にその勢いを持って投げ飛ばす。
おそらく十数メートルは投げ飛ばされた弦十郎だったが、着地と同時に地面を放射状に抉るような震脚を炸裂。一瞬で間合いを詰めて、吸血鬼へ向かって拳を振るう。
「…すごいッ！」

響の感嘆の声は、改めて自分の師匠の戦いぶりを思い知ったからか。それともその猛攻をさばく吸血鬼を目の当たりにしたからか？

そんな彼女が更に目を見張ったのは、弦十郎の拳が的確に吸血鬼を捉えはじめたからだ。

「いけッ！　おっさんッ！」

いつの間にかクリスも拳を握りしめて声を上げていた。

彼女だけではない。装者全員が、自分たちの司令に向けて激励の言葉を投げている。

以前の響であったら、クリスたちと一緒に弦十郎を躊躇いもなく応援していたことだろう。

しかし、今の彼女は、そうすることが躊躇われた。

それはなぜ――――？

「ッ!?」

逡巡する響の前で、決着はついていた。

弦十郎の拳は深々と吸血鬼の胴体を穿っている。

「やったーッ！」

切歌と調が歓声を上げ、翼もクリスも喜びの表情を浮かべる中、一人血相を変える響がいる。

「うそ…。ダイスさん、死んじゃったッ!?」
その声に、ようやく他の装者たちも異変に気づく。
拳を抜かれ、文字通り胴体に風穴をあけられたダイスの身体は、地面に横たわりピクリともしない。
その身体は霞のように消えるわけでもなく、そこにあり続けている。
「うそ、うそうそうそッ！　ダイスさん!?」
浮き足だった響がモニタールームの出口へと向かう。
「あのエロ吸血鬼ッ！　調子にのるからッ！」
響に半瞬遅れて血相を変え、マリアもモニタールームを飛び出そうしたその時。
「いやいや、大した偉丈夫だの」
彼女らの背後から声。
「!?」
見れば、椅子に腰を降ろし、優雅に茶器を口に運ぶドラゴンタイガー・ダイステイラーがいた。
「ダ、ダイスさん？　無事だったんですかッ!?」
驚く響に、
「いや、さすがにあの相手はそれなりに質量をもった分霊で相対しなければのう」

呑気に答える吸血鬼。
それから改めて見れば、弦十郎の前に横たわった吸血鬼の身体は、地面に染み入るように消えていく。
「…なによ、驚かせるんじゃないわよ、この童帝ッ！」
「む？　心配してくれたのか？　ただの嫌味くさいマリア、略してタイマよ？」
「ッ！　トーゼンでしょ！　司令たちなんて前座で、このあとのわたしたちとの手合せが今日の本命なんだからッ！」
肩を怒らせて断言するマリアだったが、彼女の台詞自体はまったくの事実だった。
本来的に、ＦＩＳチームとの手合せをマリアが希望し、そこに緒川らが割り込んできた格好。
「…本当におぬしらの相手をしなければならんのか？」
改めてシミュレーションルームへと引っ張り出され、溜息をつくダイス。
「なによ、怖気づいたわけ？」
挑発的な言動を向けてくるマリアを見て、ダイスはぽつりと言う。
「いやさ、おぬしの纏うそれは、エンキの左腕であろう？　吾はあやつとは浅からぬ因縁があるでな。正直、苦手なのだ」
「なあに？　この期に及んで言い訳するワケ？」

「別に言い訳するつもりないが…」
その二人のやりとりをモニタールームでハラハラしながら見守る響がいる。
肩をポンと叩かれて振り向けば、クリスが立っていた。
「なんだ心配してんのか、おまえ？」
「そりゃあ…心配っていうか」
「ま、おまえが心配するのも無理ないか。アイツらにしちゃ意趣返しみたいなもんだしな」
そもそものあの吸血鬼自体が、響の変身を見て鼻血を噴くのである。
それが三人分の装者に変身されて平静を保てるものか？
ましてやマリアは響以上の恵まれている身体をしているというのに。
「逆にいやあ、鼻血の一つも噴かせられにゃ、自分の魅力がないってことになるもんなあ…」
響に聞こえないようにクリスはそっと呟いている。
なんでよりによってこのバカを見初めたんだ、あの吸血鬼は…？
ともあれ、手合せというより公開処刑に近いものになるのでは？　響の疑念はそこに尽きる。
なにせ普段からして始終口げんかをしている二人だ。

クリスも先ほど言っていたが、日々の口げんかでストレスを溜めたマリアの仕返しである可能性が高い。
だとしても。
「ううん、わたしはマリアさんを信じているよ。マリアさんはわたしよりずっと大人だし」
そしてダイスさんも大人だ。
大人同士、仲良くして欲しいと響は切に願う。
「…分かったわ」
その願いが通じたのだろうか。マリアは自らの出陣をあっさりと引込めた。
「その代わり、この二人とは手合せしてもらうわよ？」
「ふむ。ザババの加護を受けた二人か。相手にして申し分なしよ」
「決まりだわ。調ッ」
「はい」
マリアの声に、少し緊張した調の返事。
続いて。
――Ｖａｒｉｏｕｓ　ｓｈｕｌ　ｓｈａｇａｎａ　ｔｒｏｎ…。
「よしッ」

シンフォギアを纏い、耳のあたりにヨーヨーを構えてダイスを見つめる調がいる。
「……」
「よしッ」
「……」
「よしッ」
「……どうした、調よ？」
幾度か決めポーズを繰り返しても無反応の吸血鬼に、調の表情は少し泣きそう。
「…なんで鼻血を噴かないの？」
「ふん。吾だっておぬしたちに付き合っていたらいい加減慣れるわ」
胸を張って鼻を鳴らすダイスだったが、慌てて調に対し言い添えてくる。
「いや、だからといって調に魅力がないわけではないぞ？　実に可愛らしい。将来が楽しみぞ？」
フォローされ、どこか釈然としない風だったが、調は笑顔を浮かべて引き下がる。
「じゃあ、次、切歌」
面白くなさそうな表情と声で告げるマリア。
「はいデスッ！」
元気よく返事をして切歌が聖詠。

――Ｚｅｉｏｓ　ｉｇａｌｉｍａ　ｒａｉｚｅｎ　ｔｒｏｎ…。

その後、シミュレーションルームに展開された光景は、どう控えめに表現しても地獄絵図だった。

四方八方に盛大に飛び散った血。血の池の中心に倒れ伏すのはもちろん吸血鬼だ。

身体をピクつかせながら、ドラゴンタイガー・ダイステイラーは虫の息で呻く。

「…縞パンに、ニーソックスぱぁあぁんは反則じゃろ…？」

その横では、全身を赤く染めた切歌が「ひゃあああ」と言いながら胸を隠してスカートの裾を引っ張り下げながら座り込んでいた。

同じく全身を赤に染めた調は、無表情の顔にハイライトの消えた瞳で、吸血鬼の後頭

部をヨーヨーでガスガスと殴りつけている。
腕組みをしたまま鼻血を真正面から受けたマリアは、血に染まった上着を脱いで勝ち誇った声で言った。
「こんなこともあろうかと水着を着てきていて良かったわッ」
彼女のビキニ姿の上半身を眼にし、吸血鬼は更にごぼっと血を絞り出す。
モニタールームでそんな阿鼻叫喚の構図を見ていたクリスは、ゆっくりと横にいる響を見た。
「…誰がずっと大人だって?」
「……」

8．酒を酌み交わす吸血鬼

風鳴弦十郎は、その日も珍しく司令室に籠っていた。
各種報告書を仕上げ、気づけばとっくに就業時間は回っていた。
盛大に伸びをして立ち上がり、夕食は食堂で簡単に済ませる。
それから司令室へと舞い戻り、どうにか溜まっていた書類を片付けた。
気づけば時刻は八時過ぎ。
組織の長ともなれば、時間外業務など当たり前。ましてや特殊部隊という肩書がある以上、労基法などほとんど意味を成していない。
それでも体力に自信のある弦十郎は、それらを意欲的かつ精力的にこなしている。
しかし、重厚なデスク前に座る今の彼の表情は、冴えないことこの上なかった。
最後の最後に残していた案件。
それは――――。
「どうした、消沈した顔をしてからに？」
不意に声をかけられて、弦十郎はハッと顔を上げている。
すぐ目前に、吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラーが紳士然とした佇まいで立っ

ていた。
「…驚かさんでくれ」
「この程度でおぬしは驚くタマでもあるまい」
微笑するダイスに、弦十郎は苦笑で応酬するしかない。
まったくこの吸血鬼には、本部のセキリュティも無意味だ。
だからといって礼儀はしっかりと弁えているらしく、好き勝手に本部内の機密エリアを出入りしている様子はなかった。
約束を違えず仁義を通している点は好ましく、今となってはこの吸血鬼に対し比較的好印象を持つ弦十郎である。
もっとも、いくら先日拳を交えたからといって、友誼めいたものを抱くまでは至らなかったが。
「…で？　何をしている？」
その吸血鬼は、優雅な手つきでサイドボードを漁っている。
「いやさ、ここに酒があるのを見つけたからの。せっかくだから飲もませてもらおう思うてな」
弦十郎は立場上、色々と贈答される機会がある。
もっとも滅多に酒は飲まないので、まとめて司令室へと仕舞い込んでいた。

組織の忘年会の時などに放出するのを専らとしていたが、まさかそれを目敏く見つけられるとは。
「だからといって、勝手になあ…」
「吝嗇な。酒は飲まねばその価値はないぞ？」
正論を口にしつつ、ダイスはテーブルの上にグラスを二つ置いた。
それから琥珀色の液体の入った瓶の蓋を軽く捻り、抜栓。
「おい、それはッ」
「どうした？　なかなか良い名だと思って開けたのだが…」
吸血鬼の手にもつウイスキーのラベルは響３０年。
もはや入手困難な逸品である。
「…まあ、いいか」
弦十郎は浮かせかけた腰を椅子へ引き戻す。
高級すぎていつ開けたらいいか分からなかった銘柄だ。いまこの時をその機会だと思おう。
司令室に氷やミネラルウォーターは常備されていない。
グラスにストレートで注いだ液体を、ダイスはまず鼻で楽しんでいる。
「実に芳醇な香りだな。昔飲んだ酒に劣らぬ。さて味は…」

そういって啜り込んだ吸血鬼の顔には、満面の笑みが浮かんでいた。
「非常に洗練されておる。いやはや、人の業には吾をしても感嘆するしかない」
「人の歴史は酒とは切っても切り離せないからな」
応じつつ弦十郎も自分のグラスを口に運ぶ。
舌の上で滑らかな甘みを転がせば、素晴らしい香りが鼻腔を抜けていく。
「…美味いな」
「ああ、旨い」
そのまましばらく互いに手酌でウイスキーを注ぎあう。
執務中ではあるが、まあ時間外ということで勘弁してもらうか。
アルコールの熱を覚えながら弦十郎がぼんやりとそんなことを考えていると、吸血鬼ダイスはポツリといった。
「いかなおぬしでも、親殺しは躊躇われるか――――」
「ッ!?」
思わず弦十郎は咽込んでしまった。
なぜそのことをッ!? などと問い返すだけ野暮か。
おそらくこの吸血鬼は、オレが今何に頭を悩ませているかなどお見通しに違いない。
「ああ。出来ればしたくはない。したくはないが…」

答えつつ、弦十郎の視線はデスクの上へと注がれた。
そこに置かれた書類。その見出しは。
『風鳴訃堂に対する事情聴取の執行について』

護国災害派遣法違反。
それが風鳴訃堂の罪状である。
鎌倉の本邸に強制捜査の許可が下りた際、日本政府は逮捕が覚束なければ殺害も已む無しとの通達をしてきた。
しかし政府としての本音は、殺害こそを望んでいたフシがある。
訃堂の影響力は国家の様々な箇所まで及んでいる。生きて逮捕された方が後々面倒だという判断もあったことだろう。
弦十郎が実父に向けた拳が鈍ったのは、政府の意向への反感からではない。
直前にマリア・カデンツァヴナ・イヴが喝破した通り、肉親同士で殺し合うという愚

かさに直面した故の結果だ。
訃堂に揶揄された通り、その甘さが兄である八紘を死なせた。
弦十郎にとって、悔やんでも悔やみきれない痛恨事だった。
愛刀群蜘蛛をへし折られた訃堂はあっさりと捕縛されたものの、未だに公訴に至っていない。
その身柄は今は再建された深淵の竜宮へと移されている。
罪状は、先の護国災害派遣法違反が主となるが、風鳴八紘の殺害が追加されていた。
他にも邸内でアルカ・ノイズを使役した容疑や、かのノーブルレッドへの支援を行った容疑がかけられている。
が、臭いものに蓋とばかりに、政府は自体の解明に消極的だった。
事実、風鳴訃堂の存在を公にし、裁判へかけて国民の目に触れさせることは、スタジアムの大惨劇の実行犯と赴堂の繋がりを詳らかにすることと同義だ。
巨大な人心の動揺を誘発する可能性が高く、現政権のガバナンスは疑われるだろう。
国際社会へと周知されれば諸外国の非難も免れず、日本国そのものの致命傷へと成りかねない。
…いくら化け物染みていても被疑者は齢百を超える老人だ。朽ちるまで幽閉しておけば良い。

日本人特有の事なかれ主義を現政権が選択したことを、誰が責められよう？
しかし、今ここに、風鳴訃堂に対する事情聴取が実行されようとしていた。
原因は過日のやんごとなき方の退位に伴う恩赦の発令である。
いくら恩赦といえど、定まっていない罪は軽減しようがないではないか。
せめて彼の者の罪業を明らかにせよ。
退位され上皇となられる方の直々の御言葉である。
シェム・ハを次世代抑止力とするために様々な外道ともいえる手管を用いた風鳴訃堂であるが、護国という一点に於いてはその行動を否定することは難しい。
加えてほぼ一世紀に及ぶ防人の働きは、先々代の帝からも長きにわたって覚えのあるものだった。
さすがに日本国の象徴の御言葉は無碍に出来ない。
結果として、風鳴訃堂への聴取が実施される運びとなった。
無論、罪業を明らかにすれば、いくら恩赦があっても極刑は免れまい。
一応聴取したといった体裁を繕うようなものではあったが、やむを得ない仕儀とも言えるだろう。
弦十郎の顔色が冴えない理由は、身内が犯した罪へと思いを馳せているだけではない。

いまだ実父が何かを企んでいるのではないか？　という懸念である。
本質的に弦十郎も訃堂に件に関しては有耶無耶にしたかった。
身内としての複雑な事情があるにせよ、彼の人のカリスマ性、感化力はとても無視できるものではない。
潜在的な信奉者の中では、訃堂の理念に共鳴し、文字通り命を賭けるのも厭わない連中も存在する。
それら狂信者を刺激しないためにも、訃堂への処遇はあやふやなまま幽閉しておくのが最善ではないのか。さすがに深淵の竜宮では連中も手を出せないだろう――――。
そう思っていたところへ、今回の事情聴取である。
極力外部との接触を排していただけに、裏では何かしらの訃堂の思惑が動いているのでは？　と勘繰らずにはいられなかった。
…いや、それも考えすぎか。
いくらあの怪物でも、現陛下の退位に伴う恩赦を視野に入れてまで、一連の計画に手を染めたわけではあるまいよ。

「死人に口なし、と言うからのう」

その吸血鬼の呟きに、弦十郎は驚きつつも全く同感だった。
しかし、ダイス本人は皮肉で口にしたわけではないらしい。
「死は人にとって良くも悪くも救いぞ。何もかもがご破算になる死滅の禊がなければ、因果の縄は人には重すぎる」
「…どういう意味だ？」
「むしろ常命だからこそ、人の生と魂は光り輝くのだろう」
弦十郎の質問を意図的に無視し、ダイスはグラスを傾け続けている。
そのしみじみとした佇まいに、ふと弦十郎は常々訊いてみたかったことを思いだす。
「――――永遠の時を生きるのはどういう気分なのだ？」
吸血鬼に限った話ではないが、世界各地の伝説伝承には不老不死の特性を持つ存在が幾つも記されている。
そんな神話級の存在が目の前にいるのだ。しかも意思の疎通が出来るとあれば、知的好奇心が疼かないはずがない。
対して、超常の存在であるダイスの返答は淡白だった。
「それは蠅に天空を舞う大鷲の心を問うに等しい愚問ぞ？」
「…一見、宙を飛ぶという共通点があるように見え、その実は次元が違いすぎるという意味か？」

「さよう。正確に理解しようと思えば、人の身では気が狂う。かといって、人ならざる身になってその意味を理解できたとすれば、元々の問い掛けの意味がない」
「ふむ…」
まるで禅問答というか量子力学のようだが、弦十郎は一応の納得を見せる。
「やはり、貴様らと人間は相容れぬ関係なのか?」
「そうでもない。現にこうやって酒を酌み交わしているではないか」
そういって吸血鬼はニヤリと笑った。
「上位の存在であればこそ、下位の存在へと近づくことは出来よう」
幼児の身の丈は、絶対に大人を追い越せず、同じ視点の高さを持たない。
しかし、大人は身を折って幼児と視点を合わせることは出来る。
「要は、加減してもらってどうにかオレたちは超常存在と意志の擦り合わせが出来るということか」
「そうへりくだることもあるまいて。幼年期には幼年期の素晴らしさがある。幼子の発言に、大人とてハッと気づかされることもあるのだから」
「やはり子供扱いされているような気がするな…」
うなだれる弦十郎のグラスに新たな液体を注ぎながらダイスは笑う。
「であればこそ、吾の立場も理解できよう? 子供のケンカに大人が出てゆくのは愚か

しいと、おぬしらも戒めているではないか」
一気に弦十郎はグラスを空けた。
頬に深い苦笑を刻みつつ、思う。
コイツにとっては、今のオレの悩みなど些末なものか。
いくらか気分が軽くなったのは、決して酒のせいだけではあるまい。
「実はな…」
目前で酒杯を傾ける吸血鬼に、弦十郎はそう声をかけていた。
「む？」
「…いや、なんでもない」
結局口を噤む。
ダイスが追及してこなかったのは、きっと全てを弁えているからに違いない。
弦十郎が言いかけた言葉。
――――万が一、オレに何かあった時は。
超常の存在を頼みにするなど、神頼み以上の意味はないだろう。
やはり、人間の不始末は人間でつけるべきだ。

風鳴訃堂への聴取が行われるその日。
S・O・N・G・本部は深く潜行し、深淵の竜宮付近へ到着。
そこから小型の潜航艇に分乗し、竜宮を目指す。
以前の査察官の件もあり、派遣されてきた捜査官の身辺調査は、S・O・N・G・の調査部でも念入りに行われていた。
加えて潜航艇には、弦十郎を始め他の装者たち全員が搭乗している。
風鳴訃堂に相対するにあたり、現人類の最高戦力を結集させたと言っても過言ではないだろう。
そんな弦十郎の唯一の懸念が、小日向未来の同道だった。
装者としての戦力にカウントしていない彼女であるが、訃堂の手のものに誘拐された経緯がある。
鎌倉本邸の研究所に収容されていたこともあり、確かに無関係ではないのだが、わざわざ聴取の場に召喚されることに違和感があった。
日本政府がいまだに未来を危険視しているのか、と思われたが、拒否する理由も術もない。

「うわ～、すっごいねぇ～未来」
潜水艇から見える竜宮に歓声を上げる響。彼女なりに場を盛り上げようとしているのかも知れない。
同じくはしゃぐ切歌と調たちを横目に、クリスはマリアへと尋ねている。
「…そんなに風鳴訃堂ってのはヤベぇやつなのか？」
弦十郎が同道しているのだ。クリスの物言いは、自分たち装者を凌駕する彼に対する絶大な信頼の裏返しに他ならない。
そんなクリスを、マリアは腕組みしたまま静かに一瞥。
「あの怪物は、司令の上位互換だと思いなさい」
「…マジかよ」
マリアの横で瞑目している翼など、その心中はおそらく弦十郎に輪をかけて複雑なことだろう。
戸籍上の父である八紘を撃った実父である訃堂。
一度は引導を渡そうとした相手に再び会いまみえることになろうとは。
彼女の性分はともかく、ある意味弦十郎以上に有耶無耶なままにしておきたかった事項かも知れなかった。
ふとマリアがそんな翼の眉間を指で弾く。

「アイタッ!?　なにをするのだマリアッ！」
「そんな皺を寄せてちゃクセになっちゃうわよ？」
「む…」
　唇をへの字に曲げる翼に、マリアはに微笑みかける。
「安心なさいな。この場にいるみんなは神サマだってやっつけたんだからね」
「…そうだな」
　笑って頷き返す翼だったが、内心で弦十郎と同じ覚悟を決めていた。
　万が一の時には、己の身と刺し違えても。
　それは風鳴一族としての、身内としてのケジメだ。
　少なくとも、この仲間はこれ以上傷つけさせぬ…！
　以前、操られていたとはいえ、同じ轍を踏むつもりは毛頭ない。
　そして一際能天気にはしゃいでいるように見える響も、内心に複雑なものを抱えていた。
　それは弦十郎と同じで、なぜに小日向未来までこの場に連れてこなければならないのか？　それに尽きる。
　同時に、激しい胸騒ぎが止まらない。これは彼女自身、珍しいことだ。
　それでも、絶対に最愛の人を守り通してみせるッ！

そう決意する響の心情は、翼と似ていたかも知れない。

様々な思いを乗せて、いま潜航艇は竜宮へと接岸していく。

9．憤怒する吸血鬼

深淵の竜宮　聴取室　　ＡＭ１１：００

拘束衣を着せられた風鳴訃堂が、警備員たちに付き添われて入室してくる。
普通の人間であれば長時間拘束されているだけで相当なストレスを受けるものだが、訃堂にはそのような気配は微塵も見られなかった。
それなりに長い虜囚生活の割には全く衰えた様子もない。年相応の皺の隙間から覗く両眼は鋭く、音も立てず椅子に座る様は、長い風雪に耐えた巨木を幻視させるほど。
隣室のマジックミラー越しにその威容を見た暁切歌と月読調は思わず固唾を呑む。
その両膝は微かに震えていたのは、鏡越しでも形容しがたい威圧感を受けたからだろう。
「…聞きしに勝る化け物みてえだな、あの爺さん…」
辛うじて膝の震えを抑え込んでクリスが呟く。
「気を強く持ちなさい。正真正銘の怪物よ、あれは」
そう応じるマリアの双眸は、最近知り合った吸血鬼に向けるものと全く違った辛辣さ

が宿っている。
鏡の向こうでは、さっそく捜査官が聴取を始めていた。
「親父相手に大した胆力だな…」
腕組みしたまま弦十郎が呟く。
どうか何事もないまま終わってくれ、との呟きは、敢えて口に出さず飲み込んだ。
鏡の向こうの訃堂は鋭い眼光で捜査官を一瞥。
それから、マジックミラーへと視線を転じた。
鏡越しにその眼光を見て、別室に並ぶ装者たちはまるでこちらを透過されているような気分を味わう。
「ひッ！」
悲鳴を上げたのは小日向未来だ。訃堂とガッチリ視線が絡みあったような気がした彼女は響へと縋りついている。
異様な空気が張りつめる中、捜査官の声が途切れた。
替わりに、訃堂が緩やかに口を開く。
「――――よくぞ娘らを連れてきてくれたものよ」
その口元が笑みを湛えるように歪んだと思った瞬間。
「ッ!?」

マジックミラーが吹き飛ぶ。
「全員伏せろッ！」
そう叫びつつ弦十郎は飛んできた破片を受け止め、弾き飛ばす。
塵埃が納まった後。
捜査官と警備員が倒れ伏した聴取室には、拘束衣を引き千切り年齢不詳の逞しい上半身を晒した訃堂が屹立しているのみ。
「――――果敢無き哉」
その姿を認めたとき、装者たちは未来を除く全員がシンフォギアを纏っている。
わけても真っ先に着装したのが翼であり、彼女が剣を先走らせようとするより早く弦十郎は跳躍。
今の訃堂は公務執行妨害どころではなく、明確な脱走の意志が認められる。
ならば殺害も已む無し。そして姪の手を汚させるくらいなら、いっそオレの手で――――！
弦十郎の拳が貫手へと変化する。
必殺の一撃は、以前の躊躇いを排したもの。
「ぬぅッ!?」
にも関わらず弦十郎の口から唸り声が漏れたのは、訃堂が躱す素振りすら見せなかっ

たこと。
心臓を狙った一撃は、左腕で受け止められる。
喰らい込んだ貫手の先端が、肉を破り血を迸らせる。
同時に。
「きゃあああああああああああああッッ!?」
弦十郎の背後で悲鳴が上がった。
振り返った視界には、天井まで飛び散った鮮血。
装者たちが硬直して目を見開く中心で、小日向未来の左腕が千切れ飛んでいた。
「み、未来うううううッッッ!?」
絶叫を上げる響に、未来の近くにいたクリスと切歌、調はシンフォギアの着装を解く。
「くそッ！　肩口を固く締めろ！　止血するんだッ！」
両手を真っ赤に染めるクリスの矢継ぎ早の指示に切歌と調が従う。
その喧騒に一瞬気を取られた弦十郎の耳元に、怪物が囁いた。
「相も変わらぬ愚息よ。されど、その甘さがあの娘を救ったか――――」
「ッ!!」
無防備となった横っ腹に強烈無比な一撃を見舞われ、弦十郎は聴取室の壁を突き破り吹き飛んで行く。

「おっさんッ!?」
クリスが青ざめた顔を上げる先には、訃堂の首にアームドギアの切っ先を突きつけるマリアと翼の姿が。
「血迷われたかッ!?」
翼が叫ぶ。
「訃堂〜ッ!!」
マリアは射殺すような眼光を注ぐ。
二つの圧を柳に風と受け流し、訃堂は重々しく呟いた。
「――――呪印接続。儂を殺せば、あの娘も死ぬことになるぞ」

シェム・ハを意のままに操り、神州日本を護るための次世代抑止力とする。
それこそが風鳴訃堂の計画の目的であった。
使い捨てとしたヴァネッサらノーブルレッドたちの暗躍により、そのシステムを完成

させる前にシェム・ハは本来の神として解き放たれていたが、実のところ更に段階を進めた計画がなされていた。

神の力――純粋なエネルギーにる圧倒的な攻撃力はもちろんだが、受けたダメージを並行世界の同一別固体を生贄し肩代わりさせる埒外驚異能力――に訃堂も着目していた。

神と同化した小日向未来はその能力を活用可能にしても、操り手である訃堂はその恩恵には預かれない。

であればこそ、訃堂らが画策したのは、日本古来の身代わり人形、憑代といった呪術神術などに由来する神秘と、最先端科学であるナノテクノロジーの融合。

霊的にチャンネルを接続することにより、訃堂が受けたダメージを神の肉体へと肩代わりさせる。

そして神自身は神の力で自己修復は可能であるからして、訃堂も疑似的な神の力を手に入れたに等しい。

いずれは老病死の全てを神へと押し付けて、自身は現人神として永久に日本国を守護していく。

訃堂の思い描いた最終目標は、シェム・ハの消失により敢え無く潰えたかに見えたが、その遺産というべき呪いは未だ小日向未来の中へと存在した。

彼女がわざわざ竜宮まで同道されたのは、このことを見越した訃堂の手の者の仕業なのか。
もっともこれらは後日に判明したことであり、現時点の竜宮は想像だにしなかった修羅場の渦中にある。

「未来ッ！　しっかりして、未来ッ！」
血だまりの中に跪き、響が泣きそうな声で叫ぶ。
横たわる未来の顔は失血で青ざめていた。
「駄目だッ！　ここじゃ処置できない！　はやく本部へ運ばねえとッ！」
クリスが叫びながら腰を浮かす。
暗に運び出している間に訃堂を牽制するよう、マリアと翼に頼んでいるわけだが、事態は彼女の思惑を軽々と飛び越えて行く。
訃堂は己の首筋に自ら手刀を添えながら言った。
「動くな。儂が傷つけばそこの娘も傷を負う」
疑似的な神の力は、いまや神ではない小日向未来にその全てのダメージを転化するこ

とはない。
弦十郎の貫手を受けた訃堂の腕のダメージはそのままなのがその証拠。
されど根本的な体力の違いは、訃堂にとってはかすり傷程度のものでも、未来にとっては致命傷になりうる。
「くッ、卑怯な…！」
呻く翼に、訃堂は鋭い視線を投げつける。
「この老木独りに多勢で挑む方が卑怯ではないか」
くっくと笑う仕草からして諧謔を口にしたらしい。
「さあ、どうする神殺し。そこな娘を見殺しにするか？」
声を向けられ、響は青ざめた顔を上げる。そこにはいつもの闊達さ――――いや、勇気そのものが消失していた。
「助けたければ、儂に従え」
「!!」
「この場に装者は多すぎる。そうさな、半分、いま目の前にいる三人を殺せ」
「なあッ!?」
声を上げたのはクリス。蒼白な顔を見合わせる切歌と調。
「そ、そんなッ…！」

泣きそうな声を上げる響に、訃堂の無慈悲かつ悪辣な声が降り注ぐ。
「そこな娘と仲間の命。神殺しよ、おまえはどちらの天秤を取る？」
最愛の人、小日向未来。
互いに命を預け合って戦ってきた友人たち。
そのどちらかの命を選択せよ。
「…この外道があッ!!!」
激昂するマリアに対し、翼は唇を噛みしめている。絶唱を撃ったわけでもないのに、その唇と両眼からは血が伝う。
「もはや貴様は身内でもなんでもない！　ただの畜生だッ！」
たまらず叫ぶ翼に、訃堂の冷ややかな声。
「大義を理解出来ぬ塵芥の遠吠えなど、何の痛痒にもならんわ」
握った拳をぶるぶると振るわせる響に、訃堂は冷徹な声を槍のように突き刺す。
「決めろ、選べ、神殺しよ。さもなくば――――」
「う、うわあああああああああああああッ!!!」
響が拳を振りかぶる。装者たち誰もが驚愕の表情を浮かべたその刹那――――。

『響よ。おぬしは何を望む？』

ハッとして響は顔を上げる。

ここはどこだろう？　思わず周囲を見回せば、青い世界に空も何もない地平が広がっていた。
これは彼女にとって何度も覚えのあるものだ。
自分、もしくは誰かの心象風景。
カッと靴の音。
そんな彼女の前には、いつの間にか。
「ダイスさん！」
夜の王にして赤き貴種。
ティアマトの孫にして真の吸血鬼。
ドラゴンタイガー・ダイステイラー。
「おぬしの思考の刹那にお邪魔させてもらっておる。かつてドクトル・ファウストという面白いヤツと旅した時に、吾は人の想いの速さで動けると明言したからな」
洒脱に応じた吸血鬼だったがそれも一瞬のことで、表情を引き締める。
「だからといってあまり時間は残されてはおらん。外界は修羅場の真っ最中ぞ」
その言に響は思い出す。
自分が拳を振りかぶったことを。そしてその拳を向ける先は――――。
思わず固く握りしめた拳を見つめる響。

そこに優しく手が添えられた。その手はゆっくりと拳を解きほぐしていく。
それから、吸血鬼は愛おしげな眼差しを注いで、もう一度同じ言葉を口にした。
「響よ。おぬしは何を望む？」
「…ッ！　わたしはどうなっても構いませんッ！　だから未来を！　未来を助けてあげて…ッ！」
言下に言ってのける響に、ダイスは悲しげに首を振る。
「その望みは叶えられん。なぜなら、未来もおぬしと全く同じことを望んでいるからだ」
「そんなッ！　未来……ッ!!」
響の顔に初めて浮かぶ色。それは絶望と呼ばれるもの。
しかし、それを拭い去るように吸血鬼は微笑を浮かべていた。
「誤解するな響よ。吾が見初めし娘二人、そのどちらも失う気は毛頭ないぞ？」
「…ダイスさん？」
響が涙で濡れた眼差しを向けてくる。
ダイスはにっこりとして応じた。
「さあ、いと優しき勇敢な娘よ。望みを口にせよ。本当におぬしが望むものを。かつて奪い去られたその望みを――――」
「…!!」

その言葉に、へたり込んだままの立花響の記憶が舞い踊る。
ライブ会場の惨劇の生き残り。
悲劇に見舞われ虐げられ、その果てに他人を救い出すことに己の贖罪を見出した少女。
いまや勇気の花を胸に、神を殺す拳さえ振るう彼女がその過去に落としてきたもの。
響は泣いていた。
その双眸から滂沱の涙を零しながら、それでも健気に顔を上げてくる。
いいの？　許されるの？
今のわたしがそのことをお願いして叶えられるの？
無言の訴えに、赤き貴種は鷹揚に頷く。
「なら、ダイスさん、お願い――――」
子供のように泣きじゃくり、しゃくりあげながら、彼女はようやくかつて誰も叶えてくれなかった望みを口にした。
「みんなを、未来を、わたしを助けてッッ…!!」

「承知した」

パン、と吸血鬼ダイスは両手を打ち鳴らす。

――今、ここに賽(ダイス)は投げられた
吾の名のもとに束ねし因果の糸を、ここに天命の粘土板(トゥプシマティ)と共に回天せすべし
しかして吾、希望(破滅)への道を選ばん！

装者たち誰もが驚愕の表情を浮かべていた。
なぜなら、まったく忽然と未来の傍らに黒衣の青年が姿を現していたのだから。
「…ダイスさん？」
握ったはずの拳が解けているのにも気づかぬまま、ぺたりと腰を降ろした響が呟く。
その声を背に、吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラーは瀕死の未来を優しく見下ろしていた。
「…構わぬか？」
その問いかけに、顔面蒼白のまま未来は微かに頷いたように見えた。
続いて、優雅とも思える所作で、黒衣の姿は跪く。
青ざめて白く細い首筋に、吸血鬼は静かに牙を突き立てていた。
「あッ」と未来の身体が震える。
ぞぶっぞぶっと血を啜る音だけが周囲に響く。
「…あああああッ!?」
青ざめた未来の唇から洩れるのは、瀕死の者とは思えない嬌声。

あまりの光景に訃堂でさえ絶句する中、不思議なことが起こった。
天井に飛び散った未来の血が、クリスらの手に付着していた血が、まるで動画の逆回しのように千切れた左腕の中へと吸い込まれていく。
だけでない。千切れ飛んだ腕も戻ってきて、みるみるうちに繋がっていく。
吸血鬼が未来の首筋から顔を離す。
首にくっきりと空いた二つの穴はそのままに、彼女の五体は修復され、完全な血色を取り戻していた。
安らかな呼吸をする未来を横目に、ペッとダイスは床に何かを吐き捨てる。
血の塊のようなそれは、一瞬バチバチと電気じみたものを走らせた。
「未来に巣食っていたカラクリ仕掛けは吸い取らせてもらったぞ」
事も無げにダイスは言う。
「よもやこのようなモノが吾の邪眼を邪魔しておったとはな…」
黒衣の闖入者に、訃堂は珍しく目を剥いた。
「面妖な。貴様は化生のものか？」
「人から怪物と揶揄されているおぬしには呼ばれたくないものだな」
瞬間、訃堂の身体が霞んだ。
切っ先を突きつけていたはずのマリアと翼すら反応できない速度はまさに神速。

「天魔覆滅ッ！」
勢いそのままに訃堂の拳が貫手に変わったことを、装者の誰もが視認できなかっただろう。
おそらく万全の弦十郎でもかわしがたい一撃が吸血鬼を襲う。
しかし。
「遅い」
「!?」
軽々と指一本でその必殺の一撃を受け止めるは、ドラゴンタイガー・ダイステイラー。
突き放すように訃堂を放り投げ、涼しい顔で吸血鬼は宣言する。
「本来、吾は人の争いに関知せぬ」
「ぬう」
身構える訃堂に、邪眼が鋭く歪む。
「されど、吾の愛しき娘らを嬲ったことは看過できぬな」
今度は吸血鬼の姿が霞んだ。
同時に呻き声を上げた訃堂の腹部には、ダイスの拳が深々と突き込まれていた。
「ぐ、む…ッ！」
「これは未来の分」

次いで、訃堂の顎が高々と跳ね上がる。
「そしてこれは響の分だ」
「ぐはッ!?」
訃堂の巨体が天井へぶつかってバウンドする。
とてつもないアッパーカットを見舞っておいて、ダイスは背を向けた。
普通の人間なら疾うに失神してもおかしくない連撃であるが、生憎訃堂は常人ではない。
口角から血をダラダラと流しながらも立ち上がる様は、さながら鬼神の如し。
「この世に生を受けて百余年。我が精錬せしめし防人の意気地の前に、この程度なにするものぞ!」
目前の吸血鬼に躍りかかろうとした訃堂の身体は空中で制止。まるで見えない巨大な拳に受け止められたかのよう。
「むうッ!?」
うなる訃堂に四方八方から無形の圧力がかけられる。
「吾とて、降りかかる火の粉は振り払わなければならないからな」
超常の力の発揮に、装者たちは茫然と宙を見上げるしかない。
空中でもがく怪物に、吸血鬼ダイスは冷笑を見せる。

「たかだか百年程度で威を張るな、小僧！」
ごりゅっ！　という音が響き、訃堂の手足があらぬ方向へと捻じ曲がる。
「ぐはッ!!」
喀血し、ねじくれた体躯のまま訃堂は固い床に墜落して転がった。
「安心しろ。殺してはおらん」
失神して白目を剥く訃堂を見下ろし、暢気に告げるダイス。
室内の誰もが呆気にとられる中、響が真っ先に顔を上げていた。
「あの、ダイスさん…！」
ありがとうございましたッ！　と続けようとした彼女の横を軽やかに駆け抜けていく人影が。
人影は未来で、彼女は吸血鬼に抱きつくと、喜色満面の笑顔を浮かべてこういった。

「ありがとう、ご主人様（マスター）♪」

１０．お見舞いする吸血鬼

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．内士官用病室　ＡＭ１０：３０

「よう。息災そうじゃの」
吾の声に、ベッド上の弦十郎はぺこりと頭を下げてくる。
「このたびの協力、感謝する。組織を代表して礼を言わせてもらう」
その物言いに、吾は眉を顰めるしかない。
「大仰な。むしろ少々やりすぎたと自戒しているわ」
「そうは言うがな…」
「あのような若僧に、神代の力を欠片でも行使してしまうとは、つくづく大人げないことをした」
「…おまえにかかっては、オレの親父も子供扱いか」
苦笑する弦十郎に、吾は微笑と沈黙を持って答える。
確か、風鳴訃堂といったか？
人類にも稀に彼奴のような常識外の、特異点の如き存在は生まれることがある。

歴史には非業の英雄、もしくは世紀の大罪人と記される輩で、大抵は周囲の人間も一切合財巻き込んで、派手に爆散する始末が多い。
なんにせよ、七十億もいれば規格外の人間もいるということだ。
案外、かつての神々の血を微量なりとも受け継いでいるやも知れん。
感慨を振り切るように吾は視線を巡らす。
「にしても、甲斐甲斐しいのう、雪音クリスよ?」
弦十郎の隣でリンゴを剥いていた小柄な肩がいきり立つ。
「かか勘違いすんなよ!? おっさんの唯一の身内の先輩がどうしてもこれないっていうから、あたしが付き添いの代理をしてるだけだかんなッ!?」
「うむ。そういうことにしておこう」
「不承不承だ、不承不承ッ!」
「わかったわかった」
全く初々しい娘よの。あまりからかっては気の毒か。
吾と同様に苦笑していた弦十郎だったが、ふとこちらを向いて眉根を寄せる。
視線の先にいるのは、生憎と吾ではない。吾の隣に立つ娘だ。
「はい、弦十郎さん、これお見舞いです」
「う、うむ、ありがとう、未来くん」

未来より見舞いの菓子折りを受け取った弦十郎の横で、同じく不可思議そうな表情でクリスが尋ねてきおる。
「おい、あのバカはどうしたんだ？」
「響のこと？　響だったら、他のみんなと食堂へいるけど…？」
小首を傾げてみせる未来に、顔を見合わせる弦十郎とクリス。
二人の反応はさもありなん。
なにせ、響と未来は始終べったりと二人でいるのが当たり前だったと聞く。
「…な、なあ、おい。もしかして、あのバカより、こっちの吸血鬼、いや、ダイスの方が好きなのか？」
「何いっているの、クリス？」
未来は吾の腕に腕を絡めてくる。
「響は響で、ご主人様はご主人様だよ？　そんなの比べられるわけないじゃない♪」
「……」
満面の笑顔で答えられ、クリスは口を噤むしかない様子。
かくいう吾も、こう敬われ慕われるのは悪くない。
数千年もの時を閲(けみ)してきて、初めての感覚でもあり新鮮だ。
「ご、ごほん！　ともあれ、怪物の件も片付いたことだし、ひとまず安心といったところ

かな」
「実の親を怪物呼ばわりとな」
弦十郎の言に突っ込んではみたが、先述したとおり、風鳴訃堂が人類としては破格の怪物性の所持者であったことを認めるは吝かではない。
「いや、おっさんには悪いけど、マジであの爺様は化け物だって…」
しみじみとクリスも同意してくる。
「百歳越えてんだろ？　そのくせあれだけボコボコにされて命には全く別状がないっておかしいだろうよ」
吾としても殺すつもりは毛頭ないので、それなりに手加減をしている。
だとしても平凡な老人と比ぶれば、その回復力は尋常ではない。
「命に別状はないといっても、当分はベッドから動けないそうだからな。今度こそ大人しくしてくれるだろうよ」
苦笑と呼ぶには複雑すぎる表情を浮かべ諾（うべな）う弦十郎に、吾も一つ水を向けてみる。
「そういうおぬしは、どれくらい療養が必要なのだ？」
「俺か？　俺は肋骨が三本ほど砕けていたが、整骨してもう繋がったようだ。明日には退院するつもりだが」
「…僅か二日でそれとは、おぬしも十分に化け物染みているぞ？」

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．内大食堂　ＰＭ１２：２０

食堂の椅子に腰かけ、立花響はカレーとご飯をスプーンでかき回す。
非常に、非常に珍しいことに、あまり食欲が沸いてこない。
これは、普段の彼女を知る人間にとっては驚天動地の出来事であり、事実、響から少し離れたテーブルに陣取ったレセプターチルドレンの三人組は、思いきり目を剥いていた。
「…無理もないわね。最愛のあの子を、エロ吸血鬼に取られちゃったんだから…」
しみじみというマリアだったが、常にあの吸血鬼に向けている険は感じられなかった。

先日の、深淵の竜宮での赴堂の叛逆。
あの修羅場において、まさに死にかけようとしていた小日向未来を救ったのは、あの超常存在であることは否定できない。そして、彼が動かなければどれほどの惨状の発展していたかと思うと、空恐ろしい。
ぶるる、と身体を震わせるマリアの対面の席で、月読調と暁切歌も小声で会話を交わす。
「それで、未来さんも吸血鬼になっちゃったんデスか？」
「どうなんだろう？　普通に学校にも来ているし…」
「つまり、未来さんはダイスさんに寝取られたんデスね!!」
「…それ、意味分かっていってるの、切ちゃん？」

そんな元Ｆ．Ｉ．Ｓ三人娘の会話を背に、響は自身の考えに没頭していた。
彼女にとっての最愛の陽だまりである小日向未来。
未来が見舞われた惨状は、思いだすだけで冷や汗と寒気を催すほどだ。
――左腕を千切り飛ばされ、血だまりで息も絶え絶えな未来。
そんな未来を救うために、赴堂にクリスと切歌、調を殺すように教唆された。
あまりにも非道な選択を迫られ、窮地に追い込まれるも、全てを一瞬で回天せしめた

のは、かの吸血鬼に他ならない。
最愛の未来の命を助けたどころか、あの場にいた全員を救ってくれたことに対し、感謝の念しかなかった。
最愛の人が彼によって血を吸われたことなど、些末なものだとすら思っている。
未来が生きてさえくれれば。
前向きな思考を寄りあわせ、真正面から叩き付けて現状を打破していくのが立花響のスタイル。
にも関わらず、響は精彩を欠いていた。
そんな彼女の脳裏には、昨晩の寝床での会話が浮かんでいる。

『未来、もう腕は大丈夫なの？』
『うん、ご主人様（マスター）が治してくれたから！』
『え、と。そのダイスさんは未来にとっての…？』
『そうだよ、ご主人様だよ！』
『……』
『どうしたの響、そんな顔して？　うふ、安心して、私にとって響は響だから』

それから二人して、いつも通りに身を寄せ合って眠った。
あれほどの大怪我をしたにも関わらず血の匂いを全く感じさせないことに安心し、常日頃と同じお日様の匂いに包まれて幸福な眠りに落ちた響だったが、ふと気配を感じて目を覚ましたのは夜半すぎ。
『……未来?』
薄目を開ければ、優しい香りのする黒髪が目前で動いている。
くすぐったく首筋を行き来するのは、鼻息か吐息か。
続いて。
『ひゃッ!?』
首筋に甘やかな感触。
『ちょ、未来やめてよ…』
スキンシップなど日常茶飯事だが、こうもダイレクトにキスの雨を降らせられるのは、あまり記憶にない。
しかも、首筋といった敏感な部分になど。
『うふ、響の首、とっても綺麗だよ』
囁くような声を出しながら未来は上目使い。蠱惑的な瞳が闇の中で光っている。
『もういっそ、食べちゃいたいくらい…♪』

甘い吐息と一緒に唇から零れ落ちたものに、響は目を見開く。
あれ？　未来の歯ってそんなに尖って…？
『コラ、やめんか』
『あいたッ!?』
唐突な男性の声。
ポカリと叩かれて小さく上がる未来の悲鳴。
思わず跳ね起き、パジャマの襟首のボタンを締め直す響の前には黒衣の吸血鬼の姿が。
『だ、だ、ダイスさん!?』
『おう、響よ、眠っているところ申し訳ない。…それにしても吾の許しもなく節操がないぞ、未来や?』
『ごめんなさい、ご主人様』
睨まれ、可愛らしく舌を出して謝罪する未来。
『おぬしの気持ちも分からんでもないが、自重せい』
『は～い』
手をあげて元気よく返事をすれば、霞のように消え去る吸血鬼。
その後、何事もなかったように同じ陽だまりの笑顔を向けてくる未来がいる。

『ご主人様に怒られちゃった♪』
『未来…』
『ごめんね、もうしないから、寝よ、響』

スプーンでなお執拗に皿の上のカレーをかき混ぜながら、響の表情は冴えない。
それは、最愛の人の態度の変化ゆえ？　それとも彼女の唇に尖った牙を見たせい？
…ううん、違う。
自分でも良く分からないけど、どれもきっと違って…。

ポン、と肩を叩かれる。
振り向けば、マリア・カデンツァヴナ・イヴが不敵な笑みを湛えていた。
「どうしたの、そんなに肩を落として？　あなたらしくもない」
「え、えへへ、そんなことは…」
振りかえって笑って見せるも、自分で分かるほどの明らかな虚勢。
そんな神殺しの拳を持つ少女を痛々しく見やったあと、ふっとマリアは頬を緩めて言う。
「あなたは午前中で終わりでしょうけど、午後からの私の訓練も見に来なさいな」

「はい？」
「少しくらい、気が晴れるかもよ？」

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部内多目的トレーニングルーム　ＰＭ１４：００

「だからって、なんてあたしまで…」
隣でブツブツいうクリスをマリアが宥める。
「そういわないで。あとはあなたと私だけが最後の砦みたいなものなんだから」
そんな彼女二人が向かいあう先にいるは、吸血鬼。
いまやＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．内でもその活躍は周知され、なんと女性職員の間にファンクラブすら形成されつつある非公式アドバイザー、ドラゴンタイガー・ダイステイラー。
「…どうしても戦わなければならんのか？」
未だ彼が難色を示しているのは、マリアの操るアガートラームが、かのエンキの左腕

であるがゆえ。

「別にいいでしょう？　未だ模擬戦をしていないのは私たちだけくらいだし」

マリアは言ってのけるが、模擬戦など成立していない。

さらに正確を記せば、いまだシンフォギアの着装シーンを披露していないのはクリスとマリアだけという話だ。

切歌の着装を見て、盛大に放血した吸血鬼の姿も記憶に新しい。

マリアが不敵な笑みを浮かべているのは、自身たちの姿も切歌にゆめ劣らないという自負があるからだ。

事実、スタイルの良さ――――胸部装甲の豊かさでは、マリアとクリスは装者たちの中でもトップ２である。

その二人が揃って目前で着装するのだ。

さぞかし盛大な噴血が見られることだろう。

――――その光景を見れば、あの子の溜飲も少しは下がるでしょう。

心中でマリアはそうほくそ笑んでいるものの、彼女は気づいているだろうか？

心のさらに奥底では、人ならぬ活躍を見せた吸血鬼に対する密かな怖れがあることに。

あまりにも超常な存在に無様を起こさせ、卑近なレベルに引き下げたいという彼女の

心の変遷は、いかな理由に拠るものか。
　自身の心の動きに無自覚なまま、マリアは聖詠を口にする。
「Ｓｅｉｌｉｅｎ　ｃｏｆｆｉｎ　ａｉｒｇｅｔ―ｌａｍｈ　ｔｒｏｎ　…」
　半瞬遅れて、クリスも不承不承追従する。
「Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ　…」

　果たして、さんさんとライトの降り注ぐトレーニングルームに降臨するは、二つの豊かすぎる双丘…もとい、アガートラームとイチイバルのシンフォギア。
　ふふん、といった表情で髪を跳ね上げるマリアに、何事かに備えるよう身構えるクリスに対し、肝心要の吸血鬼はというと――――。
「馬鹿なッ！　なんで鼻血を噴いてないのッ!?」
　マリアが吠えるも、
「といわれてもなあ…」
　平然とした顔で頬をポリポリと掻く吸血鬼ダイス。
「くッ！」
　なお信じられないのか、マリアはクリスの背後へまわり込んだ。
「ほら、見なさい、こんなにぼよよんなのよッ!?」

「ひゃあッ!?　やめろぉッ!!!」
　クリスの胸を盛大に揺らして見せるも、
「やめい、はしたないぞッ！」
　対象の吸血鬼から冷静に叱責される始末。
「…いったい、いつの間にそんな耐性を…ッ!!」
　がっくりと膝を折り呻くマリアに、吸血鬼は照れくさそうに言う。
「それは…吾も童貞を卒業したからのう」
　顔を上げ、マリアはくわっとした表情で叫ぶ。
「やっぱりアナタ、童貞だったのねッ!?」
「だから違うとゆーとろうが！」
　マリアに怒鳴り返しておいて、それから改めてダイスは二人を睨む。
「まったく、にしても二人してけしからん格好をしてからに」
　その眼差しに、あたしはもう帰っていいのかな、なんて考えていたクリスは目を見張る。
　次に起こったことは誓って一瞬のこと。
　クリスの纏ったイチイバルの上から、高級そうなセーターとスカートが着せられていた。

「!?」
　状況に理解が追い付かないクリスに、吸血鬼は声高に言い放つ。
「セーターは高級カシミアで、スカートはエルメスの逸品ぞ」
「って、セーターが伸びるだろうがッ！」
「まったく、年頃の娘は腹を冷やすものではないぞ？」
「うっ…、ありがと…？」
　こちらを気遣う正論に、角張ったギアの形にセーターを伸ばしたまま、とりあえず礼を口にするクリス。
「うむ。重々気をつけろよ。丈夫な弦十郎の子が産めなくなると困るであろ？」
「おおおおっさんは関係ねーだろッッッ!?」
　激昂するクリスを横目に、ダイスはマリアに視線を転じる。
　マリアもアガートラームの上から衣装を着せられていた。
　その格好は。
「…これは、なに？」
「モンペだぞ。ああ、言っておくが最近流行りのモンスターペアレントの略ではないぞ？」
　一瞬で額に複数の青筋を浮かべるマリア。なぜなら、彼女が上に着せられているの

は、見紛うことなき割烹着。
「ふははは、オカン臭いおぬしにはすこぶる似合っておるわ」
吸血鬼の哄笑を受け、銀の閃光が走る。
「…殺すッ！」
「ほほう？　おぬしに出来るかな？」
一瞬でトレーニングルームは戦場と化す。
さっさと脱出してきて隣でカシミアのセーターと格闘するクリスに気づいた様子もなく、響はトレーニングルームの光景を見つめていた。
マリアの猛攻を、余裕の笑みを浮かべてかわし続けるダイス。
吸血鬼であり、超常的存在であるから、それは当然なのかも知れない。
しかしながら、彼ほど強い男性は、響の半生において記憶にない。
師匠である風鳴弦十郎より強い男など。
そこまで至り、いやいやダイスさんは吸血鬼だから！　と思い直すも、続いて響の脳裏に浮かんだのは、キャロルの姿だ。
シェム・ハとの最終決戦の際、ダウルダブラを纏ったキャロルから問い掛けられたことは鮮やかに思い出せる。
『立花響、キサマは何を望む？』

同様の問いを吸血鬼からかけられたのは、つい先々日のこと。
だが、同じ問い掛けに思えて、その意味と内容は大きく異なる。
敢えて単純に行ってしまえば、キャロルからの問い掛けは、響自身がどのような決着を選ぶのかという意味だ。
対して、先日の吸血鬼ダイスからの問い掛けの際に、響自身に何も決定権はない。いや、あったにしても、何も選べないという二進も三進もいかない状況だった。
成す術もなく悪意に翻弄されるしかなかったあの瞬間に、彼女は過去のトラウマを重ねる。
スタジアムの惨劇で生き残った故に、周囲から向けられた有形無形の悪意の数々。
逃げることもままならず、助けの手を差し伸べてくれる人もおらず、ただやり過ごすしかなかった苦痛の日々。
――それが、一瞬で吹き飛ばされた。
おそらく、あの時、もっとも望まれた最良の結末で。
その時の感動を思い出し、響は頬が熱くなるのを感じる。
いつの間にかトレーニングルームの喧騒は収まり、地面に倒れ伏したマリアのもとから悠々とダイスが立ち去ろうとする姿が。
そんな彼の背中にとびつくように近づき、タオルを渡しているのは誰であろう小日向

未来。
その様相に、響の胸がチクリと痛む。
「…まあ、なんだ。アイツら、あんな風にイチャついてるけど、気ぃ落とすなよ…？」
珍しくクリスが慰めていた。
茫然と立ち尽くす響に、クリスは、あの子を取られたんだもんな、ショックだろうな、と切歌と調と同様の感想を抱いている。
その見解は大きく違っていることなぞ、露にも思っていない。
それは無理もないことだろう。
なぜなら、響当人も、今に至り始めてその感情に気づいたのだから。

ダイスと未来を見つめ、チリチリとした胸の痛みを覚えながら響は心の中でそっと呟く。

そっか。
わたしは、ダイスさんに嫉妬してたんじゃあない。
ダイスさんの隣に未来がいることに嫉妬していたんだ…。

１１．海へ行く吸血鬼

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．内発令所　ＡＭ１０：００

風鳴弦十郎は腕組みをして、正面のモニターに見入っていた。

その隣ではエルフナインがコンソールを操り、反射するブルーライトが彼女の顔を染め上げている。

「…つまり、未来くんの身体は、ほとんど生身の人間そのものだと？」

「はい。バイタルデータ上、まったく普通の人間そのものです。しかし唯一…」

「なにか変化が？」

弦十郎に問われ、エルフナインは僅かに口ごもる。

「テロメアの消耗が観測できないんです」

「…なんだとッ？」

テロメアとは、染色体の末端に位置する遺伝子情報を内包しない構造体だ。

ざっくりいえば、そのテロメアを消耗することによって、新たな細胞が分裂し続ける。

すなわちこれが新陳代謝だ。

テロメアが無くなれば、それ以上細胞は分裂することが出来ず、命の代謝はなくなり

生物的な死を迎えることになる。
そんなテロメアが消耗しない？
にも関わらず、小日向未来の生物としての生命活動は維持されている。
その意味するところは――――。
「未来くんも、吸血鬼と同様に不死性を手にしたということか…？」
弦十郎はうめき声を出すも、この展開は想定内だ。
なにせ、かの吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラーに未来は血を吸われている。
古来伝承より、吸血鬼により血を吸われたものは、また吸血鬼になるという。
しかし、弦十郎の言に、エルフナインは小難しそうに眉根を寄せたまま呟くように言う。
「ですが、果たしてこれを〝吸血鬼〟の特性と明言してよいものでしょうか…」
現状、小日向未来の日常生活に全く変化はない。
普通の食事を食べ、リディアン音楽院にも登校している。
夜な夜な出歩くわけでもなく、棺ではなく布団で眠っているらしい。
日光を恐れ、血液以外を摂取できない吸血鬼の伝承とあからさまに矛盾していた。
「…もっとも、あのドラゴンタイガー自身が、巷間の吸血鬼と自分は違う存在だと明言していたな…」

弦十郎も眉間に皺を寄せた。
であれば、小日向未来は、いったいどんな存在になったというのだ？
「もはや埒外生理学とでもいうべきか…」
「いえ、どちらかといえば、一種の呪いのようなものかも知れません」
弦十郎はエルフナインと顔を見合わせ、どちらともなく溜息をつく。
実際、現Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．には、呪いを〝浄化〟する手段は存在した。
神秘殺しの神獣鏡。そのファウストローブ。
しかし、その纏い手が、呪いを患っているらしい未来本人であれば手詰まりだった。
「まさに、錠前のついた宝箱の中に、その鍵が入っているような状態だな」
呟きつつ、弦十郎はエルフナインの肩を優しく叩く。
「とりえあえず未来くんに劇的な変化が認められない以上、この問題の優先度を下げることにしよう。当面、経過を観察しつつ対応を検討していくしかあるまい」
超常の力が働いた結果、小日向未来は命拾いをしている。
間接的とはいえ彼女を殺しかけた弦十郎にとって、いまの未来の状態は否定出来るものではなかった。
自らの拳がこの少女の命を奪ってしまった可能性を思えば、豪胆な肝も冷えてしまう。

さらに、そこから派生させた、想像することすら恐ろしい結末。
もしあの時、立花響が最愛の人小日向未来を喪失していたら――？
心底戦慄すべき仮定から目を逸らし、弦十郎は現実へと向き直る。
愛すべき陽だまりを救われた形となった響であるが、そんな彼女が最近精彩を欠いているとの報告が上がってきていた。
小日向未来が、彼の吸血鬼を主人と慕い、行動を共にしているのが原因ではないかと思われる。
元々、響と未来という二人の紐帯は完璧で余人の入る隙間など見当たらなかった。
にも関わらず、未来の心が変遷したのは、吸血行為によって生じる主従関係の影響ではないのか――。
報告書（レポート）はそう結ばれている。
なるほど、と頷きつつも、弦十郎とて木石ではない。
響の内心を占める嫉妬が、最愛の人を取られたという単純色ではないことは薄々察していた。
しかし、だからといってなあ…。
「…弦十郎さん？」
疑問を瞳に浮かべて見上げてくるエルフナインに、弦十郎は大きな苦笑で応じた。

「いや、吸血鬼だろうと人間だろうと、心の動きはなんとも御しがたいものだと思ってな」
「…？」

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部内多目的トレーニングルーム　ＰＭ１４：００
「ハアッ！」
風鳴翼の裂帛の気合が迸る。
追随するように、凄まじい斬撃が地面ごと空間を切り裂いていく。
「くッ！」
対して、どうにかその一撃を受け流した響に、二の太刀、三の太刀が迫る。
「…先輩のやつ、ずいぶんと気合が入っているなあ」

隣室のモニタールームでその訓練を眺めるは雪音クリス。
「先日の件を、翼なりに不覚と思っている証拠じゃない？」
そう応じ、マリア・カデンツァヴナ・イヴは腕を組む。

――――先日の件。
深淵の竜宮における、風鳴赴堂叛逆未遂事件に他ならない。
もっともその経緯や結末は、公式に報告はなされていなかった。
彼の吸血鬼の活躍を詳やかにして良いのか現場の意見は割れた上に、赴堂の真の目的やその協力者のあぶり出しのためにも情報は秘匿する必要性があったからだ。
それはともかく、あの土壇場に於いて、やはり風鳴翼は思うところがあったのだろう。
赴堂の策略に嵌められたとはいえ、自分には何もできなかったという不甲斐なさ。
間一髪、あの吸血鬼の術にすくわれたが、目前で仲間を失う羽目になっていたと思うとぞっとする。
この心理的な動きは、叔父である弦十郎と全く同一のもの。
心の負い目を解消するように自身を鍛える――――もしくは肉体を苛めているのは、翼にとって当然の代償行為であり、同時に未熟さの発露であったかも知れない。
「…まあ、変に塞ぎこまれるよりは全然マシよね」

一緒にステージに立ったこともある相棒の胸の内を、マリアはほぼ正確に推察している。
精神と肉体は密接に結びついていることは言うまでもない。
無理やりでも身体を動かせば気は紛れ、夜も疲労で眠れるはず。
「するってえと、むしろ問題は…」
激しさを増す戦闘訓練を見つめ、クリスは苦い顔付きになる。
「ええ。翼より、むしろあの子の方が――――」
マリアが呟くや否や、盛大な土埃が巻き起こる。
そしてそれが収まった先に見えるシルエット。
片膝をついた響の首筋に、天羽々斬の切っ先を突きつける翼が立っていた。
「どうした、立花ッ。何を腑抜けているッ!?」
「いえッ、そんな…ッ」
言い差して、響は目を合わせられない。
逸らした視線の先ごと斬り捨てるように翼が叫ぶ。
「集中できなければ鞘走るなッ！　これが本当の戦場(いくさば)であれば、今日のおまえは疾うに三回は死んでいるぞッ!?」
「…ッ！　も、もう一度お願いしますッ！」

立ち上がる響に、しかし翼は背を向けた。
「つ、翼さんッ!?」
「もう帰れッ。今のお前は完全に戦場に立つ覚悟を欠いているッ！　そんな覚悟で相対されても、なんの腹の足しにもならんどころか業腹だッ！」
「…ッッ」
言い捨てて歩き去る翼の背中に何かを言いかけて――――響はシンフォギアを解除している。
そのままトボトボとシミュレーションルームを出ていってしまったのは、まったく普段の彼女らしからぬ姿。
そんな響の様子を一顧だにせず、翼もシンフォギアを解除。
隣室のモニタールームへと入れば、目前に飛んでくるハンドタオル。
「お疲れ」
「ッ。マリアかッ」
宙で受け止めたタオルで頬と額の汗を拭う。
「あたしもいるぜ?」
「なんだ、雪音もいたのか」
クリスからは冷たいスポーツドリンクを受け取りつつ、翼は椅子へと腰を降ろす。

「…ま、あんな緊張感のない訓練をしてちゃあ返って危険だわね。中止して正解よ」
「わざと憎まれ役買って出たんだろ？　さすが先輩だな」
マリアとクリスの立て続けの称賛に、翼は一瞬目を丸くする。
それでも、ごほん、と軽く咳払いをしたあと、半ばそっぽを向きながら照れ隠しのような口調で答えた。
「ま、まあな。しかし、立花も何をあんなに精彩を欠いているものか…」
「そんなの、決まっているでしょう？　ねえ？」
顔を見合わせ苦笑をかわし合うマリアとクリスを、翼は不思議そうに眺める。
「何が決まっているのだ？」
「小日向未来よ。あの子の最愛の陽だまり」
「…小日向がどうかしたのか？　もう完全に回復したのだろう？」
マリアの言に首を捻る翼。
「先輩、それマジで言っているのか？」
「？」
「…もしかして、あの子がエロ吸血鬼の下僕になったこと、理解してないの？」
「えっ」
「えっ」

「えっ、て、おいおいッ!?」

親友である小日向未来との生活は、それほど変わっていないと思う。
一緒の寝床で目を覚まし、一緒に食事を摂り、学校へと通う。
学校でだって一緒に昼食のお弁当を食べて、放課後に補習に付き合ってもらうこともしばしばだ。
ただ、S．O．N．G．における戦闘訓練やミーティングにまで、彼女を同道することは出来ない。
なのでその時は、お互いに不承不承に別れるしかなかった。
それでも、家に帰れば、温かいご飯を作って未来は待ってくれている。
その事に関して、響は疑いを持っていなかった。
疑いを抱こうとしたことすらない。

しかし、今の彼女の内心を覗ける者が存在したら、直立不動とも思えた未来への想いが不様に揺れていることに驚いただろう。
「…今日も本部にダイスさん、いなかったな…」
最愛の陽だまりの恩人になった吸血鬼の名を呟く。
そしてその吸血鬼ダイスを主人と呼ぶ親友。
二人の姿が揃って見えないことが、響の心をかき乱している。
「わたしって、こんなに独占欲が強かったかなあ」
わざと口にした呟きは、独占の対象を指定していない。
自分でもはっきりと分かる誤魔化しの台詞。
一度自覚した異性に対する感情は、小日向未来へ抱いているものと似て非なるもの。
それでも相手は吸血鬼。人間ではない超常的存在なんだよ？
そう自分を諌めるも、空しい。
例え相手が永遠の刹那を生きる巫女であろうと、人造人間であろうと、むしろ神様であろうと手を取り合っていくのが彼女スタイル。
胸に抱いた感情を捨てるのは、過去に積み上げてきた行動を否定することに等しいのだから。
さらに。

もし、二人が、わたしのいない間に――――!?

目をぐるぐるさせる響の頭に浮かんで消えるは、ティーン雑誌の益体もない記事の数々。

彼氏が出来たら。彼氏と初デートのあと。彼氏とのお泊りデートのあれこれ。

「響ッ！」

最愛の人の声が、響を現実に引き戻す。

見れば目前の道路に停まる一台の大きなワンボックスカー。

その助手席から手を振っているのは当然小日向未来として、その奥でハンドルを握るは、絵にかいたような美青年。

吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラー。

未来に応じようとした笑顔が曇る。

やっぱりわたしがいない間に、二人は二人きりで――――。

「響先輩！　早く乗るデスよッ！」

「!?」

後部座席の窓から身を乗り出す人物に、響の曇りが一気に吹き飛ぶ。

声をかけてくれたのは暁切歌で、後部ドアを開けてくれるのは月読調だ。

「ど、どうしたの、みんなして？」

「ダイスさんに誘われたんデスッ！」
「みんなで海に行こう、って」
立て板に水にいってくる切歌＆調に、響の胸のモヤモヤは多少なりとも晴れて行く。
「ＯＫッ！　いいねえ、行こう行こうッ！」
無理やりテンションを爆上げし、勢いよく車へ乗り込む。
その後部座席の様子を吸血鬼ダイスは一度振り返り、臆面もなく言った。
「うむ、今日は両手に花どころではないな。綺麗どころでいっぱいではないか」
「……」
余人なら歯が浮く台詞をさらりと言ってのけ、耳にした少女の頬をすべからく染める技は、果たして吸血鬼のスキルなのだろうか？
「ダ、ダイスさん、ちょっと褒め過ぎっていうか…」
「世辞ではないぞ？　皆、本当に麗しい限りだ」
響のささやかな抵抗は一瞬で粉砕される。
見れば両隣の切歌に調も顔を真っ赤にして黙りこんでいた。
可愛いとは言われても、綺麗とはてんで言われ慣れていない二人である。
「もう、ご主人様（マスター）、あまりみんなをからかわないで」
「…別にからかってはおらぬ。思った通りのことを言っているつもりなのだが」

首を捻りつつ、ダイスはハンドルを手に前を向き直っている。
彼の腕を叩く未来の姿を見て、響は目を伏せた。
本当に恥ずかしかった。
いま、自分の目に浮かんでいるのは羨望という名の色だろうから、なおさら。

砂浜へ下りるなり、切歌と調は駆け出す。
その後に続く未来も見送り、響は独りアスファルトの階段へと腰を降ろした。
手には、途中のコーヒーチェーンのドライブスルーで購入したトールサイズ。
冷たい潮風を浴びながら飲むシロップたっぷりのコーヒーは、じんわりと身体へ染み込んでくる。
冬の夕暮れは早い。
しかし、その短い時間を謳歌するように、切歌たちははしゃいでいる。
靴の爪先を浸すギリギリまで波打ち際に行ったり、石を投げて水切りをしたり。
「どうした、響。おぬしは行かないのか？」
「ダ、ダイスさんッ!?」

気配も感じさせず、すぐ横にやってくる吸血鬼。
「え、えへへ、今日はちょっと訓練で疲れちゃって…」
「ふむ」
あからさまに狼狽える響に、吸血鬼は何も言わない。
黙って並んで横に腰を降ろすと、同じく海を眺めはじめた。
聞こえるは潮騒と切歌たちの笑い声。
そうやって二人で海を眺めていたのは、決して長い時間ではないだろう。
突然、吸血鬼は呟く。
「本当に、美しいな…」
「ッッ！　だ、誰がですかッ!?」
反射的に食いついてしまう響に、吸血鬼ダイスは笑って水平線を指さした。
「あの沈みゆく夕日のことよ。紺碧の海の懐に抱かれながら、橙色の光彩を振りまく。実に美しいとは思わんか？」
「あ、は、はいッ」
「一歩星の外へ出て眺めれば、太陽など巨大な火球も同然ぞ？　されば、まっこと世界とは不可思議なものだな」

「は、はあ…」
いきなりスケールの大きな話になってしまって戸惑う響。
彼女の様子に気づく風でもなく、吸血鬼の青い瞳は沈みゆく太陽へと注がれたまま。
その端正な横顔を眺め、響は盛大に動揺していた。
根本的に、吸血鬼が太陽を眺めているということに対する行動の違和感は無視しよう。
それを差し置いても、なんで心臓がこんなにドキドキとしているんだろう？
鼓動を抑え込むように、コーヒーをゴクゴクと飲む。
熱い液体が身体を温めてくれたらしい。暑い。
我知らず、響は自分のマフラーを外していた。
襟元を大きく広げ、冷たい外気に首筋を晒し、パタパタと仰ぐ。
ふと、隣の吸血鬼と目が合った。
ぐびり、と息を飲む響。
少しだけ顎を持ち上げ、そっと瞼を閉じてしまったのは、自分でもよく分からないアクション。
「――――響？」
吸血鬼の声。

潮風とは違う空気の動きが首筋を撫でる。
目を閉じたまま響は唇を噛みしめた。
ぷるぷると震える彼女は、何かを期待し、何かを覚悟している。
吸血鬼の顔の気配を、すぐ近くに感じた。そして――――。
「何をしておる？　そんな格好をしていたら風邪を引くではないか」
丹念に首にマフラーを巻き直された。
「……」
響がたちまち顎を引いて頬を真っ赤に染めたのは、自分の行動を恥らっているのか、それとも。
「響さ～んッ！」
切歌の声。
そちらを振り向けば、夕日の最後の残照が一瞬明るくあたりを照らし出す。
続いて訪れた濃い暗闇は黄昏時。
その闇の中で、響は彼を見失う。
海岸沿いの街路灯が周囲を照らし出した時。
吸血鬼の黒衣は、彼女の親友の隣にある。
波打ち際で、ともあればそのまま闇に溶けてしまいそうに寄り添う二人のシルエッ

ト。

その光景を響は直視できなかった。

ただ唇を噛みしめ、脈打つ胸の上でぎゅっと拳を握る。

親友の幸せそうな様子。

ただ祝福してあげればいい。

…分かっているのに、こんなに胸が苦しいのは、なぜ？

一方の未来の方は、主人と慕う吸血鬼の腕に抱かれ、海を見つめていた。

彼女の海風になびく黒髪に涙の粒が混じっていたことは、親友すら気づかない。

「おう、泣くな未来」

吸血鬼の声が夜を誘う。

いまや全身を闇に染めて、夜の王は従僕となった少女を抱きすくめていた。

「でも…ッ！」

そういって見上げてくる白い頬の涙を指ですくう。

「案ずるな。決して悪いようにはせぬ」

安心させるための微笑。

続いての呟き声は、静かに闇へと染みこんでいく。

「いずれにしろ、決別の日は近い――――」

声を孕んだ闇は、誰に聞かれることもなく潮騒に飲まれて消えた。

12．求婚する吸血鬼

かつて一席設けた際に、吾は弦十郎に問うたことがある。

「…聖遺物の存在が、現人類にとっての害悪か否か、か」

偉丈夫は、小さく見える酒杯を手に考えこんでいる。

例のシンフォギアといったか？　あれは聖遺物を現代科学で鎧のように纏えるようにする技術だと聞く。

あれのおかげでノイズに対抗できるようになった聞くが、そもそものノイズ自体が異端技術（ブラックアート）による対人間殲滅兵器なのだ。

つまるところ、人間は、先史文明のよく分からないもの同士をぶつけ合って凌いでるといっても差し支えあるまい。

吾の存念なぞ百も承知なのだろう。

たっぷりと時間をおいて、ようやく弦十郎は口を開く。

「先史文明の遺産の解析が進めば、更なる現代科学のブレイクスルーが望めるだろう。

永久機関の開発すら出来るかも知れん。少なくとも、関わり合った技術者にとっては、将来の指標や指針、インスピレーションを得ることは可能だろうな」
「ふむ。おぬしは賛成ということかや？」
「いや、これは建前というやつだ」
　弦十郎はニヤリと笑って、
「オレ個人としては、現人類に聖遺物は不要だと思っている」
　にこやかに断言する。
「ほう？　その心は？」
「己の理解できない機械など、悪戯に弄るべきではないのさ」
　幼子に精密な機械を好きに弄らせれば、万が一にも上手く動かせることがあるかも知れないが、大半は壊してしまうであろう。
　弦十郎の言は人類を卑下している風に聞こえて、単純な一般論でもある。
「にべもない、というべきか。まあ、おぬしらしい返答ではあるな」
「過去に学ぶのも大切だろうが、かつての遺産を宛にする生き方なぞさもしいだろう？
　そもそも、そんな超高度な文明が滅びていることにこそ注意を払うべきだ」
「なるほど。道理よ。全ての人類がおぬしと同じような考えを持てば、或いは」
　ひょっとしたら、吾は微笑んでいたかも知れない。

「いや、それは無理だろう。道具があれば使いたくなるのが人間の性だからな」
弦十郎は寂しげに、空の杯に新たな酒を注いでいく。
「仮に理想が叶えば、そうだな、オレたちは飯を喰い上げることになるな。その時は諸手を挙げて無職になっても構わないか」
「では、おぬしが将来、プータローになれる日が来ることを祈って」
「…随分俗な言葉を知っているな」
吾らはお互いに笑いあい、酒杯同士を打ち付けたのだった。

S．O．N．G．内　第三ホール　PM16：00

「あれ？　クリスちゃん？」
ホールの入口前まで来た響は、驚きの声を上げる。
対して、よっ！　とばかりに手をあげるクリスは、真紅のパーティードレスが煌びや

かだ。
「あ、響さん！　クリス先輩もッ！」
　続いて現れた切歌と調も、それぞれ緑とピンクのパーティードレスを着ている。
「む、遅参してしまったか？」
　次にやってきた翼とマリアも、着ているドレスは青と白のパーソナルカラー。
「まったく、いきなりサイズピッタリのドレスなんか送りつけてこないでよ、あのエロ吸血鬼め…！」
　マリアはプリプリとした口調で言うものの、この場に集った装者たちの中では一番メイクに気合が入っている模様。
　そんな仲間たちを見回し、黄色いドレスを着た響は動揺していた。
「は、ははは、みんなも呼ばれてたんだ…！」
「あ？　おまえも貰ったんだろ、この招待状？」
　クリスが指先に摘まんだ封筒をヒラヒラとさせる。
　差出人はドラゴンタイガー・ダイステイラー。
　内容は、ごく内輪なパーティを行うので参加して欲しいとのこと。
　ご丁寧に各人用に誂えたドレスも送られてきていたのは、先ほどマリアが口にした通り。

「みなさん、いらっしゃい」
ホールのドアが開く。
中では薄紫のドレスを着た小日向未来が笑顔を浮かべていた。
その親友の顔を響はなぜか不安げに見てしまう。
「あれ？　どうかした、響？」
「う、ううん、別に？」
そうは言ったものの、未来は自分が見たこともないメイクをしている。
ならば、その化粧は誰のために施したもの？
モヤっとした気持ちを抱えつつホールの中へ入れば、いくつかの丸テーブルの上にたくさんの種類の料理が並べられ、湯気を上げていた。
「ご主人様（マスター）は少し遅くなるから、冷めないうちに食べててって」
いわゆる立食パーティなのだろう。
切歌と調はさっそく歓声を上げて盛大に更に料理を取り分けている。
ドレスを汚したくないからか、もそもそとサンドイッチばかりを齧りながらクリスは訝しげに首を捻った。
「おい、おまえは喰わねーのか？」
クリスの疑問はもっともなもので、こんなバイキング方式ではイの一番に吶喊するは

ずの響がぼんやりとしている。
「あ、う、うん！　そうだね！　よーしッ、食べるぞッ！」
　あからさま過ぎる空元気。
　どう見ても無理に料理を頬張っている風な彼女を遠目に眺め、グラス片手に溜息をつくマリア。
「本当に重傷みたいね」
　しみじみそう呟けば、
「まさに立花らしくないな。腹でも痛いのだろうか？」
　隣で呑気に応じる翼がいる。
「貴女は本当に色恋には疎いのね」
「侮るなッ！　私とて色恋沙汰に興味がないわけではないぞッ!?」
　ジト目で見てくるマリアを睨み返し、持っていたところてんを啜ってから翼は尋ねてきた。
「…ところで、立花は誰に懸想しているのだ？」
「まったく、この剣は鈍い上に色気がないことと言ったら――――！」
　それなりに騒がしく盛り上がる室内。
「またせたな」

忽然と、黒衣の姿が一段高いステージ上に現れる。
「ダイスさん…ッ！」
そんな吸血鬼の登場に真っ先に声を上げる響。
そして彼の格好の変化に一番に気づいたのも彼女だ。
普段のダイスの格好は、それこそ吸血鬼然とした襟の高いマントを着用しているが、今日の彼はスーツのみ。
そのスーツは、襟と袖に目を見張るような豪奢な施してあり、タキシードの豪華版と括れないほどの荘厳さ。
胸元から溢れるヒラヒラとしたスカーフは、眩しいほどの純白だ。
（…まるで、結婚式の衣裳みたい）
響は思わずそんな感想を抱いてしまう。
同室の装者たちも同じ感想を抱いたらしく、マリアが遠慮なく発言。
「なあに？　これから結婚式でも催すみたいな格好をして」
「おお、まさにその通りだぞ」
微笑んで首肯する吸血鬼に、マリアは面食らっている。
マリアの背後で、響の顔が青ざめた。
吸血鬼ダイスのすぐ隣に未来がいる。

「まさか、その子と結婚するつもりなのかよッ!?」
驚愕の声を上げたのはクリス。
対してダイスはその質問には答えず、逆に問いを投げかけてくる。
「みな、招待状を持っているかや？」
「持って来ているけど、結婚式のことなんて一言も書いてないじゃないッ！」
ほとんど絶叫するマリアを筆頭に、それぞれが招待状を手に持つ。
一番遅れて響が引っ張り出した姿を認めてから、吸血鬼ダイスはパチンと指を鳴らした。
「ッ!?」
装者全員が目を見張る。
彼女たちが手に持っていた招待状は、全てが一輪の薔薇へと転じていた。
「なによ！　こんな手品を披露したからって、今さらわたしたちが驚くとでも…」
あからさまに驚いたくせに、マリアは牙を剥く。
しかし、吸血鬼は悠然と笑って受け流す。
「もそっと良く薔薇を見てみい」
え？　と手元の薔薇に視線を落とすマリアの横で、調と切歌が声を上げる。
「これって！」

「指輪デースッ！」
枝の部分に掛けられたシルバーリング。
装者全員がもつ薔薇のそれぞれで輝いている。
「なななななんのつもりなんだよッ?!」
顔を真っ赤にし激しく狼狽するクリス。
対して、不思議そうに指輪を矯(たが)めつ眇(すが)めつ翼。
調と切歌は互いの薔薇を見て息を飲み、マリアは頬を赤く染めるもキッと吸血鬼を睨みつける。
「なんのつもりもなにも、結婚指輪だぞ。見たままではないか」
「あ、あたしたちが誰と結婚するってんだッ!!」
「むろん、そんなことは決まっておるだろう?」
装者全員を見回してから、吸血鬼は優雅に一礼。
「吾は、おぬしら全員に求婚する」
「…ッッッ!?」
絶句するもの。
大声を上げるもの。
いまだ何がなんだか理解が追い付かないもの。

そんな彼女たちの前に、吸血鬼は深々と片膝をつく。
「七音の娘たちよ。どうか吾の伴侶となってくれまいか？」
「な、なによ、そんないきなり…ッ！」
顔を真っ赤にしたまま応じるマリア。何とも乙女チックに身体をモジモジと揺らしている。
「おいおい、本気で言っているのかよ？」
幾らかクリスが懐疑的な声を上げられたのは、先走ったマリアの醜態（？）のおかげで冷静になれたからか。
「う、生まれて初めて結婚を申し込まれたデスよ、調ぇ！」
「切ちゃん、わたしだってそうだよ！」
キャーキャー騒ぐ年少の二人組に、
「男女の婚姻はそう軽々に結ばれて良いものではないッ！」
照れ隠しなのか素なのか、よく分からないテンションで叫ぶ防人が一人。
そして立花響はというと、実に微妙な顔つきになっていた。
この場にいる七人全員に求婚するという規格外。
そのことに不満を抱いている自分に気づいて愕然としていた。
なぜわたしだけだけに求婚してくれないの？

同時に、未来だけに向けた求婚ではないということにホッとしている。
今の響は、全くの矛盾する気持ちに翻弄され、どんな表情を浮かべていいのか分からない。
「おぬしたちは、吾が生きてきた時の中でも珠玉の如き女性（にょしょう）たちよ。どうか、吾と契りをかわしてくれぬか？」
「ち、契りなんて、そんなッ！」
率先して身体をくねらせるマリアを、クリス以下の年少チームは少し冷めた眼差しで眺める。
それから皆して顔を見合わせたのは、翼が言明した通り軽々に返事が出来る申し出ではないのだから当然と言えた。
そんな空気の中へ投入される更なる爆弾。
「未来からは既に了承を得ているからな」
「!?」
思わず親友の方を見て、響は絶句。
恥ずかしげな笑顔を浮かべる未来の左手薬指には、既に銀色の光が輝いている。
「み、未来ッ!?」
「ごめんね、響。もう私は、身も心もご主人様（マスター）のものだから…」

「そんな…ッ!!」

吸血鬼に吸血されれば、その眷属になるしかないと聞く。

だが、未来は果たして従僕的な意味でその台詞を口にしたのだろうか？　それとも――。

絶望的な顔色になる響に、しかし吸血鬼ダイスは優しく語りかける。

「なに、そんな顔をするではない、響よ。おぬしも吾の伴侶となってくれれば、永久（とこしえ）に一緒にいられるぞ？」

その言葉は、蠱惑的なまでに響の脳裏へと染み込んでいく。

そもそもの親友へ抱く思いもあれど、初めて〝異性〟へと抱いた焦がれるような感情もある。

彼の申し出は、そんな相反すると思われた二つの感情を、肯定し、まとめて全て包み込んでくれるのではないか？

そしてひとたび頷けば、それは叶えられるだろう。

根拠もない直感だが、不思議と信頼できる。

結果、抗いがたい衝動が湧き上がってくるのを止められない。

響が、その細い首を縦に振ろうとする寸前――。

「ちょっと待って。永久（とこしえ）に、って言ったわよね？　まさか、わたしたちも貴方の眷属にな

れと？」
　鋭い目つきでマリアが声を上げていた。そこには先ほどまでの乙女チック全開を伺わせるものは微塵もない。
「嫌か？　今の若さと美貌を保ったまま、世界の終りまで見届けることが出来るが」
　古来より、不老不死に憧れなかったものは少ない。それは歴史が証明している。
　時の権力者は、築き上げた財貨、美貌、叡智を永遠に維持するため、不死の法を手に入れいるべく奔走した。
　錬金術や仙道などの秘奥も、突き詰めれば不老不死の存在へ至ることにある。
「…切ちゃん。もし不老不死になれたら」
「うん。これから出てくる面白いマンガも美味ぇもんも、読み放題食べ放題デ～ス!!」
「……」
　調と切歌の会話はやや卑近なレベルだが、不老不死を得る理由の一つにはなりえるだろう。
「…悪くない取引ね」
　マリアがにやりと笑う。
　おいッ！　と突っかかろうとするクリスを翼が制する中、マリアの声は続いている。
「なにやら凄い力を行使できる吸血鬼様なら、嫁入りするにあたってオプションの上乗

せとかもしてもらえないかしら？」
「ふむ？」
　面白げにダイスは笑う。
「よかろう。何を望む？　この世の宝石を全て集めて纏わせても良いし、黄金の宮殿でも建てるかや？」
「悪いけど、物欲は薄いタチだから」
　悠然とマリアは応じ、不意に微笑を浮かべていた顔を引き締めた。
「わたしが望むのは、セレナとマムの復活よ。二人を生き返らせてくれるなら、貴方に這いつくばって死ぬまで尽くしてあげるわッ」
「――――」
　吸血鬼は沈黙する。
　やっぱりね、と言うような、それでも少し無念そうな溜息をつくマリアを押しのけて、クリスも参戦。
「あたしもマリアと同じさ。パパとママを生き返らせてくれるなら、喜んでアンタの妻なり下僕にでもなんでもなってなんよ！　でもさ、無理なんだろ？　いくら吸血鬼っても、死んだ人は甦らせられないんだろッ!?　だったら――――」
　そこでクリスは指輪を床に落とす。毛足の長い絨毯に阻まれ音はしなかったが、光を

反射するそれは一人ぼっちの星のよう。
「正直、あたしがしたことを償うために、永遠に生きて戦い続けるって選択もありかと思ったよ。でも、そんなの誰も赦しちゃくれないんだ。あたしのせいで死んだ人たちへは、あたしがちゃんと生きて、死んで、それからあの世で詫びなくちゃな」
続いて、また一つ星が増えた。
風鳴翼が迷いなく立つ姿に、凛と剣のシルエットが重なる。
「盛者必衰。形あるものは滅びてこそ自然の理は完成する。それに――――先に行くものが幅を利かせたままでは、後に続くものは正道に立てないだろう？」
最後の皮肉気な台詞は、おそらく祖父を意識したものだろう。
「わたしも、今のまま不老不死になるのは嫌かな。だってまだ成長期だし」
そういって指輪を転がす調。
「…う～ん、調がそういうなら付き合うデスよ！」
未練ありげに、それでもさっぱりと指輪を落とす切歌。
微笑を崩すことなくその光景を眺めていた吸血鬼ダイスだったが、浮かぬ顔をしている黄色いドレス姿の上で視線を止める。
「響、おぬしはなんとする？」
「わたしは…」

拳はきつく握られ、微かに震えている。
この少女にしては珍しい逡巡がその姿から見て取れた。
だけに、他の装者たちより驚きの視線が注がれている。
「おい、おまえまさか…」
「わたしはッ！」
見兼ねたクリスの声を遮るように響は声を張っていた。
「わたしは、出来るなら、ダイスさんと一緒に行きたい。行ってみたいですッ！」
「な…ッ」
装者の誰もが目を見張る中、響は強い視線で吸血鬼を見上げている。
しかし即座に声と一緒にその顔は伏せられた。
「でも、同じくらい、未来を返して欲しいんです…ッ!!」
「なるほど、おぬしの気持ち確かに受け取ったぞ」
吸血鬼はニコリと笑って、
「だが、未来を返すことは出来ぬ」
「ッ！　そんなッ！」
「なぜなら未来は、吾と同じ存在になったのだからな」
「な…ッッ!!」

装者たちが一斉に気色ばんだのは、吸血鬼と血を吸われた人間の伝承を承知しているからだ。

ダイスは隣で目を伏せる未来の頭を愛おしげに撫でつける。

「あの時のことは詫びようとは思わぬ。あれしか未来を救う術はなかったからな」

向けられていた敵意の指向性が弱まる。

深淵の竜宮での惨状もまた、装者たち全員が承知していた。

重傷を負った小日向未来を救命するために、この吸血鬼の超常の能力は不可欠だったことを。

「そして、吾を滅したとて、もはや未来は人間には戻らぬぞ?」

「はあッ!?」

頓狂な声は、実に様々な意味を内包している。

件の吸血鬼伝承を踏まえてなお小日向未来が人間に戻れるであろうことを、未来本人を除く全員が確信していた。

そのために、吸血鬼ダイスを滅ぼすという選択を考えていたものもいれば、まるきり念頭にすらなかったものもいる。

弦十郎やエルフナインに期待する感情も残っていたし、幾つもの絶望的状況を覆してきた彼女たちにとって、今回もどうにか出来ると考えていた。なのに――――。

「未来は吾と同質の存在になったのだ。いかな伝承を用いても、繋がれた因果は断ち切れぬ」
目前の超常存在に断言する。
その衝撃は決して小さなものではない。
「…冗談でしょ？　冗談よね!?」
マリアの震える声に、ダイスは首を振る。
「紛れもない現実よ。ゆえに、先ほどおぬしたちにも言うたであろう？　吾と永久を生きて欲しいと」
ならば、響に示された選択は二つ。
人としての全てを投げ捨てて親友とともに従僕となり、永遠を生きる存在となるか。
胸の内の想い人たちへの感情を諦め、人間として二人を見送るか。
「！　で、でも、二人してどっか行っちゃうわけじゃないですよね？　わたしの近くで、わたしが死ぬまで二人で幸せそうにしてくれるなら…ッ！」
「残念だがそれも叶わぬ。吾には、避けえぬ〝死の眠り〟があるからな」
「で、でもそれってよ、単に吸血鬼特有の深い眠りのことなんだろッ？」
そう声を上げたのはクリスだ。
吸血鬼は不死の王とも呼ばれる存在であるがゆえに、著しく代謝を停止した〝死〟に

近い形で眠りにつく。
その眠りの誘惑には絶対に抗えず、映画や創作などでは、それは太陽の燦々と輝く昼間に該当し、ヴァンパイアハンターたちが敵陣へ乗り込む絶好の機会とされている。
逆に漆黒の夜であれば、その不死性はほとんど無敵の領域までに達する。ダイスが自称する夜の王の所以だろう。
クリスなりに、映画や文献で調べた成果がこれだ。
しかし、今度こそ吸血鬼は悲しげに首を振った。
「クリスや、おぬしが語るところは創作物に終始するもので意味が異なる。吾が言うところの〝死の眠り〟が指しているのは――吾自身ではない。おぬしら人間のことよ」
「ッ!?」
誰もが息を飲む中、もはやダイスの声は独白そのものだ。
「吾が一度眠りにつけば、生半なことでは目を覚まさぬ。眠りの期間は、今まで幾度も繰り返してきたが、最短でも５０年以内で目を覚ましたことは一度もない…」
いまや青い瞳に浮かぶのは、はっきりとした悲しみの色。
「幾多の人間と交わりを持っても、一度眠りに落ちて別れてしまえば、もう二度と会うことはないのだ――」
聞き終えるなり、その場にいた人間は、肩にどっと重荷を乗せられたような気がした。

何百、いや、何千年にも及ぶ出会いと別れ。
幾多の人間と良好な関係を結べたかも知れない。
だが、彼らと過ごせる時間は短い。
永久の命を持つ自分と違って彼らが短命であることを差し引いても、どの関係も全うできたわけではなかった。
眠り、目を覚ませば、心と通わせた人間も関係者も何もかもが死に絶えている未来。
長い刻を生きてきた吸血鬼が厭世的な気持ちになるのも理解できる気がする。
その虚しさと寂しさ。
想像しただけで、感受性の豊かな調などは涙ぐんでいるほどだ。
響をして鼻の奥がツーンとしているのを自覚している。
声を上げたかった。
だけど、声が出てこない。
いつも彼女が口にする、全てを回天させる言葉が出てきてくれない。
――――だとしても。
「おぬしらの気持ちは相分かった」
吸血鬼ダイスは、左腕に未来の腕を絡ませながら身を翻している。
その背中に声をかけようにも、なんとかけていいのか分からない。

響の胸が焦がれる。
行ってしまう。二人が行ってしまう。
でも、わたしには、何も…ッ!!
くるりととダイスはこちらに向き直る。
いつの間にかステージには豪奢な椅子が出現していた。
その玉座に腰を降ろし、傍らに妃のように未来を据え、赤き貴種にして夜の王は朗々と声を上げる。
「されど、おぬしたちを失うのはあまりにも惜しい。だが、努々(ゆめゆめ)おぬしらに叛意させることが叶うとも思っておらぬ。ならば――」
口角が持ち上がり、赤い唇から鋭い牙が零れ落ちる。
大吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラーは不敵に笑った。
「吾は、この世界の理の方を変えることにしよう」

１３．募集する吸血鬼

「世界の理を変える、ですって――――？」
マリアの射貫くような視線に、吸血鬼は答えない。
薄く笑っただけで、隣にある未来のむき出しの肩を抱く。
「そう焦るでない。ほどなくして、おぬしたち全員が知ることになるだろうから」
次の瞬間、未来ごと吸血鬼の姿は消えていた。
あまりに素っ気ない消失は、装者たち全員が思わず壇上へと駆け上がり、落とし穴でもあったんじゃ？　と厚い絨毯の下を確認してしまうほど。
「…本当にどこにいったのかしら、あの節操なしの吸血鬼は？」
さっそく憎まれ口を叩くマリアだったが、微妙に早口のままだった。
曲りなりにも求婚されたという事実は、少なからず彼女にとって衝撃的なものであったことがうかがえる。
「ともあれ、いつまでもこの格好のままで佇んでいても仕方あるまい」
一方でバッサリと切り捨てるような口調の翼は、自分を含めて仲間の姿を見回した。
全員が揃ってフリルもたっぷりのドレスは、間違いなく機能性を欠いている。

「…ああ、そうだな。とりあえず着替えようぜ」
微妙に名残惜し気にクリスがそういった。
率先して部屋を出ていく途中で、絨毯の上の指輪をちらりと見る。
だが、彼女は足を止めようとはしなかった。
「切ちゃん、行こう」
「あ、調！　待ってくださいデス！」
慣れないドレスの裾を持って小走りでクリスのあとを追う年少組。
続いて颯爽と翼が出ていけば、後に残されたのはマリアと響のみ。
そしてマリアは、響が常になく肩から力を落としていることに気づいている。
むしろ仲間たちが足早にこの場を立ち去ったのも、響の状態の変化に気づいたからだろう。
（…まあ、みんなしてわたしにこの子のケアを押し付けていったのは少し業腹だけどね）
「マリアさん…」
消沈した響が見上げてる。
「ほら、シャンとしなさいな。あなたらしくもない」
「でも、未来が…。もう人間には戻れないって…!!」
吸血鬼ダイスが言っていた。もはや未来も自分と同質の存在になったと。元に戻す

術はないと。
「狼狽えるなッ！」
　平手一閃。パン！　と響の頬が弾ける。
「ふざけたことを間に受けるんじゃない！　わたしたちが、どれだけの奇跡を手繰り寄せてきたか忘れたのッ!?」
「……」
　響は打たれた頬に手を当てている。
　その目には痛みの涙が滲んでいたが、浮かんでいた悲しみの色は見る見ると活気を帯びたものへと変わる。
「…そうー　そうですよね…ッ!!」
　何度も無理と言われた。絶対に不可能と言われた。
　絶望の檻に囚われ、心を完全に圧し折られてきた。
　――だとしても!!
　響はキッと唇を引き結ぶ。涙は完全に乾いている。
「そうよ。それでこそあなたよ」
　マリアはにっこりとして、
「さあ、急いで発令所へ報告に行きましょう。こういうときは、大人たちの知恵を存分に

借りるものよ?」

一方、発令所では、新たな問題が発生していた。
「司令!　深淵の竜宮から緊急通信要請です!」
危急を知らせる友里の報告。
「竜宮の深淵から、だとッ!?」
弦十郎は司令席を蹴立てて立ち上がっている。
この時、彼の脳裏に浮かんだのは実父の姿。
過日の大吸血鬼との戦闘で重傷を負った風鳴訃堂は、そのまま深淵の竜宮内で療養している。
すわ、親父がまた暴れ出したのかッ!?

その予想に、弦十郎の血の気がすっと引いた。圧し折られたアバラが疼く。
「通信繋ぎますッ！」
藤尭の声に続き、メインモニターが切り替わった。
そこには、管理責任者が額の汗を拭きながら困惑しきった表情を浮かべている。
背後で誰かが暴れまわっている気配はない。
されど油断は禁物とばかりに、弦十郎は静かに気を配る。
脱走した訃堂に脅されている可能性は皆無ではない。
『…実は…』
モニターの向こうで、管理責任者でもある所長の汗を拭いながらの報告は、幸いにも訃堂の脱走ではなかった。
しかしその内容は、弦十郎たちにも大いに困惑を齎すことになる。
「…竜宮内に保管してあった聖遺物が、全てなくなっているだとッ!?」

発令所に、制服に着替えた装者全員が集結した。
彼女たちの報告を受けて弦十郎は渋面を作る。
装者全員に求婚をしたという点も驚くべきことだが、小日向未来が吸血鬼と同質の存在となったという話の方がより深刻だろう。
「あの男は、未来くんが元に戻る術はない、といったのだな？」
「…はい」
弱々しい声だったが、はっきりと顔を上げて頷く響がいる。
彼女の内心を推し量りつつ、弦十郎は益々顔を顰めざるを得ない。
思い返せば、小日向未来の体内におけるテロメアの変化。
それこそが吸血鬼化の証明だったのだろう。
同時に、エルフナインと交わした会話を思い出す。
神獣鏡を使えば、あるいは体内の吸血鬼化した原因を除去できるかも知れない。
しかし、吸血鬼と化しているのは未来本人で、今のところ彼女は主人と仰ぐダイスに従属している。
ならば別のアプローチを———と思考を巡らせる寸前、弦十郎はカッと目を見開く。
「そのダイスは、どこに消えたのだ？」

「わっかんねえよ。いきなりあたしたちの前から、あの子ごと消えちまってさ」
　クリスが答える。
「それより司令。わたしはあのエロ吸血鬼が『世界の理を変える』って言っていたのほうが気になるんだけど」
　マリアの言に、弦十郎は「むう」と唸る。
「…あ！　アタシは分かっちゃったかも知れないデス！」
「切ちゃん、本当!?」
「えへへ、ダイスさんは、アタシたち全員にプロポーズしてくれたデスよね？　でも、日本では旦那さん一人にお嫁さんは一人が常識じゃないデスか！」
「うん、まあ、そうだね」
「つまり、ダイスさんは、日本でも一人でたくさんのお嫁さんを貰っても大丈夫なようにするんデスよ！」
　人差し指を立て、えへんと胸を張る切歌。
「…日本の法律改正を世界の理って言っちまうのは、ちっと話がセコすぎじゃねえか？」
　クリスは言う。
「それに、中東の方では一夫多妻が常識よ？」
　少々あきれながらマリアも突っ込む。

え～、違うんデス～？　と凹む切歌に軽く笑いを誘われるも、『世界の理』という言葉は吟味せざるを得ない。

チラリと弦十郎は横目でエルフナインの様子を伺う。

彼女と同化したキャロルは、かつて世界を解剖しようと試みている。

その時の『世界』と同じような壮大さを持ち合わせているように思えた。

「まあ、本人に訊くのが手っ取り早いんだが…」

口にしつつ、弦十郎はこちらから捜索しても発見できる確率は薄いと踏んでいる。

なにせ神出鬼没さは伝承の吸血鬼以上だ。

本気で逃亡されれば、追いつくことは不可能に違いない。

「もっとも、未来くんも一緒であれば、そう遠くへと行くとも思えん」

無駄になるやもと思いつつ、姿を消した吸血鬼の捜索を部下へと命じる弦十郎。

同時に、このタイミングでの深淵の竜宮からの聖遺物喪失の件についても思いを馳せる。

この緊急事態を装者たちへと伝えるか一瞬迷ったが、結局詳細を説明することにした。

「竜宮から、全ての聖遺物が…!?」

真っ先に気色ばんだ声を上げたのは翼だ。

「よもや、お祖父…いや、風鳴訃堂が？」
「被疑者は現在病室で大人しくしている。現時点ではシロだろう」
　弦十郎にそう返され、翼は喜んでいいのか安心していいのか微妙な顔つきになる。
「それで犯人は？」
「現時点では不明よ。カメラにもセンサーにも何も検知されてなくて…」
　マリアの質問に答える友里。
「はあん？　あの建物ん中には相当な数の聖遺物があったんだろ？　それを誰にも見つからずごっそり持ち出せるなんてことあんのかよ？」
　クリスの言は至極最もなものだ。
　すると、沈黙していた響が弾かれたような声を出す。
「師匠！　それはきっとダイスさんが盗んだんじゃあ…！」
「ああ、それはオレも考えなくもなかった」
　クリスの指摘した通り、深淵の竜宮自体の警備システムも大したものだ。
　加えて、あの施設は深海にあるので、盗むのはともかく運び出すだけでも大仕事となる。
　それを人目に付かず実行できるとあらば、もはや自然の存在ではあり得ない。
「そっか！　ダイスさんは自分のコトを大泥棒って言っていたデスよね!?」

切歌の台詞に、室内に微妙な空気が流れる。
誰もが先日に見せられたあの映像を思い出していた。あまりに荒唐無稽に過ぎて冗談半分に受け取っていたのだが。
「…用途はともかく、あれだけ大量の聖遺物を使えば、世界の常識を捻じ曲げることはできるかも知れません」
専用席でディスプレイに厳しい視線を注ぐエルフナイン。
彼女は深淵の竜宮に保管されていた聖遺物のリストを検索している真っ最中。
「なら、あいつの仕業で決まりじゃねえか？　エルフナインが言うみたいに、世界の理を変えるってのにも符号するしな」
「じゃあ、世界の理を変えるって、具体的に何をするつもりなのかしら？」
「それは知らねえけどよ…」
推察はいくらでも出来る。
だが、何か決定的な答えを出すには、逆に材料が多すぎた。
ともあれ、聖遺物の大量消失は大問題である。
弦十郎は日本政府と国連への速やかな報告と、今後の対応策を検討するために奔走。
エルフナインは深淵の竜宮の保管リストから、各種聖遺物の詳細を吟味し、起こりうるであろう反応を推察。

藤尭はエルフナインの分析を手伝い、友里は関係各部者への連絡と調整に余念がない。

この未曾有の事態に、装者たちも解散帰宅とは至らない。

一次待機のままローテンションを組んで、交代で休憩を取ることになる。

「…未来」

仮眠室のベッドに仰向けになり、響は呟く。

ひょっとしたら、寮の部屋に未来は帰ってきているかも知れない。

そんな期待も、既に派遣されている調査員からの報告によれば、寮の部屋に戻ってきた形跡はないとのこと。

また、念のため、彼女の友人関係や、立ち入りそうな場所、秘密裡に実家の方まで調査員は出張っていたが、目撃情報すらないとの報告も上がってきている。

「…もう、どこいっちゃったんだよ、未来」

最愛の陽だまりの行方不明。もちろん心配だったが、かつてノーブルレッドたちに未来が拉致されたときよりは不安は少ない。

なぜなら彼女の傍らには、あの吸血鬼がいるはずだ。

風鳴訃堂を一蹴してのけた光景を、響も目の当たりにしている。万が一にでも未来に物理的な被害が及ぶことはないはず。

なのに、響はギュッと胸の上を握る。
心を揺らす、かつてない感情。知らなかった感情。
これは――――妬む心。嫉妬だ。
ダイスに求婚されて嬉しかった。
出来ればついていきたい、といったのも嘘じゃあない。
だけに、そんな彼の傍らに未来(しんゆう)がいることが気にかかる。
吸血鬼の能力に未来が救われたことは理解している。その力のせいでベタぼれ状態になっていることも理解している。
その上で、響は思うのだ。
どうしてダイスさんの隣にいるのが、わたしじゃあないの？
「…はあ」
漏らした溜息は熱く重い。
きっと初めて自覚した恋心。
それは、かつてのガングニールの欠片より、深く心臓に突き刺さっている気がする。
綺麗だ、と面向かって言ってくれた。
可愛い、と褒めてくれた。
そして何より。

わたしを、過去のわたしも含めて助けてくれた――――。
文字通り心の中まで入ってきた吸血鬼の姿は、響の脳裏に焼き付いて離れてくれない。
風鳴訃堂の外道極まる要求に困惑する自分の拳を、やさしく解きほぐしてくれたダイスさんの手。
薄暗い仮眠室で響は頬に血を上らせて、たちまち表情を曇らせる。
『吸血鬼は死の眠りを避けられぬ』
悲しそうな彼の台詞が耳によみがえる。
それは、吸血鬼という超常的な存在に対する対価か。
ある一定周期で強制的に落ちる眠りは、最短でも５０年は目覚めることはないという。
もしダイスが死の眠りを迎えたら。
次に会える時は、下手をすれば自分は完全におばあちゃんだ。
でも、吸血鬼と同じ存在になった未来は、一緒に眠ってもずっと今の姿のままで――――。
彼への思い。
親友への思い。

もしかしたら自分だけが置いていかれるかも知れない寂しさ。
ならば親友を取りもどす？　彼への思いはどうなる？
色々な感情が様々に絡みあい、響の瞼からこぼれて枕を濡らす。
「…教えて。わたしはどうすればいいの？」
いつも寄り添ってくれる陽だまりはいない。
自分でもよく分からない涙をこぼしながら、暗い部屋で響は嗚咽を噛み殺すしかなかった。

吸血鬼と未来の行方は杳と知れず、三日が過ぎた。
この間、特に聖遺物関連の事件やアウフヴァッフェン波形も観測されなかったことに

より、さすがに切歌と調、そして響の三人は、本部から下船してリディアン音楽院に出席している。
ただし、行方不明の小日向未来は欠席のまま。
一応Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．サイドからの根回しで病欠としていたが、このまま事態が推移するようであれば誤魔化すのにも限界がある。
そろそろ未来の両親へも報告と説明が必要か――――などと、弦十郎が友里らと検討を重ねていた時だ。
その世界規模の不思議な出来事が起こったのは。

「…響さーん！　お帰りデスかー!?」
「あ、切歌ちゃん。調ちゃんも」
響が振り向く。その様子は、明らかに精彩を欠いている。
パタパタと走って追い付いてきた切歌と調は顔を見合わせると、
「今日、これからふらわーによって帰らないデスか？」
「わたしも切ちゃんも、なんかすごくお腹空いちゃって…」

どうデス？　といった具合に仲良く首を傾げてくる二人。
切歌はともかく調は小食だ。
そんな彼女らがこんな申し出をしてくること自体珍しく、さすがに響も気を使われていることに気づく。
（やっぱり元気ない風に見えるのかなあ。…こんなんじゃいけないよね）
ぴしゃりと両頬を叩いて気合を入れ、響は明るい声を出す。
「よーし、行こ行こ！　今日こそわたしは抹茶アンコ豚玉焼きに挑戦しようかなッ！」
「おお、あの伝説のぉ!?」
れっつごーデス！　とスキップする切歌に手を引かれ、響は空を見上げた。
晴れ渡った空に、ここ数日の間、もやもやとしていた思いが形になって行く。
…うん、決めた。わたしはね、未来がどこにいようとも…。
空に向かって手をかざす。そしてその手をギュッと握り締めた時だった。
「え!?」
空から、無数の白いものが降ってくる。雪かな？　と響は首を捻り、その異様さに目を見張る。
「あ…」
「なんデスか、これは!?」

調と切歌も気づいたらしい。
二人とも空を見上げ、そこから降ってくるものに、そろって驚きの表情を浮かべていた。
ひらひらと舞い落ちる白いもの。
それは、空一面を覆いつくすほどの無数のＡ４サイズの紙片だった。

後日、『奇妙な降雪（strange snowfall）』、略称ＳＳ事件と呼ばれるこの現象は、全世界で、ほぼ同時刻に観測されている。
約一世紀ほどの昔にあった大戦の頃、航空機よりこのようなビラを撒いての宣伝行為があったとの記録がある。更に少し時代を下って、デパートやイベントの宣伝としてのビラ撒きもあったらしいが、大量のゴミが発生するとの環境的な問題や、テレビやラジオといった他のメディアにとって代わられたこともあり、いつしか行われなくなって久しい。
かつてないほどの大量のビラが全世界規模で撒かれるということも異常だが、更に不思議なことに、地面に落ちたビラはそのまま溶けるようになくなってしまう。まるで雪

のように。
　そのくせ、手にとったビラはいつまでも消えることはなく、しかもその紙片は、表を見てもひっくり返しても、雪のように真っさらに何も書かれていないのだ。
　誰もが奇妙と首を捻ったのは当然で、この世界規模の異常事態はさっそくS・O・N・G・も把握するに至る。
　響たち三人が紙片を手に本部の発令所へ駈け込んできたのは、そんな世界中の情報がぞくぞくと集まってきている最中だった。
「し、師匠、これ！」
「おう、響くんか。状況はこちらでも把握している」
　弦十郎が腕組みして見つめる巨大モニター。
　そこにはいくつもの分割された映像が展開されていた。
　アメリカ。中東。ヨーロッパ。果ては北極、南極、アマゾンの空までに、無数の白い紙片が舞っている。
「これはどういうことなの!?」
　既に食い入るようにモニターを見つめていたマリアが叫ぶ。
「わからん。特に人体に害はないようだが…」
　そう弦十郎は応じておいて、発令所を見回す。

響たちが来たことにより、既に詰めていた翼らと合わせ、装者は勢揃いした格好だ。
「この謎の紙片の件もあるが、まずは諸君たちに伝えておかねばならないことがある」
弦十郎はそう口火を切る。
「！　ひょっとして、あの子の手がかりかッ？」
響より先に色めき立つクリスに、しかし弦十郎は答えない。
替わりに友里に向かって顎をしゃくれば、彼女が頷くとともにモニターの映像が切り替わる。
表示されたのは世界地図で、注釈つきのアイコンが幾つも明滅していた。
「司令、これは…？」
翼の声。
「…この三日間で、世界各国より極秘回線での通達が相次いでいてな」
弦十郎が説明することには、この映像は各国が秘密裡に研究、秘匿していた聖遺物の情報だという。
装者たちが一様に戸惑った表情を浮かべる中、真っ先に気づいたのはマリアだった。
「…ッ！　司令！　もしかして、世界各国でも聖遺物の盗難が相次いでいるってこと!?」
「そう、マリアくんのいう通りだ」
弦十郎の表情が苦々しいのには二重の意味がある。

一つは、未だ聖遺物を掻き集めているものの正体と目的が明確でないこと。
そしてもう一つは、あのシェム・ハとの死闘を目の当たりにしてなお、世界各国それぞれが聖遺物を秘匿し独自の研究を続けていたことだ。
人の身に過ぎた技術は、一歩間違えれば諸刃の剣となるというのに。
「まあ、それはそれとして、この紙きれはなんなんだよ、一体?」
「それは…」
首を捻るクリスに弦十郎が応じようとしたとき。
小柄な影が、皆の前に進み出てくる。
「この紙片に、その全ての答えが書いてあります」
静かに、神妙な面持ちで断言するエルフナイン。
「…でも、それは何も書いてないデスよ?」
切歌が訝しげな声を上げる中、紙片かざしたエルフナインの手が発光する。
光に炙り出されるように、たちまち紙片に浮かび上がったのは日本語だった。
「これは、錬金術師に向けて配られたビラなんです。しかも、読む対象の言語を自動的に設定してくれる特殊機能付きですね」
エルフナインの説明もそこそこに、皆が紙片を覗き込む。
そこには、明朝体でこう文字が記してあった。

錬金術師募集中

年齢：不問
勤務時間：８時～１７時（コアタイム）フレックスタイム制もＯＫです！
給与：完全歩合制
資格：錬金術師３級以上必須。当社へ瞬間移動できるレベルの方。
待遇：交全支給。服貸与。食事つき社員寮あり。

事業：聖遺物の研究全般
応募：アダム式電話でＴＥＬ後、履歴書を持参してください。
担当兼オーナー　ＭｒＤ・Ｔ
※電話した際は、ビラを見たと一言お願いします。
勤務地：日本国旧首都庁跡チフォージュ・シャトー
とてもアットホームな職場です♪

１４．掌握する吸血鬼

「このＭｒＤ・Ｔって童帝のことよね？　…なに考えてんのよ、あいつは!?」
「錬金術師を集めて何をやらかすつもりなんだ!?」
「やっぱり聖遺物を盗んでいたのはダイスさんだったデスね！」
「瞬間移動で出勤が条件なのに交通費全額支給…???」
　装者たちが口々に驚きも露わにする。
「諸君、落ち着け」
　弦十郎が大地に突き立つような太く鋭い声を放ち、皆の動揺を鎮めた。
「このビラを撒いたやつも、聖遺物を掻き集めていたやつの正体も分かった。
　なにより、やつのいる場所が判明したことが大きい」
「…チフォージュ・シャトー…」
　響が呟く。
　キャロル・マールス・ディーンハイムが世界を解体するべく作り出し、のちにシェム・

ハ復活の装置としての役割も果たした、シンフォギア装者たちにとって因縁深い場所だ。

「現在あれは、日本国土に不法投棄されているも同然だ。シャトー自体が聖遺物の複合体でもあるから、S．O．N．G．としても介在する名分が立つ！」

拳を手に打ち合わせて弦十郎は断言する。

あの自称大吸血鬼が何を企んでいるかは分からねど、日本国内における聖遺物を使用した行動の殆どは危険禁止行為に該当する。

シャトー内には世界中から収集した聖遺物に、そこに錬金術師を集めているとあっては、とても座視できる状況ではない。

――――ほどなく日本政府を通して正式な対処要請があるだろう。

そう思いつつ、はやる装者たちを落ち着かせる弦十郎。

「ですが、こうもあっさりと居所を晒したのは、あからさまにすぎませんか？」

翼が納得のいかない表情を浮かべる。

何かしらの罠の可能性が否定できない。少なくともあの吸血鬼が、何の思惑もなくこのような手管を用いるとは思えないのだ。

「翼の言う通りだ」

重々しく頷いた弦十郎は、対策を講じる意味でも、もっともチフォージュ・シャトー

に詳しいであろう人物に声をかけようとして――――。
「エルフナインくん？　…エルフナインくんはどこだ？」
「え？　さきほどまで、そこにいましたよね？」
狐につままれたような表情をする友里と藤堯。
装者たちも同じような顔つきで発令所内を見回すも、見慣れた金髪のエビフライのような髪型は見当たらない。
「…トイレにでも行ったんデスかね？」
切歌が首を傾げているのを横目に、弦十郎の野生の勘が囁く。
「…まさかッ!?」
ほぼ同時に、発令所のメインモニターがアラーム音を轟かせた。
半瞬遅れて藤堯の報告。
「都内でアウフヴァッフェン波形が感知されました!!　…これはッ!?」
「ダウルダブラ、だとッ!?」

首都庁跡チフォージュ・シャトー内玉座の間

「ご主人様（マスター）。進捗状況はほぼ１００％です」

「ふむ。想定以上だの」

未来の報告に、吾は微笑で応じる。

世界中より掻っ攫ってきた聖遺物に共鳴し、今やこの城は全盛期に等しい活性状態にある。

伴い、朽ちて傷ついた外観も、じきに癒えよう。

今こうやって玉座に付く吾であったが、分霊（みたま）たちは別室で幾つもの電話を受けるのに忙しい。

先ほど世界中にバラ撒いたビラ。それを見た有象無象の錬金術師たちが、こぞってここに来たがっている。

少しでも目端の利く術師であれば、いまや世界中の聖遺物がこの地に集まっていることを知っているはず。

もっとも、更に目端の利く連中は、吾が例のビラを撒く前にアポイントを取ってきて

おるがな。
現在のシャトーの修復は、先駆けて来訪を果たした錬金術師たちの手管による。
まあ、この城自体が聖遺物の塊なわけだ。それだけに興味は尽きまいて。
そういえば、連中のほとんどはパヴァリア光明結社に所属していたとか。
「…あのアダム・ヴァイスハウプトがここ最近まで生きながらえておったとはのう…」
吾の中に、遥か昔の感慨が蘇る。
アヌンナキの連中が寄ってたかって自分たちに似せて作った生命体。
傲岸で、向こう見ずで、身の程知らずな――――完璧なまでの人間の雛形。
そこまで自意識を育てておいて、「完璧すぎるから発展性が望めない。はい廃棄」なんぞと言われたら、吾だって反逆したくなるわ。
当時の吾も同じような境遇であったゆえ、すこぶる不憫に思えて逃亡に手を貸したのは、返す返す因果なものだ。
神代以降の歴史において、聖遺物を巡ってフィーネと鎬を削っていたらしいしな。
その挙句、恩讐の対象の一柱であるシェム・ハと相見えることも叶わず散ったのは、まあ、アダムらしいといえばアダムらしい。
つまるところ、彼奴はいくらあがいても神に及ばなかったわけだ。全ては神の掌の上に。

そういうことなのだろう。
ともあれ、錬金術の体系を編み、技術として蓄積させてきた手腕は賞賛に値しよう。
特に、彼奴の念話能力を発展させた固有術（ユニーク・スキル）、どこへでも電話機を出現させる術は便利なもので、さっそく吾が利用させてもらっていることは説明するまでもない。
「む？　どうした、未来？」
ふと顔を上げた吾は、未来が不安そうな表情を浮かべていることに気づく。
「ご主人様（マスター）…。本当にこれしか方法が…？」
吾は微笑んだまま未来の髪の一房を撫でる。
「おぬしの血を吸ったとき、既に賽は投げられたのだ。ならばあとは運否天賦よ」
もっとも運否天賦とは人の運命を天に任せるという意味だ。夜の王にして赤き基種である吾には当て嵌まらない。
つまりは、諧謔――ジョークのつもりだったのだが、未来の表情は晴れてくれぬ。
「でも…!!」
言いかける未来の唇の前に人差し指を立てて蓋をする。
「どうやら、招かれざる客が来たようだ」
その刹那、玉座の間の扉が大きく弾け飛ぶ。
もうもうと立ち込める粉塵の向こうに現れた影に、吾は大きな笑みを向けた。

「いや。真のこの玉座の主というべきか？　キャロル・マールス・ディーンハイムよ？」
「キサマ…ッ!!」
白衣を纏った幼子の容姿は、確かエルフナインと言ったか。
かの弦十郎の部下の一人だが、その実態はキャロルの肉体に予備躯体の精神が融合したものと聞く。
されど、今の彼女は、精神肉体ともにキャロルであろう。
「お初にお目にかかる――――と言いたいところだが、以前に幾度か顔を合わせたことを覚えているか、キャロルよ？」
イザークとかいう神仙の域に至りながら市井のために尽くす錬金術師がいるということで、物見遊山で足を運んだことがある。吾の正体を一目で看破したのはともかく、存外愉快で話の分かる男であった。
その後は幾度か酒を酌み交わす機会もあり、夜も更けると父親の膝で丸まって眠る幼子がいた。それがキャロルだ。
生憎と、間もなく吾は『死の眠り』につき、目覚めたのちにイザークが残酷に殺されたことを知る。
実に数千年ぶりに怒りが沸くも、恩讐を果たそうにも当事者たちは誰も生きてはおらぬ。

きっとあの幼子も、父親と同じ運命に殉じたに違いない。不憫な話よ。
そうだとばかり思っていたのだが、その娘が類い稀な錬金術師として素養を開花させていたとはな。
イザークとの死別が忌まわしくて、ここ数百年欧州全般に近づかなかったことが仇となったわ。
あの父の膝の上で甘えていた幼子が、よもや世界の腑分けを試みようとは大それたものよ。
その為にこのような城までこさえたのは、蛙の子は蛙と誉めるべきかの。
「知るか！　キサマのような変態吸血鬼と面識があったと思うだけで怖じけが走るッ！」
「そうか」
吾は苦笑で応じる。
予想通り、覚えておらぬと言うより、その時の記憶を無くしているのだろう。
膨大なアルスマグナを駆使するために、己の想い出を錬成燃焼させるなど、この吾をしても狂気の沙汰だ。
同時に、そうまでして力を求めしキャロルに憐憫の情が沸く。
「そこを退けッ！　その座にキサマが腰を落ち着けるなどと、許した覚えはないッ！」

されどキャロルの剣幕は、吾の感傷をも吹き飛ばす。
「未来は隠れておれ。危ないでな」
「わかりました」
未来がそっと袖に下がったのを見届けて、吾はキャロルへと向きなおる。
「確かに元はおぬしの居城だったかも知れぬ。だが、もはや管理もままならぬであろう？
替わりに吾が有効に使わせてもらっているだけぞ」
「四の五抜かすな、喧しいッ！」
ほう。放つ殺気に大気がビリビリと震えておるわ。
さすが単身でシンフォギア装者の六人と渡りあっただけのことはある。
肩を怒らせたままキャロルが異空間より取り出したものに、吾は懐かしさに目を細める。
「エオヒド・オラティルの黄金の竪琴か…」
ダウルダブラと呼ばれるその聖遺物を、吾は幾星霜ぶりに目にしていた。
脳裏に浮かぶは、赤ら顔の陽気な大男がその竪琴（ダウルダブラ）を掻き鳴らす姿よ。
かのダーナ神族の首長とは、いわゆる飲み友というやつで、ぶっ続けで何昼夜酒を酌み交わしたことか。

繊細な旋律と豪気な歌声が耳に蘇る。
されとキャロルは、切り裂き唸るような旋律とともにダウルダブラを分解、再構成してその身へと纏っていた。
シンフォギアとは違う体系で編まれた聖遺物を纏う技術で、確かファウストローブとか言ったか。
「そこを退けッ！」
キャロルの腕が翻り、竪琴の弦を模した鋼線が床を抉りながら迫る。
四方八方から襲いくる弦に絡めとられ、吾は思わず感嘆の声を上げてしまった。
「ほう。黄金の弦を一瞬で銀糸へと錬成したか」
「いかにキサマが吸血鬼といえど、細切れにされてまで無事でいられんだろう？」
己が指で銀糸を手繰りながらキャロルの口角は吊り上がる。
次の瞬間にはその小さな指が動き、吾の全身を一寸刻みで寸断した。
「――――ふむ。この程度のものか」
「なッ!?」
健在の吾を見て、驚愕の声を上げるキャロル。
すかさず腕を振るい銀糸の斬撃を繰り出してくるも、吾は意に介さずキャロルへ向かい歩み寄る。

別段、攻撃を躱しているわけではない。
切り裂かれた端から肉体を再生しているだけだ。
無数の斬撃を柳に風と受け流す。
膝が触れ合うほどの距離を詰めてから、吾はキャロルへと笑いかけた。
「おぬしも吸血鬼には銀の武具が効くと思っている類か？」
再三、吾は吸血鬼ではないと言っていたはずなのだがなあ。
「それに、おぬしは『奇跡の』殺戮者であって、『吸血鬼の』殺戮者ではない」
「…ッ！　そんな哲学設定などッ！」
なおダウルダブラの弦を振るおうとするキャロルの鼻先を指で弾く。
「!?」
顔を押さえ、大きく後ろに飛び退くキャロル。
盛大な涙目になっているのは、少々力を入れ過ぎたか？
されど文字通り鼻っ柱を圧し折ってやったわ、ははは。
「…殺す。キサマの身を分解して解き殺すッ！」
鼻にかかった声でキャロルは絶叫。
同時に、彼女の背後に四つのエネルギー球が浮かぶ。
「ほう。四大元素（アリストテレス）か」

錬金思想の初歩にして奥義。
この世の全ては火、水、風、地の四つの元素で構成されていると定義すれば、逆説的にそれらを用いてこの世の全てを解きほぐせる。
吾とて、この世界の根源の理には逆らえぬはずだ。
そう見込んだゆえのキャロルの切り札であろう。
「因果地平の彼方まで吹き飛ばしてやるッ！」
「怖い怖い。なれば、吾もとっておきを見せるとしようか」
「抜かせッ！」
四つのエネルギーの奔流が解き放たれ、吾へと迫る。

キャロルは激怒していた。

必ず、あの阿呆な吸血鬼を玉座から放逐すると決意した。
チフォージュ・シャトーは彼女の作ったワールドデストラクターである。
その役割を終えた今、いずれは人間の手によって解体されるであろう。
それは構わない。仕方のないことだと納得している。
されど、それが他人の手によって好き勝手に使われるなど、とても許せるものではない。
なぜなら、廃城と化したあの場所は、キャロルに仕えた騎士たちの墓標だからだ。
最後の役目を果たし終えた連中の眠る場所を他人に荒らされるなど、とても我慢できるものではない。
ゆえにキャロルは激怒している。
シャム・ハとの決戦後も、シコシコと脳内の電気領域より思い出を収集していたエルフナインへの感謝を、彼女の人格ごと封じ込めている。
脳内では必死に何事かエルフナインが訴えてきているが、端から耳を貸すつもりもなかった。
だが、それもこれも終わらせる。
四大元素のエネルギーを収束させて放つ必殺秘奥の『エレメンタルノヴァ』。
いかなヤツでも、これを喰らえば無傷ではいられまい!!

四つの光球より、風と水と地と火の属性を帯びたエネルギーが迸る。
それぞれの光線が、吸血鬼を名乗る変態を直撃して———
「馬鹿なッ!?」
キャロルが驚愕の視線を向ける先。

風のエネルギーは突如地面から出現した巨大な土壁に遮られた。
水のエネルギーは吹き付ける炎に残らず蒸発させられた。
地のエネルギーは鋭い風に切り刻まれて散った。
炎のエネルギーは氷塊へと閉じ込められて消えた。

それぞれが、相反する元素によって無効化されたのだ。
己に匹敵するほどの四大元素の放たれた方向を見たまま、キャロルは全身で驚きを露わにしていた。
なぜなら、彼女の凝視する先に立っていたものは。

「見かけよりショボい攻撃ですこと」
「派手に反逆。地味に従属」

「マスターには悪いけど、今はこっちのマスターがマスターなんだゾ」
「あらあらこちらのマスターは、アタシたちが望んだものがぺったんこ♪」

四つの原色。四つの属性。
かつてキャロルが造りし自動自律人形にして、彼女に忠誠を誓う終末の四騎士（ナイトクオーターズ）。

「なぜ、オマエたちがここにいるッ!?」

驚愕のまま彼女は叫ぶ。
チフォージュ・シャトーを墓標に見立てた通り、オートスコアラーたちの廃棄躯体が大量に眠っている。
ボディ自体が存在することに疑問はない。だからといって、以前通りに再製できるかどうか全くの別問題。
それが、全盛期もかくやという威容で連中は稼働している。
満を持したような揃い踏みに、さすがのキャロルも動揺を抑えきれない。
そもそもの連中の燃料たる想い出は、もはや微塵も残ってないはずで…。
「想い出も、『知』の一部であろう？　ゆえに、吾の『血』を与え、彼女らの不足する活力（エナジー）

を補ってみたぞ」
居並ぶ四体の向こうから、吸血鬼がニタリと笑う。
その笑みにすら苛立ちを覚えるも、己に刃向かう四騎士の首筋を注視し、キャロルはギリリと歯噛みの音を轟かせる。
全員の白磁の細い喉に、揃って穿たれている二つの小さな穴。
「キサマ…！　オートスコアラーの血を吸ったのか!?」
エルダーベリーで作られし人形の、躯体に流るる血は水銀。
いかな吸血鬼といえど、無機物など本来操れる道理はない。
「さすがおぬしの造りし人形よ。人の形であれば、人間の理の方へ存在と位相をズラすのも吝かではない」
「…ッ！」
戯れ言を、と言いかけた叫びをキャロルは飲み込む。
四騎士たちが吸血鬼を護るように立ちはだかっているのは明らかだった。
それがどのような哲学設定が働いた結果であることも理解している。
――――吸血鬼に血を吸われた存在は、吸った存在に従属する。どのような例外もなく。
キャロルの顔が一瞬だけ悲哀に歪んだ。

「…そこをどけッ！」
しかし即座に思考を立て直し、キャロルはダウルダブラの弦を振るう。
吸血鬼を倒せば、呪われた従属関係も全てご破算に出来るとの伝承を信じて。
ギンッ！
振るわれた必殺の鋼線は、ブレードソードで受け止められた。
「元のマスターに申し訳ありませんが、今のマスターへの無体はご遠慮くださいませ」
フラメンコ（サバティアード）の靴音を刻み、ファラがスカートの片裾を持ち上げながら優雅に一礼。
「くッ」
次の一撃を見舞おうとしたキャロルだが、後方へとたたらを踏むように飛びずさる。
先ほどまであった彼女の足場は、無数のコインで破砕されていた。
「地味に妨害」
広げた指の間にコインを煌めかせ、レイアが特徴的な立ちポーズを決める。
すかさずキャロルが態勢を整えなおそうとしたところに、巨大なツインテールの赤毛と緋が走った。
「ミカちゃんもホームランを決めて、明日はハンバーグだゾ！」
「ワケの分からないことをいうなッ！」
ギャリン！　とカーボンロッドを鋼線で受け止めてキャロルは叫ぶ。

同時に、激しいまでの戦いづらさを意識せざるを得ない。
そもそものオートスコアラーは、キャロルの権能を四大元素的に分割したものである。
相手で一体であれば、歯牙にもかからない。
仮に四体同時に相手どったとしてもオリジナルのアドバンテージは大きく、悪くて拮抗する程度のはず。
しかし今、その目論見は大きく崩れ去ろうとしていた。
間断なく繰り出されるオートスコアラーの固有スキル。
もちろんキャロルにとって難なく退けられる技ばかりだが、それが複数とあってはさすがに手こずる。
相殺するための文字通りに手が足りない状況は、直列処理と並列処理の対比そのままだ。
だが、たった一人で世界へ挑もうとした希代の錬金術師キャロルを侮るなかれ。
四色に染めあげられる激闘の最中に、それでも吸血鬼を打倒すべき一手を繰り出す。
「そこだッ！」
放たれる黄金の光線は、キャロルのみが操れる第五元素。
狙いすました一撃は、呑気に観戦していた吸血鬼へと命中し――――鏡のようにバラバ

ラに砕け散る。
「なッ!?」
「はっずれ～♪」
ギザギザの歯を斜めに歪め、手の中の氷で出来た鏡を弄ぶはガリィ・トゥーマン。
生み出される一瞬の虚。
ハッとキャロルが気づいたときには、すぐ目前に黒衣の吸血鬼の姿が。
「もう十分であろ？　趨勢は決しておる」
「…ふざけるなッ！　オレはまだ負けてはッ！」
「もうよい。頑張ったな、幼子(おさなご)よ」
その優し気な声音を耳に、キャロルの肩から力が抜けた。
一緒に激情まで消沈していく様に、キャロル自身が戸惑う。
「何も心配することはない。決しておぬしにとって悪いようにはせぬ」
なおも言葉を続ける吸血鬼に、安穏になって行く心に逆らいながらキャロルは怒声を上げる。
「キサマのいうことなど信じられるかッ！」
「ならば誓おう。おぬしの父イザークと、その友である名誉にかけて」
「!!　キサマは何を…!?」

なお睨みながら、突然キャロルの脳裏に一つの光景が像を結ぶ。
脳の中に散り散りになった電気信号が偶発で結びつき、思い返された失われた記憶。
おそらくその偶然性は、奇跡と称しても良い確率であったはずだ。
雪がしんしんと深い夜。
暖炉の前に座るパパの膝に頭を乗せ、ちろちろと踊る炎をうっとりと眺める自分。
時折、頭上で穏やかな笑いが流れていた。
何の話題なのかは分からない。
それでもパパが笑っているのを見るのが大好きだった。
そんなパパと向かい合ってコップを傾けていたのは――目前のこの黒衣の男!?
「キ、サマ、は…」
キャロルは目を見開く。急速にその面立ちは幼さを取り戻していく。
「…ラミィ、おじさん?」
どこか舌ったらずな声に吸血鬼はゆっくりと頷くと、ダウルダブラのファウストローブが解除されたその頭髪へと手を乗せた。
「今は眠れ、イザークの娘よ」
吸血鬼の双眸に映るキャロルの四肢から力が抜けた。ゆっくりと瞼も落ちていく。
「おぬしの所業を世界中の誰もがけなしても、吾だけは褒めてやる。よう頑張ったな、

キャロル」

完全に脱力した幼い肢体を抱きとめて、吸血鬼（ラミア）ことドラゴンタイガー・ダイステイラーはシャトーの高い天井を仰いだ。

「次におぬしが目覚めし時は、幾分か優しい世界になっていることを約束しよう――――」

その周囲には、四体の騎士が恭しく跪いている。

、

15．君臨する吸血鬼

S．O．N．G．発令所内は混乱の極みにある。
「おい、おっさん！　早く出撃命令を出してくれ！」
「そうデスよ！　エルフナインを助けないとッ！」
「待ちなさい！　いくら私たちでも、闇雲にチフォージュ・シャトーへ踏み込んでいいものじゃないわ！」
「マリアの言う通りだ。勝手知ったるキャロルならまだしも、無策で突入するのは我々にとって分が悪過ぎる！」
勇み立つもの。制止するもの。
そんな喧噪の中で、藤尭の悲壮な声が響き渡る。
「ダウルダブラの反応が消失しました……ッ！」
一瞬の静寂のあと。
「キャロルちゃんがやられちゃったの…？」
響が青ざめた顔を上げた。

平静なモニターが、何よりも雄弁な答えとなる。
「…くッ。なら、救出だ！　仲間を助けに行くってんなら、名分が立つだろ！　なあ、おっさん！」
しかし、腕組みをしたまま弦十郎は硬い表情を崩さない。
「先ほどの出撃は、エルフナインくん、いや、キャロルの独断専行だ。しかも、正式な出動要請の前とあっては…」
「だったら見捨てるってのかよ!?」
「そうは言っていない！　だが、現状を見れば、キャロルが人様の庭に手を突っ込んで返り討ちにあったという解釈しか成り立たんのだッ」
いくら特異災害タスクフォースといっても、無制限に特異に介入できるほどの独立権限は持たない。
むろん緊急時にはその限りではないが、現在のチフォージュ・シャトーは具体的な問題行動に至ってはいなかった。
つまるところ、日本国土であることを盾にまずは不法占拠という形で調査と査察を通告し、受け入れなければ強制執行というお役所的な流れを踏襲しなければならない。
かの悪名高き護災法もスピード廃案と相成った今となっては、凶器準備集合罪の拡大解釈も成り立たず、憶測からでの一方的な干渉はできようもなかった。

「じゃあ、どうするデス？」
「やっぱりエルフナインを見捨てるつもりじゃあ…!!」
切歌と調に詰め寄られ、苦渋の表情を浮かべる弦十郎。
そんな彼の耳に、いや、発令所にいた全ての人間の耳に、なんとも洒脱な声が響く。

「これ、あまり弦十郎を苛めるものではないぞ？　部下の見えぬところで計り知れぬ懊悩を抱えるが組織の長というものだ」

誰もが驚きの表情を浮かべて見つめた先。
ゆるやかに発令所の中の歩をすすめるは、かの大吸血鬼ドラゴンタイガー・ダイステイラー。
「…未来！」
その傍らに親友の姿を認め、響は叫ぶ。
「ど、どうしてここに!?」
「内外の全センサーには全く反応がありません！」

藤尭の驚愕と、友里の報告。
そんな二人を一瞥し、ダイスは鼻で笑った。
「吾はほぼ全盛期の力を取り戻しておる。さすれば、この船の内と外の全てを騙すくらい雑作もなきことぞ」
「…とはいえ、この船は、現在東京湾沖に潜行中なのだがな」
油断なく視線を向けながら弦十郎。
神出鬼没のダイスはともかく、未来まで伴って出現したことに戦慄している。
「いきなり現れて何を驚かせているのよ、このエロ吸血鬼!」
臆面もなく怒鳴りつけるマリアの度胸は、いっそ羨ましい。
「相も変わらず威勢ばかりは良いやな」
ニヤリと笑い、吸血鬼は何かを放る。
咄嗟に受け止めたマリアは、間もなく素っ頓狂な声を上げた。
「何よ、これ？　…退職願!?」
吸血鬼ダイスは弦十郎へと向きなおると、
「ま、そういうことだ。色々と世話になったな」
「…我々の庇護下から抜け出すという意味か?」
「如何にも。庇護される理由も義理も果たした。さすれば、あとは自由に振舞うだけよ」

「それがどうチフォージュ・シャトーへと繋がっている？」
　その問いに、吸血鬼は答えない。
「何、そう気色ばむな。吾はもともとおぬしたちと事を構えようとは思っておらぬ」
「だったらエルフナインはどうしたんだ、この野郎！」
「おう、そういえばあの幼子のこともあったな」
　いきり立つクリスを、涼しい顔でいなして黒衣を翻す。
　すると、吸血鬼の腕の中に、魔法のようにエルフナインが現れた。
「エルフナインちゃん！」
　くてっとしたまま目を閉じるエルフナインは、駆け付けた響の腕に委ねられる。
「吾が術をかけたゆえしばらく目を覚まさないだろうが、心配するな」
「え、えっと、その。…ありがとうございます！」
　吸血鬼は目を細め、エルフナインを抱える響の髪の毛を軽く撫でる。
「本当に気のいい娘よの、おぬしは。吾に出来ることはなんでもしてやりたくなる」
「だ、だったら！　未来も返して貰えませんか！」
　エルフナインを抱えた手に、そっと別の手が重ねられた。
「未来…」
「響、誤解しないで。わたしは決して無理やりご主人様（マスター）に付き従っているわけじゃない

の」
「で、でも…！」
「だから、その時が来たら、きっとまた会えるから。ね？」
　にっこりと笑い、未来は再びダイスの傍らに立つ。
「おぬしたちも世話になった。短い間だったが、皆息災でな」
　発令所を見回し、ダイスは言う。そのまま身を翻そうとする黒衣の主に、クリスが必死で追いすがる。
「おい、待てよ！　世界の理を変えるとか抜かしていたけど、いったい何をしでかすつもりなんだ？」
　すると、ダイスはニヤリと笑った。その問いを待っていたといわんばかりの満面の笑み。
「吾は、おぬしたち全員に求婚して、見事に振られたでな」
　この宣言には、居合わせた装者全員の頬が赤らむ。
「ゆえに吾は、おぬしたちの方から求められるように、この世界を変えるのだ」
「…え？」
　遠慮なくポカーンとした顔になったのは切歌と調のコンビ。
　言わんとすることは分かるが、抽象的過ぎて理解が追い付かないのだ。

「ともあれ、この船の中にいる皆々も歓迎するぞ。老いも病もない世界へ行きたいのならば」
吸血鬼は未来の細い腰を掻き抱く。
「ちょ、ちょっと！　待ちなさいッ！」
マリアの声も届かない。またしても二人の姿は忽然と消えていた。
発令所のほぼ全ての人間が呆気にとられる中、緊急を知らせるアラームがけたたましく鳴り響く。
「…これは!?」
「どうした、藤堯ッ!?」
叫び声を上げる部下に、弦十郎は詰め寄る。
「チ、チフォージュ・シャトーが浮上して移動を開始していますッ！」

「よ。どうした、ちゃんと飯食っているか？」
「クリスちゃん…」
響が顔を上げる。
彼女の手にもった茶碗のご飯がほとんど減ってないことに、クリスは内心で溜息をついた。
いま二人がいる場所はＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部内大食堂。
一人黙々とテーブルに向かい合う響は、なんとも近寄りがたいオーラを発している。
それを打破すべくクリスは声をかけたわけだが、次に響の浮かべた表情はどう見ても造り笑い。
「う、うん！　食べてるッ！　食べてるよーッ！　あ、これはお替り三杯目ねッ！」
そういって持っている茶碗を見せてくるも、お盆の上のおかずも手付かずだ。
（やっぱ重症だな）
心配極まりない内心と裏腹に、クリスは明るく笑って見せた。
「ならよ、晩飯はいっちょ外へ喰いにいかねぇか？　奢ってやる」
「…え？」

「他の留守番の連中も誘ってよ。それくらいならおっさんも許可してくれんだろ」
「わ、わーい！　楽しみだな～。これで午後の訓練も頑張れそうッ！」
応じて、響はご飯を口いっぱいに頬張り――それで箸を置いてしまう。
胡乱に瞳を彷徨わせ、それから響は今思いついたかのように言ってくる。
「ねえ、クリスちゃん。大学は行かなくていいの？」
「あん？　いまのところ単位は取れるだけ取っておいたから、全然大丈夫だぜ」
「そっか…」
「おまえこそ、ちゃんとリディアンに行っているのか？」
「うん、まあ…うん」
全く明朗さを感じさせない響の返事。
それもそのはずで、小日向未来と袂を分かってからもう一か月以上が経過していた。

一か月前のあの日、チフォージュ・シャトーが眩く輝いた瞬間に、何かが始まり何かが終わったようにクリスは感じている。
浮上したシャトーは、悠々と日本国土の上空を移動。
日本政府が具体的な対策を打ち出せないままに、シャトーは海上へと到達。

そのまま領海内を出ていかれては、もはや手の打ちようがない。
となれば、他国間の問題となりそうなわけだが、シャトーに公海域上空に滞在されてはどの国も手の出しようがなかった。
となれば正に国連の担当領域になるのだろうが、先ずるように世界規模のチャンネルで、現シャトーの主より盛大な一斉放送が発せられている。
『吾の名は、ドラゴンタイガー・ダイステイラー。偉大なる支配者の裔（すえ）にて赤き王種ぞ。今この時を置いて、吾の名において、この星における神秘を用いた全ての争いを禁じる!!』
その演説は、装者たちも発令所で目にしていた。
『市井の民をいたずらに傷つけぬことを、吾の名に賭けて誓おう。
されど、神秘を持って吾にまつろわぬとあらば、吾の名にかけてあらゆる手段を用いてこれに介入する。
…努々逆らおうなどと考えぬことが賢明ぞ。おそらく、その命を持って贖うことになるからな』
「なんだよ、それ！　アニメじゃねえんだからよッ！」
思わず板場弓美のようにクリスは叫んでいた。

反戦組織による、戦争を止めるための積極的武力介入。
父と母を奪った戦争そのものを憎んでいたクリスにとって理想的な組織に思えるも、やはりそれは絵空事だ。
続いて、画面越しに、ダイスが装者たち一人ひとりを眺めるように視線を巡らしたことの方がより印象に強く残っている。
『そして、吸血鬼たる吾に血を吸われたい者も大募集である。
永遠の命と若さが欲しいものは遠慮なく吾へ膝を屈するが良い！』

「それが本音かッ!?」
マリアが吠える。
頭髪を逆立てんほどの彼女の後ろ姿に、誰もが過日の吸血鬼の去り際の台詞を思い出していた。
「わたしたちに吸血鬼になるのを拒否られたから、他の全人類を吸血鬼にするつもりなの、あいつは!?」
怒りに肩を震わせるマリアの予想は、おそらく正しいのではないか。
「なるほど。まさに将棋盤をひっくり返すというヤツだな」
翼も賛同を示している。

つまるところ、装者たちがダイスの求婚を断ったのは、現状の世界に何かしらの未練が存在するから。

ならば、装者を除く全人類を吸血鬼化してしまえば、それらの未練の大変も取り除かれるはず。

もし成し遂げられれば、この星の価値観は変わるだろう。

まさに、この世界のルールを、理を変える行為だ。

「奴は、吸血鬼による永久王土を作るつもりなのか…？」

弦十郎をして、太い腕を組んで唸るしかない現状。

こんな時にもっとも頼りになるエルフナインは未だ昏睡状態のまま。

精密検査が施されていたが、吸血痕もなく、本当にただ眠っているだけのとのこと。

「…あたしたちはどうすりゃいいんだ、おっさん？」

クリスは尋ねる。他の装者たちも自分と同様に弦十郎へと視線を注いでいるのが分かる。

返答は長い沈黙の果てに。

「…警戒態勢を維持したまま待機だ」

「打つ手はなしってことかよ？」

挑発的な口調になってしまったことにクリスは気づく。すぐに後悔したが、一度口に

出してしまった言葉は取り消せない。
しかし、弦十郎が見返してきた瞳は、恐ろしいほど穏やかだった。
「みな、我々の本分を思い出せ。オレたちの仕事は特異災害から人類を護ることだ」
太い声が言外に告げてくる。あれはまだ『特異』であって災害ではない、と。
「だが――――」
弦十郎は腕をほどき、胸の前に拳を持ってくる。それから軽く目を閉じた姿に、一瞬哀愁のようなものを感じたのはクリスの気のせいだろうか？
そして、クワッと目を見開くと、弦十郎は音がするほど強く拳を握り締めて言った。
「もし奴が人類に害をもたらしたら、その瞬間に遠慮なく叩き潰すぞ！」

回想から立ち返って、一か月後の現在。
世界は驚くほどそのままだった。
弦十郎の意気込みに反し、ドラゴンタイガー・ダイステイラーは人類に仇を成していない。
むしろ、貧困国や発展途上国への食糧を始めた物資の提供を行っているほどだ。

これには、国連もその直属組織も、賞賛こそすれ介入すべき理由を見つけられないでいる。
同時に、人類同士の戦争も繰り返されていた。
だからといって、先の世界放送のような武力介入も行われていなかった。
ダイスも明言した通り、錬金術でも絡まなければ不介入らしい。
「そういや、先輩たちはそろそろ着く頃かな」
響に聞かせる風でもなく、クリスは独りごちた。
先日、翼とマリアは南米へと派遣されている。
未だ政情が安定しないバルベルデは、クリスにとっても因縁深い場所。
かつてバルベルデドキュメントを取得して一旦は落ち着いたかに見えたが、外部勢力やテロリストたちにとっての格好の逃げ場所のままだ。
そこで大規模な戦闘が勃発する可能性に合わせ、その陰に錬金術師やら残された異端技術の行使が示唆されていた。
ゆえにシンフォギア装者の派遣という運びになったわけだが、ここに来てクリスは妙な胸騒ぎを覚えている。
だが、敢えてそれを振り切るように、クリスは目前の後輩へと語りかけた。
「ま、何事もなけりゃ、そのままトンボ返りで戻ってくるだろうさ。それよか早く昼飯

喰っちまえよ。な？」

南米バルベルデ空港

「…暑いわね」

飛行機のタラップを降りるなり、マリアはハンカチで首筋をぬぐった。

サングラス越しに見える空は青く高く、太陽がギラギラと輝いている。

「体調が慣れるまで少々手間取りそうだ…」

珍しく翼も零す。

スポットライトの強烈な光を浴びるステージには慣れていても、燃え盛る太陽相手にはそうも行かないらしい。

日本とちょうど季節が真逆の南米バルベルデは、今が夏真っ盛りであった。

「まあ、それもこれもシンフォギアを纏えば気にはならないけどね」

シンフォギアのバリアフィールドは、纏う装者にとって最適の体感温度を保証する。

「とは言っても、お茶を飲んで涼む時間くらいありそうだわ。どうする？」
とのマリアの提案に、
「うむ、少しは旅の疲れを癒すとするか」
翼も頷く。
二人してクーラーの効いていそうなカフェテリアに足を向けたその時、大地を揺らす爆発音が響いた。
「ッ!?」
振り向けば、遠くにもうもうと立ち込める黒煙。
続いて蒼穹を轟いてくるは、紛れもなく銃器などが飛び交う戦火の音。
『翼！　マリアくん！　こちらでアルカ・ノイズの発生パターンを確認したッ！』
カナル型通信機より弦十郎の声。
「全く、一服する暇もないなんてね」
「到着したばかりで間が良いのか悪いのか…」
マリアと翼は互いに苦笑を交わし合うと、
「了解しました！　ただちに現場へ向かいます！」
異口同音に叫び、胸元よりギアペンダントを引き出しつつ走りだす。

Ｓｅｉｌｉｅｎ　ｃｏｆｆｉｎ　ａｉｒｇｅｔ―ｌａｍｈ　ｔｒｏｎ……
Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ…

戦塵が舞い燃え盛る空に、二つの澄んだ聖詠が木霊した。

同時刻　Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．発令所内

「天羽々斬とアガートラームのアウフヴァッフェン波形を確認！　間もなく戦闘区域で接敵します！」

友里の報告に、弦十郎はモニターを見つめたまま頷き返す。

「頼むぞ、二人とも…ッ」

そして間もなく発令所へと飛び込んでくる複数の人影は、クリスを筆頭にした響、調、切歌といった装者の面々。

「おっさん！　先輩たちが戦闘に突入したんだって!?」
大型モニターには、監視衛星経由で二人の戦う姿が映しだされている。
「すごい数のアルカ・ノイズデス…ッ!!」
切歌が声を上げる。彼女の指摘したとおり、夥しい数のアルカ・ノイズが犇めいていた。
「でも、マリアと翼さんが力を合わせれば、あれぐらいきっと大丈夫だよ！」
調は祈るように両手を合わせている。
そんな彼女の懸念は、命令を下した弦十郎も検討済みだ。
翼とマリアの年長組は、他の四人に比べて歴戦の装者である。
ある程度の不足の事態には十分に対応できるだろうし、未成年者と比して決定的な判断にも迷うことはないだろう。
そう信じて送り出した二人だったが、なぜか弦十郎は胸騒ぎを覚えている。奇しくもそれはクリスが抱いたものと全く同じだった。
だが、クリスと同様、不安は胸の内でねじ伏せ、表面上は平静を保たねばならない。
モニター上では、破竹の勢いでアルカ・ノイズが蹴散らされていく。
今回勃発した抗争は、例によって正規軍とゲリラの小競り合いなのだが、双方の陣営がアルカ・ノイズを使役するというある意味救いがたい状況が出現している。

ただノイズを駆逐するだけに留まらず、お互いの陣営にアルカ・ノイズを供給した連中と、大元の錬金術師たちも捕縛しなければならない。
これにはS．O．N．G．職員のみならず、国連軍の介入も予定されていた。
事後の後始末も考えるとうんざりするような作業量だったが、今はとにかくアルカ・ノイズだ。
「頼むぞ、翼、マリアくん…ッ！」
弦十郎がそう呟いて奥歯をかみ合わせたのとほぼ同時に、発令所内にアラームが鳴り響く。
「どうしたッ!?」
すわ、公海上で浮遊を続けるチフォージュ・シャトーに動きが？
それこそが、翼とマリアしかバルベルデへ派遣できなかった理由であり、他四名ものシンフォギア装者たちを従え、本部である潜水艦が領海内ギリギリに浮上している理由でもある。
しかし、友里の報告は、悪い意味で弦十郎の期待を裏切った。
「天羽々斬とアガートラームの適合係数が急速に減少していきますッ！」
「なんだとッ!?」

同時刻　バルベルデ戦闘区域

「くッ、身体が重い…!?」

最初に違和感を覚えたのは翼だった。

常在戦場の気構えを持つ彼女は、常に自身の健康には万全の注意を払っている。

真冬の日本から灼熱のバルベルデにやってきたところで、誓って体調なぞ崩しはしない。

にも拘わらず、手足の動きが自分の想定通りに動いてくれない。

普段であれば、纏っていることすら意識しないシンフォギアに重みを感じる。

「マリアッ！　おまえは大丈夫なのかッ!?」

「大丈夫だけど大丈夫じゃない！」

すかさず言い返してきたのは、きっと彼女も翼と同じ違和感を持っていたからだろう。

「手足が枷に繋がれているみたいに重い！　こんなの想定外よ！」
「…司令！　聞こえていますかッ!?　わたしたち二人とも、戦闘能力が低下中です！　こちらでは確認できませんが、アンチＬｉＮＫＥＲの使用された可能性も…！」
だが、通信機より聞こえてきた弦十郎の声は、常ならぬほど切羽つまったもの。
『いやッ！　それはおまえたちのギアがオーバーロードをしているのだッ！』
「オーバーロード…ッ!?」
過日のシェム・ハとの決戦後。
バーニング・エクスドライブというかつてない高負荷状態を発現したことも受け、エルフナインによって各装者たちのギアはメンテナンスを受けている。
もっともエルフナイン自身は櫻井理論に精通していないため、本格的なオーバーホールまでには至らない。
シンフォギア自体が、元々の櫻井了子が作り出した一種の異端技術に近いものであり、彼女以上に扱える人間は存在しない。
そこで、ギアを共同開発をしたとされるドイツのアーネンエルベ機関より技術者を出向してもらって対処を行い、一応の体裁を確保していた。
万全とは言い難いことは承知していた。
それでも訓練時には何の異常も見られなかったし、豆々しくエルフナインも手を入れ

てくれていた。
それがここにきてのオーバーロードは、やはりかつての神との決戦の激しさの証左だろう。
翻って、最高最悪のタイミングであるとも言えた。
どうにか対応出来そうなエルフナインは未だ昏睡状態で、他の装者たちを救援に向かわせようにも、とても間に合いそうもない。
弦十郎の声が焦りを帯びるのも当然のことといえる。
そんな司令の声を耳にした翼とマリアも、さらに輪をかけた焦燥感に襲われていた。
散々に蹴散らしたとはいえ、アルカ・ノイズの数は未だ膨大。
こんな戦場でシンフォギアがオーバーロードで解除でもされたら、万に一つも生き延びられる可能性は存在しないだろう。
「…マリアッ！　無念だが、引くぞッ！」
「了解！　…本部、聞こえますかッ！　一旦、わたしたちは戦闘区域外へ脱出して…！」
瞬間、翼もマリアも、何かがひび割れるようなピシっという音を聞く。
ギアの表面が見る見る光沢を無くしていく様に、二人とも本気で顔色を失った。
「急げ、マリアッ！」
「わかっているわッ！」

無様でも構わない。ここは一刻も早くこの場を離れないと…！
脱出経路を模索すべく首を巡らし、翼の視線は凍り付く。
彼女の視線の先には、一台の戦車が存在し、今まさにその砲塔はこちらに狙いを定めようとしているところ。
正常に稼働しているシンフォギアであれば、榴弾の一つや二つ物ともしない。
しかし今、あれを撃ち込まれれば…！
「マリアッ！」
翼がマリアに飛びついたのと、戦車の砲塔が火を噴いたのはほぼ同時。
撃ちだされた榴弾は、半瞬前まで二人がいた地面を抉るように吹き飛ばす。
生身の人間であればその衝撃だけで即死しただろうが、停止寸前のシンフォギアは辛うじてその纏い手たちを護り切った。
代償は、完全なシンフォギアの解除。
S・O・N・G・の制服姿に戻った二人は、盛大にゴロゴロと地面へ転がることに。
「…無事か、マリア…？」
「どうにかね…」
泥だらけの顔でマリアは上体を起こしたが、翼は地面に横たわったまま。
「すまない、足をやられた。どうかわたしを置いておまえだけでも…！」

すぐ背後にアルカ・ノイズが迫る。
「ふざけたことをッ！」
立ち上がったマリアは、ふらつく足取りで翼の元へ。どうにか彼女を抱え起こそうとするも、衝撃に震える腕に力が入らない。
「…マリアッ！」
翼の声に見回せば、周りはアルカ・ノイズに囲まれていた。
「…ここまで、なの？」
マリアが呟く。
容赦なく迫りくるノイズの群れは、愁嘆場も友と語り合う時間も与えてくれない。
マリアは咄嗟に翼の上へと覆いかぶさる。
その身体を抱きしめ返しながら、翼の脳裏には見知った男性の顔が浮かぶ。
――――――緒川さん…！
「……？」
いつまでも訪れない衝撃とその時に、おそるおそるマリアは顔を上げる。

彼女たちを囲む格好のまま、全てのアルカ・ノイズの足は止まっていた。
いつの間にか、それぞれのノイズの表面には、縦横無尽に直線が引かれている。
その線に合わせ、ゆっくりとノイズたちの身体はスライドして崩れ落ちた。落ちる先から次々と塵へと返っていく。
「な、なにがどうなって…？」
同じく顔を上げた翼と並んでマリアは見た。
雲霞の如きアルカ・ノイズの群れを次々と双剣で切り刻んでいく人影と、巨大なコインを生成し戦車を文字通り叩き潰す人影を。
そして二つの影は、地面で茫然と抱き合ったシンフォギア装者たちの前に静かに降り立つ。
「…バカなッ！　おまえたちは…!!」
マリアの驚愕の声は、戦場に不釣り合いなフラメンコの靴音（サパティアード）で掻き消された。

「お久しぶりねえ、剣ちゃん」
「派手に登場、地味に救出」

自動自律人形（オートスコアラー）、ファラ・スユーフとレイア・ダラーヒムがそこにいた。